

魔法少女まどか☆マギカ [外編]英雄の物語

クウキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、鹿目まどかの願いで世界は一変。

絶望が呪いを生む運命は消え去り、唯一前の記憶を持つ暁美ほむらは、鹿目まどかと会える時を想いながら戦い続けていた。

そんな彼女らの前に突如現れたのは、人を襲う異形の怪物と、謎の力の数々でそれと戦う、門矢遊星と名乗る男だった。

目次

第一話	偽物のJ／バーサーク・デカレット	1
第二話	戦士の邂逅	20
第三話	正義ノマヨイ	36
第四話	協奏曲 音を愛するリトル・マーメイド	48
第五話	理由	73
第六話	失われた昨日へ	114
第七話	疑念と信頼とほむらの欲望	144
第八話	燃える焰と未来と決意のコンボ	173
第九話	時空を超えて	211

第一話 偽物のJ／バーサーク・デカレット

深夜二時。

普通の人ならとつくに布団の中で安らかに眠り、とつくに外を出歩いてはいないだろうその時間だが。

見滝原と呼ばれる街では、とある存在が闇夜の中を駆け抜け、もう一方の自身を追ってくるその存在から逃げていた。

暗闇を照らす街灯は、人間離れた速度を出している逃走者の姿を照らし出す。

それは、明らかに人間とは言い難い姿をしていた。

最初に目につくのは、その鋭利な爪。その爪を本気で振るえば、普通の人間ならただでは済まないだろう。決定的なのは、口から伸びている、これまた鋭く、いかにも強固そうな牙。二本生えているそれはアクセサリー等ではなく、真正銘本物の牙だった。

体のいたるところからネコのように毛が生え、まるで太鼓に絶滅した生物であるスミロドンを思わせるであろうその見た目は、明らかに人ではない。

——腰にベルトの様なものをつけているその存在の名は、スミロドン・ドーパントといった。

とても俊敏な動きができるその怪物は、その特性を活かし、タワーのように地面を駆け抜けてとある存在から逃げていた。ある組織では幹部の一人に数えられている実力者にも関わらずだ。

と。後ろから追ってくる気配が無くなったのを確認し、スミロドンは足を止める。

——が、しかし。振り返った体を正面に向かせて、身を凍らせた。

「——追いかけてこは、終わりにするぞ」

前方に、一人。街灯に身体を預け、腕を組んでスミロドンの方を向いている人間がいた。

着ているのは、どこかの高校の制服だろうか。髪は後ろでゴムを使って一纏めにされ、顔立ちは平凡、といった所だろう。髪が長いので女かと思われる見た目だが、声からしてどうやら男らしい。

それだけなら、まだいい。「ミュージアムの処刑執行人」と呼ばれたその実力を使えば、普通なら一瞬で相手を仕留めることが出来るだろう。

しかし。問題は、その男の腰に付いているそれだった。

黒い帯で腰に取り付けられ、赤い塗装を中心に塗られているベルト。よく見ればL字にも見える形をしているそれは、何かを入れるような差込口がある。

「ロストドライバー」と名付けられているそれは、「ドーパント」であるスミロドンには恐怖すべき物だった。

もう逃げる事が出来ない事を悟ったスミロドンが、戦闘態勢に入る。

それを見て、男もどこからか取り出した、Jと描かれているUSBメモリにもよく似たそれ——「ジョーカーメモリ」を構え、それを差込口に挿入した。

「やる気になってくれたみたいだな。それじゃあ——変身」

『JOKER!』

変身、というやる気のない掛け声と同時に、ロストドライバーのメモリが差し込まれている部分を傾ける。

メモリに内蔵されているボイスがメモリの名前を宣言すると、青年はその姿を「異型」にへと変えた。

基本カラーは黒で、その頭部からは二本の白い角が。胸部から両肩へ伸びている紫のラインは、まるでWという字を表しているかの様だ。

「俺の名は——少なくとも、仮面ライダーではない。さて、行かせてもらおうか」

青く美しい星『地球』はその美しさからか、よく悪を呼び寄せる性質がある。だからこそだろう、とある世界の地球にはよく悪の魔の手は迫っていた。彼らの目的は時には地球の資源。時には世界征服。

また時には、人類の殺戮。

時には、と称したのは地球に惹かれたのは一つの勢力だけではないからだ。

世界征服を実行するため、人類抹殺を目論む黒十字軍

世界を醜く歪め、混乱を振り撒く為に異次元世界からやってきた邪電王国ネジレジア

自身の主を復活させる為に人々の「恐れ之力」を求める牙鬼軍団

世界征服を企んでおり、後に幾度と無く、時には名前を変えて復活した秘密結社シヨツカー

殺人ゲームを楽しみ、自分に課せられたルールを厳守して遊び気分
で人間を殺す戦闘民族グロンギ

人間になることに対して強い憧れを持ち、しかし人間によって在り
方を変えられてしまった機械生命体ロイミュード

今挙げたのは一部に過ぎない。他にも多くの大規模組織や独立し
た生命体等の、所謂「悪」と呼ばれる存在がこの蒼く美しい星を襲っ
ていた。

——しかし。悪がいるところには、同時に正義も存在する。

この畏れ多き存在達から、地球を。人々を。自分たちの守りたい
「何か」を守ってきた戦士達がいた。

例外はありつつも、基本的には五人の力を合わせて巨大な悪と戦う
スーパー戦隊。

怪人とよく似た力を持ちながらも、その力を正義として使う仮面ラ
イダー。

所謂「正義」と呼ばれるこの二つの存在は、幾度と無く立ち塞がっ
た悪をそれと同じ数だけ跳ね除けた英雄だ。

英雄。言い換えれば正義の味方。弱きを助け、強きを挫く。
——しかし、それは力の使いようにもよる。

その力の使いようでは、英雄にも、巨悪にもなれるだろう。

スミロドンが爪を合わせて放ってきた光弾を素手で弾くと、ジョー

カーはその場から飛び出し、一気にスミロドンとの距離を詰めてきた。

50メートルは離れているであろう所から、一瞬でだ。

一気に距離を詰められたスミロドンは、それに驚きながらも冷静にその爪を振るう。振るわれた全ての爪が、少なくともジョーカーで変身しただけの人間には見えないレベルの速さであるのに、それを捉えられるのが、今仮面ライダージョーカーに変身している彼だった。

「ふっ！ はあっ！」

ジョーカーは振るわれた爪全てを避けるか、腕で受け流して防ぐか、攻撃を物ともせず。その仮面の下では、表情を眉一つ動かさず、まるで攻撃をどうとも思っていない様だった。

そして中々攻撃が当たらず次第に苛立っていき、我慢の限界だったスミロドンは、その身を貫こうと爪で突く様に拳を放つ――が。

少なくともこれまでのどの攻撃よりも遥かに速かったその攻撃は、ジョーカーが爪を驚掴んだ事で、その攻撃は本人の意に反する形で止められた。

そのまま爪を掴みながら、何度も膝蹴りをスミロドンの身体に叩きつけるジョーカー。何度も何度も叩きつけている膝蹴りは、その程度では傷もつかない筈のスミロドンに対して間違いないダメージを与えていた。

「……………これもくらっつけ」

突き飛ばす様にしてスミロドンの爪を離れたジョーカー。おまけと言わんばかりの、鋭い蹴りが叩きこまれ、スミロドンは後方に吹き飛ばされるが、何とか受け身をとって体性を立て直す。

この一分にも満たない攻防で、スミロドンは圧倒されていた。こちらの攻撃全てを読み、そして的確に攻撃を仕掛けることのできるジョーカーに対し、スミロドンは内心恐怖を抱いていた。

——もしかすると、自分よりこの仮面ライダーの方が「化物」なのではないか、と。

『JOKER！ MAXIMUM DRIVE！』

「ライダー……………キック」

そう思った瞬間には、もう遅かった。

すでにジョーカーは右腰に取り付けられている『マキシマムスロット』に、ジョーカーメモリを入れ、所謂必殺技と呼ばれる物の体勢に入っていた。

メモリのアナウンスが鳴った後、ジョーカーの右足に、紫のエネルギーが蓄積され始めると、その場から前方に飛び上がり、空中で蹴りの体勢に入る。

最早、スミロドンに打てる手は何もない。強大なエネルギーを纏ったジョーカーのライダーキックがその身を貫くと、その衝撃に耐え切れず、断末魔を上げる間もなくスミロドンの身体は『ガイアメモリが排出されずに』爆発四散、その後身体を残さず消滅した。

その場に残ったのは、ジョーカーのみ。風が音を立てて吹き、その場の静寂感を更に現している。無事に倒したことを確認したジョーカーがロストドライバーを外し、元の平凡な学生服姿にへと戻ると、それ程動いた訳でもないというのに、まるでマラソンを走りきった後の様に胸を手で抑えて息を荒くしていた。

「はあ……はあ……」

荒い息遣いはしばらく続くが、やがてそれが落ち着くと、何かに気付いたのか落ち着いた表情で辺りを見回す。

彼は、周囲に「何か」を感じ取っていた。彼の知っている物で例えるなら、その「何か」は魔力だろう。ただ、それ以上の事が分からない。魔力関連の「何か」が周囲にあるのは分かるが、彼の見渡す限りでは周囲に何もいない様子であった。

「仕方無い……帰る、か」

怠そうな声でそう彼が呟いた瞬間である。突如彼の前に灰色のオーロラが現れると、躊躇もなくその中に彼は入っていく。

やがてその場にいた者は誰もいなくなったが、疲労しきっていた彼では気付かなかつたのだろう。

彼がいた場所からすぐ近くのビルの屋上に、一人。綺麗な長髪を靡

かせ、女子学生の制服のようなデザインであり、紫を基調とした服を着ている彼女は、彼が灰色のオーロラを通って何処かに消えたその光景を目撃していた。

「……今のは、一体」

『どうしたんだい、ほむら？』

今見た光景に自分の目を疑っている彼女の後ろには、また一人……否、一匹。白い毛色の、紅い目を持つ猫が彼女に「テレパシー」で話しかけた。

猫にほむら、と呼ばれた少女はその存在が現れた事に若干の嫌悪感を感じながらも、振り返ってそれに話しかけていた。

「……いいえ、何でもないわ。それより、マミと杏子、さやかは？」

『どうやら他の場所に出た魔獣に対応しているらしい。それほど強い相手でもないだろうし、すぐに駆けつけると思うよ』

「そう。じゃあ、一足先に相手をさせてもらおうかしら」

ほむらが振り返った先。丁度、白い猫の後方に広がる風景には、静けさを保った街と同時に。明らかに、異質なものが街の風景に紛れ込んでいた。

一言で表すなら、長衣を纏った男の巨人、という所だろう。白骨化しているような体の所々にかかっているノイズが、その存在が「世界にいてはならない」といった存在感を表している。

魔獣と称されている彼らが街に何体もいる。そんな光景を目の前にしながら、ほむらは慌てる事なく魔力で黒き弓を形成する。

「……さて、行くわよ」

かつてたった一人の友達の為に、ほむらは幾度と無く同じ一ヶ月を繰り返し、何度も足掻いた。その果てに待っていたのがこの世界であり、ここでもまた戦いは続く。

ただ一人、記憶を「持ってしまった」ほむらは。いつかまた「最高の友達の笑顔」に会う為に、懐にしまっていた友達から受け取った赤いリボンをカチューシャの様に髪に結びつけ、弓を構える。

結ぶ前に何気なくリボンを見て、そういえば、と。目の前の魔獣の動きは見逃さないようにして、暁美ほむらはふと思った。

最近よく見る「救えなかった世界」の夢。その中で見るのは「もう見飽きた」場面ばかりだった。自分は「宿敵」の前に倒れ、白い悪魔は「彼女」と契約するという、もう何度も見てしまっていた所。

しかし、彼女が悪魔に願った「契約」の内容だけはよく聞き取れない。そこだけ風が吹いていた訳でもないし、ましてや「魔法少女」としての聴力なら風が吹いている中で普通に話していても十分聞き取れる距離であった筈なのに。

まるで、そこだけノイズがかかったように——と。ここまで考えたところで、思考を切り替えた。

いつまでも夢のことを考えていても仕方がないし、最早そこで彼女が何を願っていたようが関係無かった。

それは「前の世界」の話であり「新しくなった世界」には関係ないことだ、と。

「……私は頑張るよ、まどか」

戦い続ける事に思うところが無い訳ではない。しかし、彼女が「存在」を失ってまで守ろうとした世界を、今度は自分が守って行くべきだと。それを決意したほむらは、今日もまた夜の街で戦う。

いつか見た、「まどか」の笑顔にまた会えるその日まで。

『……頑張ってるほむらちゃんがいつか本当に困っている時に、私が助けてあげたい。それが私の願いだよ、キュウベえ』

街に蔓延っていた魔獣達を一通り倒したほむらは、他の場所に現れた魔獣を殲滅した仲間達と、ビルの屋上で集合して話し合っていた。

その場にいるのは、四人。髪型も服装もバラバラだが、ただ一つ。共通しているものがあるとすれば、それは彼女ら全員が「魔法少女」であることだった。

西洋風の上品なコルセットと白いブラウスに、黄色いスカート。ブラウスの胸部分にはそれと同じ色をしたリボンが付けられ、黄色い宝

石がついた花の髪飾りが頭部の右側に付けられている。一見優雅な印象を持たせ、おしとやかなお嬢様の雰囲気を全身から放っている金髪ドリルヘアーの彼女がバマミ。

女性らしさをアピールしつつも、いかにも剣士といった、彼女自身の性格を強調した凛々しい青い服。着用している白いマントが、更にそれらしさを強調している。ショートヘアの淡い青髪であり、いかにも男勝りの性格をしている、という風貌の彼女が美樹さやか。

神父服をモチーフとしたであろう真っ赤な服で、ノースリーブの上着の襟元には真っ赤な宝石が。真っ赤な長い髪の毛を黒いリボンで結んでポニーテールにし、どこからか出したポツキを口に加えて美味しそうに食べている彼女が、佐倉杏子。

マミはほむらと真剣な表情で情報交換をしており、さやかと杏子は会話の邪魔をしないように、と少し離れた場所で雑談をしていた。

「……人型の、魔獣？」

「ええ。人ではないのは確かだけど、とても強い相手だったわ」

「巴さんの実力ですら、そこまで言わせる相手だなんて……」

その内容は、先ほどマミが遭遇したという人型の魔獣について。

魔獣、というのは確かに人型だが。今回マミが遭遇した魔獣は、人とは程遠い異型の形をしていたという。鋭い爪に、獣の様な逆立った毛。まるで狼の様だったその魔獣は、実力者であるマミを相手に互角以上に戦っていたという。

万一、また他の場所で魔獣を倒していたさやかと杏子がマミと合流出来なかったとしたら、マミも危なかっただろう。

しかし二人が間に合った事で、人数的にも戦力的にも形勢逆転。どうにかその魔獣を倒し、丁度魔獣を倒しきったところのほむらと合流したので。

「美樹さんや佐倉さんが来てくれなかったら、危なかったかもしれないわね。二人共、助かったわ」

「ふん、今度からは油断すんなよな！」

「またまた、マミさんが大変だって聞いて一番焦ってたのは杏子

だった癖に」

「ちよ、さやかてめえ何を！」

「ふふ、ありがとう佐倉さん。美樹さんもね」

さやかの爆弾発言に、赤面しながら叫ぶ杏子。

微笑ましいそんな様子を見ながらも、クスクスと笑いながらマミは二人にお礼を言い、さやかはそれを「当然ですよ！」と元氣な返事をし、杏子はそっぽを向きながら「……無茶すんなよな」とツンツンした言い方をしながらも、そのお礼を素直に心の中では受け取っていた。

その行為が照れ隠しからくるものであることを、杏子を除いた三人は分かっていたので、それ以上その事に触れることなく話題を戻した。

マミがそうだ、という表情をし、二人の会話を近くで見ている白い猫——「キュウベえ」に尋ねることにした。

「キュウベえ、これまでそんな魔獣を見たことがある？」

『いや、これまでそんな魔獣が出たことは一度もない。僕はマミと一緒に居たわけじゃないからつきり見たわけじゃないけど、マミからの魔獣の特徴を聞いて判断する限りは、そんな魔獣を見たことはないね』

「……あの野郎、かなり腕の立つ奴だったぜ。あんな魔獣がいるなんて、な」

『杏子、魔獣と判断するにはまだ早いかもしれないよ？』

「え？ 何よそれ、私達が戦う相手は魔獣だけでしょ？」

魔獣と判断するにはまだ早い。その言葉をほむらが脳内で処理した瞬間、一つの存在がほむらの脳裏を過った。

希望を振りまく存在が魔法少女であれば、その対極。絶望を振りまく存在である魔女。かつての世界での魔法少女の敵であり、魔法少女達がいずれ到達するであろう成れの果てでもある。

——いや、そんな筈はない。確かに魔女は、彼女が存在ごと消し去った筈だ。

ほむらの額に、汗が流れる。それは焦りからか、かつての「トラウ

マ」からか。ほむらの様子がおかしい事に気付いた杏子が、声をかけた。

「おいほむら、大丈夫か？ 凄い汗かいてるじゃねーか。風邪でも引いたのか？」

「……いいえ、大丈夫よ。それよりキュウベえ、魔獣と判断するにはまだ早い、とはどういうこと？」

『簡単な話さ。また別の敵、という可能性が高いというだけだよ』

「別の敵？ キュウベえ、それは一体……」

『マミ、一つ質問がある。その魔獣、グリーンフキューブは落としたのかい？』

「え？——あー！」

マミの表情がそうだ、とでも言いたげな顔になり、杏子とさやかも同じような表情となる。そう、マミはこれまでとはまるっきり別の異質な状況に囚われて気付いていなかったが。

魔獣が倒されれば必ず落とす筈の、グリーンフキューブをその魔獣は落としていなかった。魔獣の手下の可能性も考えられなくはないが、あの強さで手下というのはまずありえないことだった。

『そういうことさ。つまり、マミが遭遇したという存在は魔獣ではなく、その正体は——そうだね、怪しげな存在で人に近い風貌。怪人としても名付けようか——怪人だった、というわけだね』

「怪人……!?!」

『実際その可能性は高いと思うよ。それが一体どういった事情で現れた物なのか、僕には分からないけどね。実際に怪人と会ってみれば、魔獣と関連がある物かどうかは分かるだ——マミ、上だ!』

「ッ!?!」

言葉を切らしたキュウベえの叫びに、咄嗟に反応できたのはベテラシンだからか。マミが地面を蹴飛ばし、後ろに飛ぶ。刹那、上から飛来した幾つもの光弾が、マミが一瞬前までいたその場所を吹き飛ばした。

「……まったく、今日はどれだけ倒せば気が済むんだ」

警戒体制に入ったマミ達の前に降り立ったのは、怪人ではなく。

全身を包む赤に、胸に刻まれた「1」の数字。手に握られている二丁拳銃を、その存在はマミ達に向けて構える。

かつて地球を守ったスーパー戦隊をよく知る者が見れば、その存在がだれか一目で分かるだろう。マミ達に銃口を向けているのが、かつて非常な悪事を憎み、地球を脅かす宇宙人の犯罪者「アリエナイザー」と戦った戦隊。

「特捜戦隊デカレンジャー」の一人、デカレッドであることを。

「貴方何者？ 魔法少女では、無さそうだけど……」

「……」

マミの問いかけに、まるで聞こえていない様子のデカレッド。無言で引き金に指をかけると同時に、マミも動いた。

手慣れた手付きで自身の武器である「マスケット銃」を二丁魔力から形成すると、それを両手でデカレッドに向けて構える。

それと同時に動いたのは、マミと同じくベテランである杏子とほむら。それぞれ自身の得物である、杏子は「槍」を、ほむらは「弓」を形成すると、それを構えた。

魔法少女としての日が浅く、戦闘経験があまりないさやかも一瞬遅れて「剣」を形成し、いつ動いてもいいように神経を研ぎ澄ます。

「おりゃああああー！」

痺れを切らして一番先に動いたのは、さやかだった。

新人故の無謀とも取れる猛突さで地面を蹴り、4人の中でも一、二番を争う程の瞬発力で一気に近付く。

「ああもう、突っ込み過ぎよさやかー！」

「カバーは任せて、美樹さん！」

悪態をつきながらも、それを援護するのはほむらとマミ。ほむらは即座に魔力で紫色の矢を形成して何度も放ち、マミは空中にマスケット銃を何丁も周囲に展開し、何時でも放てる準備を施した。

魔力の矢であるからか、本来直進しかしない筈の矢は途中で軌道を変えると、デカレッドの周囲を囲む様にして迫ってきている。

魔力の矢を何とか避けてもさやかか、さやかをどうにかすると今度

はマミの弾幕。そしてマミの横で今にも突撃する素振りを見せている杏子。

デカレットドからすれば4段構えのその攻撃。どうしようもなさそうなその状況。

しかし、そんな状況を跳ね除けてこそその英雄。

少なくとも、この状況でも赤座伴番ならば諦めず行動に移すだろう、と。

そんな想いを持ちながら、デカレットドは行動に移した。

急接近したさやかかの剣が、立ち尽くすデカレットドの足を切り裂こうと振るわれる。

それを踊るような足遣いで躲したデカレットドは、そのまま勢いをつけて無防備なさやかの体を蹴り飛ばす。

「なっ!?!」

「まず一体」

「さやかか!」

追撃として迫っていた矢。その速さはまるで神速、少なくとも普通の人間には見えない筈の速度。

別方向から同時にきたそれを、まるでクレー射撃でもこなすかの様に、デカレットドは撃ち抜いたのだ。それも、他方向から来ている矢に對しては見向きもせずに、一切の迷いなく。

「な、見もせずに……!?!」

「操作しても、魔力を帯びているから位置は分かるんだよ」

デカレットドは軽々しく言い切ったが、実際その技術はとても実跡するのは難しいもの。撃った相手の視線、仕草。それらを見て瞬発的に行動しなくてはならない。

それが軽々しく出来るのは、幾多もの戦闘経験を積んだ様な人物でないと成し得ない。正に歴戦の勇士がする様な技術だ。

これは油断出来ない、と再び気を引き締め。

「——これならどうだよ、っとー!」

油断も容赦も一切しない用心深い性格である杏子が、自身の幻覚能

力を使ってデカレットの後ろを取り、その体を貫こうと言わんばかりの勢いで槍で突く。

無論、四人は魔獣とは明らかに違うデカレットを殺すなんて考えは最初からないし、そもそもそんな覚悟もない。ただ自分たちに襲いかかってきたこの存在を倒し、その目的を聞きたいだけだ。

であれば、狙うのは心臓や頭部といった命に関わる部分ではなく、足や腕といったさやかやマミの治癒魔法で治せる部分に限られてくる。

容赦のない杏子であってもそれは例外ではなく、当たると確信したその時に太腿付近に狙いを変える腹積もりであった。

「――殺さない様な覚悟で勝てるっても?」

その幻覚戦法すらも見破られており、自身に銃口が向けられた時までは。

「気配までは騙せんよ」

「チツ、腕の一本や二本は覚悟しなよ――!」

次の瞬間、杏子がとった行動は急ブレーキ。

勢いのついた体を全力で押し留めながら、銃口から放たれた光弾を槍で振り払う。

急な無茶振りに肉体に負担がかかるが、そんなことを考えている余裕は杏子にはない。

今考えるのは目の前の敵の倒し方。

あることにはあるのだ。少し前までの自分なら絶対に取らなかつたであろう選択肢が一つ。

――今は、それに賭けるしかない。

「(ほむら、マミ。今からアタシが全力で隙を作りに行く、その隙に火力を集中させる)」

「(それだったらあなたまで——)」

「(なーに、アタシだって死にたくない。確認したら直ぐに退避するよ)」

いつもの軽口を交えてだったが、それは嘘である。

杏子の見立てでは、この存在は戦い慣れし過ぎている。だからこそ迷いなくその場の最善手と思える行動を取れるし、幻覚に気付くなど直感も妙に鋭い。

無論、退避しても大丈夫だと確信できたらそこで退避するつもりはある。

しかし、九割方それはないだろうと思うし、それだったら自分が犠牲になるしかない。

佐倉杏子は戦闘を積んだベテランの魔法少女である。だからこそ、その結論に辿り着いてしまったのだ。

「——分かった。あなたに任せるわ、杏子)」

「(ん、それでいーんだよ。軽い援護だけ頼むわ)」

「(佐倉さん……死なないでね)」

「(任しときなつて。絶対、生きて帰るから)」

ほむらとマミの心配する様な声に、若干の罪悪感を感じながらもそこで念話を切り、杏子は目の前の敵を見据える。マスクで顔は見えないが、その目がちらを捉えているのは確からしい。

好都合である、と思い再び槍を構え直すと、その姿勢を低くする。さながら、短距離走を走るランナーの様に。

「久々、本気でやらせてもらうよ——！」

自身を昂らせる為に叫んだのを皮切りに、杏子が駆け出した。

さやかよりも数段速いそれは、言うなれば赤い閃光。当然だ、今の杏子は魔力を使ってまで走力を強化しているのだから。

無言でデカレッドが撃つ光弾を、槍を振るってかき消す。

戦闘の経験はあちらの方が圧倒的に上だろう。

だったら簡単な話。力で押せばいい。

「喰らいな——！」

ある程度まで近付いたその地点で、杏子は手に持つ槍を思い切り投

げた。まるで、槍投げの様に。

普通の槍投げは山なりになる様に投げるが、杏子のそれは、走力の勢いと魔力で強化してる腕力も込めた圧倒的までに直進的なもの。

普段はこんな事をしないため性格な威力は計り知れない。間違いなく普通の人であればミンチになるのは確かだ。

しかし、この相手は容赦もしてられる程甘い戦いではない。

「こんなものか」

だがまあ、当たらなければどうという事はない。

その速度で放たれた槍を、デカレットは少し体を捻らせる事で難なく回避。

その声色には少し失望が入っている様にも感じられたが、次の瞬間その言葉を撤回するとなる。

「アタシの顔を見て、まだそんな事を言えるのかい？」

「……!？」

目前まで迫っている、不敵な笑みを浮かべた表情の杏子を見て不審に思うが、その次の瞬間。

杏子の投げたその槍は、すぐ後ろに突き刺さり、そしてその形を崩壊させ、無数の魔力で編み込まれた赤い糸と化すと、デカレットに襲いかかってくる。

「凝った小細工だな、全く!」

気付かなかった自分の失態を悔やみながらも、その手を休める事はない。距離を取って後退しつつ、回避もしくは銃撃にて糸に対処する。

しかし、そんな事をしている隙を与えてくれる杏子ではない。

好機とみて一気に近づくと、槍を再び生成して近距離戦を仕掛けてきた。

「そらよー!」

「全く、忙しいな……!」

デカレットが何歩後ろに下がったとしても、その距離を一分で詰められるのが杏子。一気に距離を縮め再び槍を振るった。

しかし、何度槍を振るってもデカレットに届く事はない。

振るわれるの軌道を読みつつ、必死にそれを避けながら結界にも対処、ほむらが援護として矢を放つてもそれを撃ち落とす。

「チツ、化け物かよアイツ——！」

一向に攻めきれないその状況に焦りつつも、脳内で対処を考える杏子。

あと一つ。あと一つ、大きな要因が重なれば恐らく今もデカレットを襲っている糸での拘束が出来るだろう。

しかし、杏子のネタは尽きている。正確に言えば多節棍となる槍の仕掛けをまだ見せてはいないが、それを使った所で避けられるのが目に見えている。

もつとこう、何か——

「……っ、何!?!」

——例えるなら、今起こった出来事のように。

こつそり復帰していたさやかを超スピードを発揮して、デカレットとのすれ違い様、まるで辻斬りの様に右足に負傷を入れてくれる様な。

そんな状況を、待っていた。

「やるじゃん、さやか!」

「杏子にばっか、美味しいところはあげるわけないでしょ!」

この場の誰もそれを予想していなかった。デカレットですらも。

足を斬り裂かれたデカレットは、バランスを崩し転倒。

地に伏せたデカレットを赤い糸が包み、拘束。

その隙に杏子とさやかは退避。

デカレットを拘束している糸は魔力で何重にも編み込まれているので、その拘束を解くのはほぼ無理と言っても過言ではない。

何とか抜け出せないものか、と思っているデカレットの視線の先には、巨大な大砲を幾つも展開しているマミの姿が。

「今だったら降参も受け入れるけど？」

「……」

「反応なし。だったら、少し手荒く行くわよ——！」

叫びと同時に、展開されていた大砲が一齐に火を吹いた。

勿論、ある程度威力は幾らか落としてしている。しかしそれでも、合計の火力は人間が喰らえばタダでは済まない。無論デカレットは強化スーツに纏われているので、ダメージで動けない程で済むだろうが。

「……」

放たれた砲撃にも何も反応する事なく。その運命を受け入れていく様に静観し——

その場を爆風が包み込んだ。

「やった——？」

誰かの呟き。確実に動けない状況での砲撃。

明らかに勝利を確信してもおかしくないその状況。

しかし侮るな。それを覆ってこそその真の英雄。どんな絶望的な状況でも、デカレット——否、スーパー戦隊はそれを覆ってきたのだ。その体現者は、たかが動けないくらい訳ない。

刹那、爆風によつて発生した煙が吹き飛ばされた。それは、風などの自然現象ではない。魔法少女四人が、何かした訳でもない。

彼が——強化スーツの上から新たな白いアーマーを装着したデカレットが。剣を振るい、煙を吹き飛ばしたのだ。

「な!？」

「——デカレット バトライズモード」

その機械的な声と、彼が構えた剣から放たれた斬撃が四人を襲うのは、ほぼ同時だった。

「そ、んな——」

あまりのダメージに、倒れ臥す四人。

意識があるのは、恐らくほむらだけだろう。

デカレッドがその目前に立つ。自分を殺す気だろう、と思い必死に身体を動かそうとするも無意味。ダメージが蓄積されすぎているその身体は、もう動けない。

そんなほむらに、ゆつくりと剣を振り上げ、そして――

「ガ、■■■■っ！」

叫びにすらなっていない叫び。本人もどんな言葉を叫んでいるのかすら分からないまま、頭を抑えて叫び。

次の瞬間、デカレッドの体は突如現れた銀色のオーロラに包まれ、そのまま姿を消した。

「二体、何、が――」

とりあえず危機が去った事に、身体が一安心したのか。

ほむらの意識は、急激に遠のき。

先程まで生死をかけた戦いが行われていたその場所に、静寂が齎され。

残っているのは、意識を失った少女達四人だけだった。

『……へえ、ママ達四人を相手にして勝てるなんて、実に気になる存在だ。どうやら怪人とは違うようだけど――関連がありそうなのは間違いないね』

『円環の理に干渉する計画は一時保留かな。未知の存在である彼と怪人を調べないことには、遮断フィールドを突破される可能性を残したまま計画を進めたくない』

『気になるのは、さっき彼はまるで混乱しているかの様な素振りを見せていた事。恐らく彼の正体に関係あるんだろう』

『……だがしかし、一番気になるのは。ママすらも赤子——いや、それ以上の表現をしても納得できる程の彼の素質の大きさ。これじゃあまるで、彼が複数の人間の様な——』

『……まあいいや。とりあえず、ママ達を起こさなくっちゃ』

白い悪魔は、彼に興味を持つ。しかし悪魔は知らない。

彼は、悪魔が手を出してはいけない存在であり。内に秘めている計画すらも粉々にしかねない、大きい陰謀が動き始めていることに。

第二話 戦士の邂逅

とある、夢を見た。それは、「いつか」地球を守っていった戦士たちの記憶。

幾つもの五色の戦士が。仮面の戦士が。何かを守る為に戦い、時には敗れ、しかし最終的には勝ち、時にはその生命を無くし。1000年以上にも渡る記憶にも関わらず、「門矢遊星」の名前は一度も出てこない。

よく似た夢も見た。それは、「いつか」地球を、或いは弱きを襲った悪の記憶。

幾つもの異星人が、異世界人が、自分の欲望を満たす為に暴れ、時には勝ち、しかし最後には負け、その命を散らし、悪の野望は尽く破られ。1000年以上にも渡る記憶にもかかわらず、やはり「門矢遊星」の名前は一度も出てこない。

——それら全ては俺の記憶じゃないからだ。俺は本郷猛でも、海城剛でも、シヨツカー首領でも、黒十字王でも、仮面ライダーでも、スーパー戦隊でも、怪人でも、英雄でもない。じゃあ俺は——

「う、ん……」

暗い、寂しげな部屋。家具がベッドと本棚しかなく、本棚にはぎつしりと本が詰められている。それ以外には装飾も何もなく、そのベッドの上で悪夢にうなされている部屋の主——「門矢遊星」の心象を表しているかのようだ。

やがて、顔を歪めつつも意識がハッキリとしてきたのか、ゆっくりと目を開く。体を起き上がらせてベッドに腰掛ける形になると、手につけていたゴムを取り、それで彼の長い髪を束ねる。

ポニーテール風になったところで、ようやく立ち上がる。

目覚めに一回、大きな溜息をした後。

「朝、か……悪い夢を見たものだ」

彼——門矢遊星は、完全にその意識を覚醒させた。

魔法少女達四人が襲われた翌日。

さやか、杏子は共に大した怪我は負わず。何とか謎の存在から逃げ切った四人は、翌日午前中から魔獣の探索に出かけ、道中で昨日起こった事について話し合っていた。

『……なるほど。それで、君達ですら手も足も出ない存在だったと?』
「……そうね、あいつは強かった」

「ああ。明らかに手慣れてる相手だったよ、アイツは」

先程からその場の空気がぎこちない。四人が話しづらそうにし、無言で魔獣を探索することに専念している。

理由は当然、昨日の惨敗だろう。そのせいで士気が下がり、お互いに話しづらくなっている。

そんな中。ほむらだけはとても険しい顔をしており、それに気付いたマミが声をかけた。

『君達四人で敵わないとなると、その存在はとても警戒すべき相手だ。他の街にも注意を呼びかけておくよ』

「どうしたの、暁美さん? 凄い顔よ?」

「……いいえ、何でもないわ」

なんでもない、とは言ったが。実際の所、現在ほむらの中では様々な感情が渦巻いていた。相手にかなわなかった事への焦り。彼女が守った世界を、自分が守れなかった事への怒り。

逃げ出した自分が情けなくて仕方ない——これじゃあ、あの子に顔向けできない。

どんどんと、負の感情が高まっていくほむら。それにつれて、指輪となつているソウルジェムに負の感情が蓄積されて行き——

先頭を歩いていたマミと杏子が、立ち止まる。

「! 皆、気付いたわね?」

「ああ、「巣」だ。それも近いな」

魔獣が本格的に人の世に出て来るのは夜の間だけだ。しかし、朝から昼にかけては出現しないかと聞かれればそうではなく。昼間は自

分の創りだした巢に籠もり、巢に近づいた人間を捕まえ、廃人になるまで感情を吸い尽くた後、巢から放り出す。

余談だが、これはかつての魔女も似たような性質を持っていた。魔女の場合はそのまま餌となるが、魔獣の場合は人を廃人とするだけで、殺しまではしない。似たようで違うこの2つは、世界の改変から出来たルールだろう。

……しかし。どちらにせよ、そんな悪行を許すわけにはいかない。「皆、行くわよ！」

マミの掛け声と共に、一同は魔獣の巢が感じられたその場所へと向かう。

普通の中学生としての日常は終わり。魔法少女としての「日常」が始まった。

冬の寒気は、もう一度眠ろうとした彼を許さない。仕方なく起き上がった彼は、洗面所に行つて顔を洗い流す。冷えた水が、より一層と彼の意識を覚醒させた。

濡れた顔をタオルで拭き、リビングに向かう。既にリビングには、一人。遊星より先に起き、ソファアに佇む女性が居た。

一言で言うなら、その女性は美しかった。長い艶のある髪。丁寧に整った細かい仕草。すらっとした顔立ち。その雰囲気は、まるで現代の大和撫子。見る者全てを一目で魅了させる彼女は、時と場所によっては多くの男性から求婚されていただろう。

「あら？ おはよう、遊星」

「……ああ、おはよう、輝夜」

彼女——蓬萊山 輝夜が、遊星に気付いて美しい微笑みと共に挨拶をする。それを返した遊星が、輝夜の隣に座り込む。

しかし。そのまま何か話すわけでもなく、二人でこの穏やかな時間をゆっくりと過ごす。特に、輝夜はその時間を楽しんで過ごしている。

「……」

「……」

「今日は、いい天気ね」

「……そうだな。後で散歩にでも出かけるか？」

「ええ、そうしましょうか」

「……」

「……」

これが、この二人の日常だった。特に何かするわけでもなく、ただひたすらゆつくりと平和を噛み締めながら過ごし。たまに何か話すと、また無言に戻り。

—— 日常は、突如終わりを迎える

「遊星、怪人ね」

「……ああ。お前はとうする？」

「ついていかせてもらおうわ。少しでも実戦の経験を積みたいし」

「……ああ」

日常は終わり。非日常は、突然始まる——

第XXXXX回 観察書類 見滝原市

四人の魔法少女に、円環の理に導かれる状態となる傾向は無し。

しかし、魔獣とはまた違う存在を二つ発見。一つは下級の魔獣より手強い「怪人」と名付けられた存在、もう一方はその怪人を敵と見なしていると思われる存在。前者は魔法少女三人がかりでようやく倒せた存在であったが、後者は四人の魔法少女（内三名はベテラン）を圧倒する強さを持った存在。

この存在がいる事により「円環の理研究計画」は保留。しかも後者からは之までの歴史上最高の素質を確認。この存在と契約すること、並びに円環の理の支配が成功するならば、この宇宙を救うという目的は果たされたと言っても過言ではないだろう。

この存在は慎重に取り扱うべき問題である為、現地や近くの市の魔法少女達を誘導して倒させる事も視野に入れて行動すべきであると

判断した。

四人とキュウベえが魔獣の気配を追ってたどり着いたのは、とある神社。魔獣が出やすかったり、巣がよくあるのは、人の感情が出現し易い場所。こういった場所ならば、よく感情が吸収できると踏んだのだろう。

『なるほど、確かにこういう場所なら様々な感情も渦巻いている。感情を集めるのなら効率的だね』

「キュウベえ、下がっていなさい。来るわよ」

巣まで到達されたと察知したのだろう。何もなかった境内の空間に、突如ノイズが発生した。それは魔獣の巣に誘い込まれる合図。

その辺り一帯の空間が、現れるノイズに侵食されていく。同時にほむらたちは魔法少女服に変身し、いつ何が来ても良いように警戒をする。

そこは深い霧と森に包まれた一本道だった。乾燥した石敷きの道が、神社への道を思わせる。

魔獣の巣は、存在する場所によって空間の内容が異なる。その場所の記憶を読んでいるのか、その場所の情報から創りだしているのかは分からない。しかし、何かしらの理由から巣は発生場所に関係した空間を創りだす。

そんな中。警戒は怠らせる事なく、マミが全員に声を掛けた。

「皆、色々と考えることもあると思うわ。でも、今は魔獣を倒す事に専念して！」

「……当然よ」

「もつちろん！ 任せてくださいよ！」

「ふーん、さっきまで一番落ち込んでた奴が何を言ってるんだか」

マミの言葉で三人、そしてマミ自身も自分に喝を入れ直せた事で元気を取り戻せたのだろう。あつという間に四人の間では戦闘とは言

えない様な雰囲気となる。

無論、警戒はしたまま。そのおかげだろう、四人の後方に居た人物にほむらが気付けたのは。

「……何者かしら？」

「……気付いていたか」

自身の後ろ。先の見えない一本道の向こう側に、何者かの気配を感じ取るほむら。しかもそれは、一つではなく二つの気配。

しかも聞き覚えのあるその声は、昨日自分たちを襲ってきた存在と同じ声。警戒するほむら達の前に、霧の向こうから二人。ゆつくりとした歩みで姿を表す。

カップルの様に並んで現れたのは、男女のペア——輝夜と遊星の二人。

黒い無地のTシャツに、黒いタイツ。その上にピンクのスカートを履いている輝夜は、四人に対して優しい笑みを浮かべるだけで敵意は全く無く。白い無地のTシャツ、その上に黒の革ジャケット。そこにジーンズを履いている遊星は、黙ったまま無表情でジツ、とほむら達を見つめている。

「こんにちは、えーつと……魔法使いの女の子さん？」

「ま、魔法使い……って、そのあんた！」

「……俺か？」

「あんた、昨日私達を襲った奴でしょ！ 声でバレバレよ！」

自分に声が飛んでくるとは思わなかったのだろう。遊星が疑問を漏らし、さやかが更に追求する。

さやかの追求は、今この場にいる魔法少女たち四人が思っていた事と同じだった。当然だろう。説明してもらわなければ、納得すること出来ない。それに対し首を傾げて、昨日、と呟きながら思い出そうとするが心当たりの無い様子の遊星。

三秒ほど立ったところで「ああ」と思い出したかの様子で遊星は話し始めた。

「昨日の夜なら心当たりが無くもない……そうか、そういうことか。その格好から判断するに、お前らがこの世界を守っている英雄だな

？」

「守る……似たような物かしら？ でも、英雄って……」

『そうだね、古くから世界を守っているという点では英雄と言えるだろうね』

「ね、猫が喋った!?!」

「……いや、喋ったというよりあれはテレパシーだな。それよりも——」

「——暁美さん、来るわよ!」

遊星が辺りを見回すと同時に、周囲を警戒していたマミが叫ぶ。それは突然の事だった。遊星たちと魔法少女を挟み撃ちする形で現れたのは、何体もの魔獣。

囲まれた。マミ達は即座に武器を構え——遊星と輝夜は、最も魔獣と近い場所にいるというのに、その余裕を崩すことなく。

「これ、新しい怪人かしら？ 少し不気味ね」

「この世界特有の怪人だろ。さて輝夜、やれるな？」

「ええ、勿論……!」

輝夜が独特のポーズを取ると、その腰にベルト——「アークル」と呼ばれているそれが出現、装着され。遊星もまた独特のポーズを取ると、アークルとよく似たベルト——「オルタリング」と呼ばれる物が腰に装着される。

しかし、アークルに内蔵されているアマダムだけは、本来の物とは違っていた。本来——少なくとも、五代雄介が使っていたアークルのアマダムは、フオームによつて変わるものの、基本は赤かった。しかし、そんな赤みなど一切見せず。輝夜の持つアークルのアマダムは、白一色だった。

「あれは……ベルト？」

「昨日あんな物付けて……いや、なかったよな」

「昨日何を見たのか知らんが、多分今日のはまた別だ、見せてやるよ。俺の——」

「私の——」

二人が叫ぶのは、四十年間仮面の戦士となる者が、正義と悪も変わ

らず言ってきたあの言葉。

輝夜は、自身を変えるこの言葉に誇りを持って。遊星は、自身を変えてしまうこの言葉に嫌悪感を抱きながらも、責任を背負って。

「変身！」

叫ぶと同時に、輝夜は左手の甲で左腰にあるアークルのスイッチを押す。遊星は両手でオルタリングの両腰にあるスイッチを押す。すると、二人の姿は光に包まれ、見る見る内に変わって行き。その光を見た魔獣が、一斉に遊星たちに飛びかかった。

魔獣達が二人に触れるか触れないかの距離まで近づいたその時。光から飛び出してきた二つの拳が、魔獣の体を貫いた。魔獣は呻き声を上げながら、ノイズとなって消えていく。

「魔獣が……」

「……拳の一撃で!?!」

「ったく、ヒーローの変身中は攻撃しないっていうお約束を知らないのかしら?」

「……その冗談、本気で信じていたのか?」

「え?」

「……いや、何でもない」

軽口を叩きながら光から出てきたのは、似通った姿をした二人の戦士。

輝夜が変身する戦士、クウガは——白かった。本来グロージングフォームと呼ばれる物と、同じものになっていた。三つ違う点があるとするれば、一つは角だが「小野寺ユウスケ」が変身するクウガが、本来角が短い筈のグロージングフォームの角が通常の形態と同じまでに伸びている。二つ目は、その眼だ。複眼の部分が赤ではなく黒く染まっている。

決定的に違うのは——その威圧感だった。基本的に穏やかな性格の本人はそんな自覚は無いが、彼女が立っているだけで、耐性が無い者はかなり威圧を受ける。仮に、グロンギ最強の存在と出会ったことのある者が彼女と戦えば、分かるだろう。彼女の放つ威圧感が、ン・ダグバ・ゼバの放つ物とよく似た物だと。

何故そんなクウガなのか、それには遊星が関係しており。この姿を見て、直球にも程はあるが「ダグバフォーム」と。遊星はそう名付けた。

「……究極の闇を受け継いだクウガ——相変わらずの風格だな」

「そう？　遊星のその……アギト？　それも結構な風格出してると思っけれど」

遊星が変身する戦士、アギトは本来と同じ物となっている。黒い素体のボディに、金色のアーマー。赤色の複眼と、龍の様な二本のクロスホーン。

大地の力を宿した、超越肉体の金。仮面ライダーアギト　グランドフォーム。本来ならば津上翔一が変身するその戦士が、世界を超えて今ここに現れた。

「本当のアギトなら、これとは比べ物にならないだけだな——」

「何か言ったかしら？」

「……いいや、何でもない。それよりその魔法使い四人。思うところもあるだろうが、ここは一時共闘と行かないか？」

ここで戦ってもお互い面倒だし、と付け加えた遊星の提案。四人の中でも自他共に認めるリーダー的存在であるマミは、その提案を受けべきか迷った。

それは当然だ。相手は昨日自分達を襲ってきた人物。まだ素性も明らかになっていない人を信用すべきではないだろう。

しかし、ここで彼らと敵対するのは明らかかな自殺行為でもある。魔獣の相手をしつつ、自分達を圧倒した人物とも戦うのだ。昨日よりも最悪な条件で相手をするべきではない。

それに——遊星の放つ雰囲気は、昨日とは明らかに違うのだ。殺気に満ちていない、穏やかな雰囲気。一緒にいるだけで心が落ち着きそうなそれを、マミは心の何処かで知っていたから。

「あの人——誰、だったかしら。誰かと雰囲気が同じなんだけど——」

「(マミ、ここで彼らと戦うのは避けたいわ。彼の提案を呑みましよう?)」

「(暁美さん……ええ、そうね)……ええ、提案を吞みます。でも、下手な動きを見せたら遠慮なく攻撃させてもらおうわ」

迷っているマミを見かねたほむらの助言を受け、決意したマミの一言に、遊星は「それで十分だ」と一言だけそう返し、輝夜と共に、後方の魔獣の群れに突っ込んだ。

「マミさん！ あいつらは……」

「分かっている。でも、彼等と今争ってもやられるのが分かるでしょう？」

「うっ、それは……」

「分かったなら私達も行くわよ！」

黙り込んださやかを見て、一先ずは納得してくれたと判断したマミの声と共に、自分たちの前方を塞ぐ魔獣達との戦闘に入る。

奇しくも、お互いがお互いの背中を守る形になり。二つの英雄は、目の前の敵を殲滅することだけに集中をした。

この程度の魔獣に苦戦するほど、私——暁美ほむらは弱いつもりはない。

向かってきた魔獣を矢で牽制しつつ、ふと気になった彼——あの女性が遊星と呼んでいた彼の様子を見る。

彼が変身した「アギト」という存在。正に戦士という風貌をしているそれは、淡々と魔獣に対処している。しかし、その動きに昨日の様なキレはなかった。

確かに今の彼も強い。しかし、私であれば互角に渡り合える様な印象しか持てないのだ。少なくとも私達四人を相手に、互角以上に戦える様な実力を兼ね備えているとはとても思えない。

意図的に隠しているのか、それとも。

一定の条件下でしか、あの動きが出来ないのか。

そのどちらにしても、とりあえずは目の前の魔獣に対処すべきだろ

う。

再び弓を構えて、矢を放った。

「はあっ！てやつ！」

怪人にしては珍しい、高身長——三メートルはあるであろう巨人が複数、かざされた掌から白いレーザーを放つ。数は多いし威力もあるだろうが、そんな攻撃じゃあ私を止めることはできない。

私——蓬来山輝夜が変身するこのクウガの能力。視認できる場所、かつ視認できる範囲に足場がある場所ならば瞬間移動できるこの能力を使い、レーザーを容易く避けると同時に怪人の目の前まで瞬間移動。構えた拳を放ち、怪人の体を貫き、倒して油断した瞬間を狙ってきた怪人たちのレーザーをまた避ける為に瞬間移動、目の前まで行ってまたその体を貫く。

単純な敵ならば、これを繰り返すだけで倒せる。体力の消費が激しいのが弱点の一つ。弱点が多いのは難点だが、それを差し引いてもこの能力は決して弱くはない。

と、次の瞬間。一瞬反応が遅れ、後ろから腕を伸ばしてきた怪人の手に捕まってしまった。

「……あら、後ろから驚掴みとは乱暴ね」

この身体に肉体のある第三者が触っていると、能力が使えなくなるというのが、もう一つの弱点だ。

……しかしこの怪人、見かけによらずかなりの剛力である。軽く振りほどけると思っていたが、軽く力を入れた位ではこの拘束は解かれない。

私の体を持ち上げ、怪人の顔と同じ目線になる程にまで持ち上げられる……チャンスだ。地面に叩きつけようとし振り上げ、油断して手の握る力がほんの少し弱まったその瞬間、一気に力を振り絞って拘束を力ずくで振り払い、同時に高エネルギーを集中させていた右足が白く輝く。

「レディの身体を乱暴に扱う奴にはお仕置きよ！」

言いながら光り輝く右足での蹴りを、怪人の顔面に思い切り叩き込んだ。勿論、そんな事をされて受けた側は無事に済むはずがない。大きな衝撃音と共に、怪人の頭がノイズとなって消え、それにつれて体もノイズと化して消えた。

そのまま地面に着地し、息を整える。こうもキリがない程居ると、負けはしないがやはり手こずる。体力的にはもう瞬間移動は使えないだろう。そうになると、たった今一つ問題が発生した。

前方には、新たに現れた怪人が複数。それら全てが、私を狙っているようにも見えた。

「……数の暴力、って訳ね。今の私には良い戦法だわ」

数が多いとはいえ、不用意に近寄ってくる怪人の体を蹴りで吹き飛ばす。が、一体倒した位では数の不利は揺るがない。勝利を確信したのか、大量の怪人が一斉に手を翳し始めた。

今にも放たれそうなレーザーの嵐。食らったら微塵も残らないだろうけど——これが最後ならば、問題ない。

私も同じように、手を怪人たちに向けて翳す。そして、その手に力を思い切り込めた次の瞬間。

私の前方にいた怪人全てが、体の内側から発生した炎に包まれる。悲鳴を上げる間もなく、それらは一瞬にしてこの世から消滅。後には何も残らなかった。

「……パイロキネシス、ってね」

モーフィンングパワー。それが、たった今起こった現象の正体だった。モーフィンングパワーというのは物質の原子、分子を分解、再構成する能力だ。

今の現象はその能力を利用して起こした所謂パイロキネシスという奴だ。その威力は見ての通り絶大、周囲に居た怪人達全てを殲滅することができる。出来た。

「はあ……疲れたわね」

強力故に、この能力は使った後かなりの体力を消費する。遊星に聞いてみると「本来使えない物を使える様になった代償」だと言っ

た。

何だそれ、私は代償を払ってまでそんな物を望んでいない、と思っていたが、それは口にしなかった。何故なら、それを語る時の遊星の顔は、これに関係している訳でもないのに何かに申し訳なく思っているという顔だったから。

「……お前も終わったか」

「あら、先に終わってたのね」

変身を解除した私に、最初に声を掛けたのは遊星だった。やはり、私よりも先に終わっていたらしい。

すると、突如周りの空間が歪み始め。ガラスが砕けるような音が響き渡ると、次の瞬間私達は元いたあの神社の境内に戻っていた。

そういえば、と。魔法使いの女の子達の様子を見ようと後ろを振り向くと、既に終わっていたのかあの可愛らしい服装は私服に戻っており。明らかに疑惑を持ったその視線は、私達に向けられている。

「……さて、これで邪魔者は消えたが。どうするんだ？」

「あの姿の事、私達を襲った理由、全てを話して貰いたいわ」

遊星の問いに答えたのは、黒髪の綺麗な女の子だった。

……しかし、襲ったとはどういう事だろうか。過ごしてしばらくになるけど、遊星が誰かを襲うなんてそんなこと、ある筈が無い。

不器用に優しく、少し私をからかう時もあって、強くて。色々な意味で、遊星はそういう事をしない人物だと私は思っている。遊星が襲うといえれば怪人達だが、彼女等は怪人にも見えない。

「輝夜」

「!? な、何？」

不安げに背中を見つめていた私に、遊星は振り返らずに声を掛ける。突然声を掛けられたので驚いたが、何とか出来る限り平静を装って返事をする。

いつ、何が起きても良いように魔法少女達は二人の動きに警戒する。

「……俺は野暮用が出来た」

「えっ？」

「後、暫く帰る事はない。金は置いてるから、適当に何か作って食べてくれ」

「え、ちょ、遊星!？」

「ちよつと、貴方にも答えてほしい事が——」
「すまない、必ず戻る」

遊星は顔色一つ変えることなく、自身に備わった能力によって現れた銀色のオーロラに入り込む。それに入り込んだ彼の姿は、跡形もなく消えた。

慌てて追おうとした私だが、通過する前にオーロラは消滅した。

……全く、何を考えているのやら。

「はあ……貴方達、遊星が色々迷惑を掛けたみたいでごめんなさいね」

「え? いや、そんな……」

「……出来れば、さっきの姿や貴方や彼の事について聞きたいのだけれど」

「さっきの……ああ、クウガの事ね? 分かったわ、貴方達の事も聞きたいし」

クウガ。聞き覚えのない単語に、少し眉をひそめる魔法少女達。

しかし、それも含めて聞かせて貰おうという事で。その場で、彼女等の情報交換が始まった。

見滝原市内。しかし神社から遠く離れたその廃ビルに、オーロラは突如現れる。そこから出てきたのは、無表情のままの遊星だった。

しかしその顔色は、一瞬にして苦痛の色に変わる。

「くっ……ゲホッゴホッ!」

突如咳き込む遊星。その咳込みは止まる事なく、遂には血を吐き出し始めた。

苦しい。早く止まってくれ。そんな願いとは裏腹に、咳込みは止まることはない。

人気のない廃ビルに響き渡る咳。どんどんと血を吐き出し続け、つ

いには遊星の足元に血溜まりが出来る程。

普通の人間ならば既に失神、最悪死亡している程の血量を吐き出しているというのに、遊星は跪いているだけで失神などする様子も予兆もない。

「ッ……」

やがて咳が止まったその時には、おびただしい程の血溜まりが、遊星を中心に広がっていた。

自分が今どんな顔をしているか分からず、確かめたい為か地面に映る顔を見る遊星。写った遊星の顔は——狂気の笑みを、浮かべていた。

それを見た遊星はその顔に嘲笑を浮かべ——次の瞬間、遊星が血に染まった床を殴りつける。

その腕は豆腐を壊す様に床を貫き、建物全体にその際の衝撃音が鳴り響く。

血が滴り、真下の部屋までこぼれ落ちる。カツ、となった意識が落ち着いて、自分がやった事を改めて認識し、乾いた笑みを浮かべた。

着ていた服、部屋の床。全てが赤く染まり、唯一それに染まりきっていないのは遊星だけだった。

『やれやれ、酷い有様だね』

「……お前、さっきのか」

そんな彼に声をかけるのは、部屋の入り口に立っていた猫——キユウベえだった。

大して驚いた様子も見せず、遊星はキユウベえをギロリと睨み付けた。

自身の瞳を見つめる赤い瞳に不気味さを感じながらも、それに怯まらず彼は立ち上がる。

『一つ、聞きたいことがある』

「……何だ」

『君が何故吐血したかはいいとして、何故そこまで血を失っていて生きてるんだい？』

無機質な瞳が次に向けられたのは、床の血だまり。

キユウベエの言葉は、つまり遊星が「何者」なのかではなく「人間」なのかを聞いていたのと大差なかった。遊星の最終的な吐血量は、人間ならば必ず死んでいる程。否、死んでいる所ではない。見る限り、恐らくは人間の体内にある血液量を超えている、とキユウベエは推察している。

それは人間であるかを疑うには十分すぎる理由。しかしその質問の意図を分かっているのか、遊星は無言で貫く。

『答える気は無い、という事だね。それならそれでいい、僕の目的は君に魔法少女について教える事だからね』

「……魔法少女。さっきの奴らか」

『ああ。教えてあげよう、祈りを対価に戦う少女達の事を——』

第三話

正義ノマヨイ

「ーそれが、私が変身する戦士についての全てよ。尤も、教えてくれたのは遊星なのだけれどね？」

魔法少女という存在について説明を受けた私は、こちらも自分の使う力について説明をしていた。

クウガ。それは超古代文明の民族が、グロンギと呼ばれる怪人に対抗するべく創り出した戦士。

アークルと呼ばれるベルトを使って変身し、アークルの内部にある霊石アマダムの力により得られる、超人的な身体能力を駆使して戦う。

といった事を簡単に説明して納得してもらおう……筈だったが。

「クウガ……アークル……超古代文明の戦士、かあ」

「さつき戦ったし、魔法少女の事もあるから信じるっちゃ信じるけど、なあ」

正直、失敗した気がする。青髪の子……さやかちゃんと、赤髪の子……杏子ちゃんは、私の話を聞いて悩むように唸っている。

仕方がない事であるのだ。いきなり突拍子のない話をされたらこうなるに決まっている。

あちらからすれば、今の私は昨日襲って来た疑惑のある遊星の間。疑念が晴れていないところでこんな話をしたところで、すんなり受け入れられる話ではない。

「……やっぱり、いきなり明かさない方が良かったかしら？ ごめんなさい、もう少し段階を踏んで話すべきだったわね」

「いえ、そんな事は。先ほどの門矢さんに関してはともかく……あなたに信じてもいいと、私は思っています」

「……そっか、うん。ありがとうね？」

ほむらちゃんがそういうと、他の三人もそれに同調して頷く。

そう言ってもらえるのは嬉しいが、同時にやはり遊星を信じて貰えないというのは悲しいし、悔しい事ではある。

しかし彼女達も何とか納得しようとしてくれている上での言葉な

ので、それに関しては何も言えない。

そも、彼女らの話が正しいにしても間違ってるにしても悪いのは遊星。弁解をすればとりあえず何とかなつたかもしれないそれを、遊星はあんな形で別れたのだ。警戒されてもそれは彼が悪い。

「全く、遊星つたら。今頃どこで何やってんのかしら？ ……こんな事したら警戒されないわけがないってのに。しかも、いつだって私の事を放っておいて……」

「……あの、少し気になったのですけど」

「え、あ、ごめんなさい。どうしたのかしら？」

「輝夜さんと門矢さんってどういう御関係なんですか？ ……もしかして、恋人とか？」

ブツブツと呟いていた私に、少し遠慮がちに手を伸ばして質問したのはマミちゃん。

……恋人。まさかそういう風に見られてるとは思っていなかった。それは違うわ、とその質問を否定し。

「彼とは弟子と師匠、って関係かしらね。あ、当たり前だけれど私が弟子よ？」

「弟子と、師匠。という事は、門矢さんに鍛えてもらっているという事ですか？」

「ええ、この関係が始まったのは一月前の——つと、ごめんなさいね。流星に話を脱線させすぎたわ」

そこで遊星の話を終わらせ、その後は魔獣・怪人退治についての話を進めて、結論が出た。魔獣と怪人に関してはお互い協力して戦闘に臨む事になった。

信用に關しても私に關してはとりあえず信用して貰える事になり、遊星に關しても可能な限り友好的に接するが、本人から攻撃してきた場合はその限りではない、という事になりそれに私も同意した。

自分を何とか納得させて、という但し書きが付くが。

「それにしても、遊星が、ねえ」

帰路に着いている中で、そんな事をボヤきながら歩く。

あの遊星が、無害の少女達に問答無用で危害を加える。そんな事は、普段の遊星からしたら絶対に有り得ない。

「だからこそ、信じてあげないと」

遊星の味方は、今私しかないのだ。そんな私が信じてあげなくてどうする。

——それに、初めて出会ったあの日に。

『……初めまして、見知らぬレディ。早速で悪いが、単刀直入に聞こう。正義の味方になる気はあるか?』

何も無くしてしまった私を救ってくれた英雄を、どうしようもない事態になるまで私は信じてみたいのだ。

廃ビルの一室。

最早呪われていると言われても信じるであろう程の、惨状となっているその部屋の中央にある血溜まりにポチャリ、と一つの物体となつたソレ——キュウベえの死体が、投げ込まれる。

白かつたその身体は赤く染まり、光のない、無機質な目は、投げ込んだ張本人——門矢遊星の冷酷な表情を映している。酷く深い溜息を一つ付くと、

「魔法少女という存在について教えてくれたのはありがたかったが——それだけ済めばもう用無しだ。まあ、どうせインキュベーターには個体が無数にあるんだから一機くらいいいだろう?」

その部屋に唯一ある窓に視線を向けながら、問いかける様な口ぶり。それは、何処かで監視しているであろうキュウベえに対して言ったものか。

しかしこのまま放置しておく、呪いのスポットとなってしまう。何処からか取り出した金色の携帯——マジフォンと呼ばれるソレを取り出すと、画面の部分が展開。杖の様な形になったそれに番号を入力して一振りし、

「マジネ・マジネ」

と呟く。瞬間、遊星が吐血した後の血だまり、着ていた服に付いた血痕、キユウベエの死体、砕けた床といった、遊星がここに来た後に加えられた要素が跡形もなく消え去り。

残ったのは、見た目は古ぼけている筈なのにどこか清潔感のある、綺麗とも一瞬錯覚してしまいそうな一室と、その中央に座り込み、自分が聞いた事を整理している遊星のみ。

考えるべき事は沢山ある。自身が聞いた魔法少女という存在。その危険性。

自分が彼女達を襲ったという確かな事実。自分が今抱えている状況。

それらを整理して考えると、面倒な事しか待っていないであろう未来しか予想出来ない事に内心嘆きつつも、次の瞬間には既に自分がやるべき事を決めていた。

「——魔法少女、か。見極めるべきだな」

立ち上がった遊星が指をパチンと鳴らすと、銀のオーロラが出現。遊星がその向こうへ歩いて消えていくと、後には何も残らず。オーロラも、ひとりで消えていった。

それから、数日の時が経ち。

「おりゃあああああー！」

自身の得物を構えると、コンクリートの床を踏み台にして一気に飛びかかる。

魔獣が撃ってきたレーザーを姿勢を低くして掻い潜り、一気に懐まで潜り込むと思いい切り剣を振り上げる。

大振りで隙だらけの攻撃だが、知性のカケラも残っていない魔獣には有効であり。身を切り裂かれた魔獣は、出血する事もなく実体を保てなくなり、切り裂かれた断面から消滅。

「いえーい、さやかちゃん大勝——」

「美樹さん！ 油断しちゃダメよ、後ろ！」

「——つとと、危なっ！」

調子に乗るさやかだが、他の魔獣を倒していたマミの叫びで、後ろに居た通常より一回り大きい魔獣が自分を狙っている事に気付くと、慌てて回避。レーザーが少し頬を掠めたが、それ以外は無事に済んだ事に安堵の息を思わず漏らす。

「——私に任せて！」

「お願いします、輝夜さん！」

杏子やさやかといったスピードタイプにも劣らずの速さで、最後の魔獣に向かって駆け出したのはクウガに変身している輝夜。

クウガが右腕にアークルから漏れ出るエネルギーを集中させると、それに反応して右腕自体が光を放っている様に、白く輝き。

「喰らいなさい！」

気合いを入れる為の叫びと共に、全力でその拳を叩きつける。

高エネルギーにより強化されたパンチ。ハンマーか何かで壁を殴った様な轟音がその「巢」の内部の空間全体に響かせ、エネルギーの放出の余波は、ただでさえその拳により身体に穴が空いていて、じき消滅するであろう魔獣を跡形もなく消しとばした。

そして、最後の魔獣が倒された事により巢は消滅、無事に戦いが終わったさやか達と輝夜は其々の変身を解除する。

「——ふう」

「お疲れ様でした、輝夜さん」

「アンタやるじゃん、最後の奴には驚いたよ」

「そんな大した事はしてないわ。連発が効くような物でもないしね」

魔獣が落としたグリーンフキューブを回収しながら、マミと杏子は輝夜に声をかける。何てことはない言葉に悪くないような気持ちを抱きつつもそう答えると、マミは思い出したかのような声と共に。

「——それと、美樹さん？」

「うええっ、はい……」

「戦闘中に調子に乗らない事！ 危なかったんだから！」

「はーい……」

マミに注意され、項垂れるさやかの様子がその場を少し賑やかにした後、その場はお開きとなり。

皆がマミの家でお茶をご馳走になるという話になったが、さやかは家の用事があるから、とそれを断ってその場を離れた。

「輝夜さん、優しそうな人だったなあ」

住宅街の一角を歩きながらさやかが考えていたのは、今日初めて戦っている姿を見た輝夜の事だった。

容姿もとても綺麗で、物腰が柔らかく、戦闘になっても、師匠的存在であるマミと同じくらい頼りになる存在。

今日一日だけで、それだけ輝夜の事を好印象にさやかは感じていた。

「——それでも、あいつは信用できない」

しかし、次の瞬間に頭に思い浮かべたのは遊星のこと。輝夜にはとても申し訳なく思いつつも、やはりさやかの中で遊星に対する疑念は全くもって晴れていなかった。

その事を思い浮かべたさやかの表情は、どんどん険しい物になっていき。

「——おい、」

「……」

「おいー」

「っ!? ごめんなさい、気付かなく、て」

少しイライラしながらもその事しか頭に浮かんでなかったさやかは、自分に声を掛けられている事にも気付かず。声をかけた存在が少し声を張り上げる事で、ようやく自分に声を掛けている存在に気付いた。

「少し考え事を——あんた」

「……一応言っておくが、会ったのは本当に偶然だ」

数日前に見たその顔と声は忘れる筈もない。怪訝な表情を浮かべている遊星が、そこに立っていたからだ。

——何故か、さやかへの知り合いのバイオリニストが着ていそうな正装を着ているが。

「……何の用よ、こっちはあんたに用事なんてないんだけど」

「随分酷い言われようだな……まあ当然か」

「当たり前よ！ 輝夜さんはともかく、あんたは私達を襲った相手なんだ！」

「……それに関しては否定も、弁解もする気はないが、謝罪は——」

言葉を途切らせ、表情を歪めた遊星が、突然後ろを振り向く。

何も居なかつた筈のそこには、いつの間にか明らかに人とは姿形がかけ離れてるモノが。

全身が黒い堅固な皮膚で覆われているが、胸部分がステンドガラスの様になっており、頭部からは自身の強さを象徴する様に三本の角が生えていて、どこか甲虫を思わせる見た目。

かつて「キバの世界」に君臨していたビートルファンガイアと呼ばれる個体が、先代の王という品格もなく、グルルと吠えながらも遊星とさやかを睨んでいた。

遊星は即座に構え、

「怪人——!?!」

「なるほど、さっきの血の匂いにつられたか。巻き込んですまんが一時休戦だ、一緒に……やっぱり何でもない、下がってろ」

「は!?! そんな訳にはいかないでしょ、私も——」

「今はたまたま見当たらんが、住宅街では人目に付きすぎる。魔法少女の存在は流石に世間にバラす訳にもいかんだろう」

遊星にそれを言われて、思わず黙り込んでしまう。

それはそうだ。魔法少女として戦っているという事が世間にバレたら、真つ当には生きていけないだろうし——何より。自分の願いで腕を治した彼に、自分のお陰で治ったという事がばれてしまうかもしれない。

そうだったら今後どう接していけばいいのか分からなくなってしまう。感謝される？ 余計なお世話だったと恨まれる？ それとも

「……おい！ ボーッとしろとは言っていないぞ！」

「っ、しまっ……!?!」

嫌な想像ばかりして隙だらけのさやかを見逃す筈もなく、ビートルファンガイアはさやかに向けて吸命牙を放つ。

遊星の叫び声でハツとさやかが現実に戻された時には、既に目前にまでそれは迫っており。

「やば、これは——」

既に自分で回避するのは不可能な距離と速度で、それは迫っている。

さやか自身の直感が、あれに触れるのはまずいとさやかに告げている。しかし、身体は動かない。それは恐怖による束縛か。

ファンガイアにライフエナジーを吸われた人間は、ただではすまない。動けないさやかの首筋に、それは刻々と迫り——

「全く、世話をやかせる」

後少し、1センチでも進んでいればさやかの首筋に刺さっていたであろうそれは、遊星がそれを掴んで止める事で強制的に止められ、粉々に握り潰された。

「さて、やられてばかりじゃ気が済まん。こつちもそろそろやらせてもらうか」

そう言いながら遊星が取り出して構えたのは、携帯電話——否、それを模した変身アイテムの「ゴーフオン」。それに、六角形の不思議な形をしたそれ——携帯電話に関係している物であれば、SDメモリーカードが1番近い形をしている様にも思える「チェンジソウル」を、ゴーフオンの先端にあるカバーを開いた所にあるスペースに収納し、カバーを閉じる。

「チェンジソウル、セット……さつきも言ったがお前は下がってる。俺だったら正体はバレん」

今正に変身するという所でさやかの方に振り返り、それだけ告げ

る。

言われたさやかは、少し呆けたような、怖がっている様な表情を
して、今起きていた事が整理しきれない様子。

そんなさやかの内面を知ってか知らずか、放って怪人の方に向き直
り。

「レッツ、ゴーオン！」

その身を、赤き勇者に変えていた。

全身が赤の強化スーツ。デザインからしてレーザーを模している
であろうその戦士は、かつてガイアークから世界を救った七人の戦隊
の一人。

「江角走輔じゃないが——マツハ全開、ゴーオンレッド！」

本来なら江角走輔が変身している筈のゴーオンレッドが、ポーズを
決めて少しノリノリで名乗っていた。

しかし、その場の誰もそれに反応してくれる事は無く。さやかはそ
れどころではなく、ビートルファンガイアは理性を失った様子なので
それに反応する事はない。

ポーズをとり続けていた遊星がゴホン、とワザとらしく咳をする
と、

「気をとりなおして——マツハ全開で、行くぞ！」

自身の獲物である、刀身が道路を模した「ロードサーベル」を構え
て駆け出した。

勢いよく近付いてきた遊星に対して拳を振るうが避けられ、お返し
と言わんばかりにロードサーベルを振るう……が、その刃はビートル
ファンガイアの強固な皮膚に阻まれ、傷一つ付けられない。

「ふっ、せい、やあああっ！」

諦めずに何度も振るうが、その刃が通る事はなく。

ただ単にビートルファンガイアの苛立ちを募らせるだけの行為と
なってしまうばかりか、こちらの剣が刃こぼれしかけてしまう始末
だ。

「クソ、やっぱ硬いなお前……！」

「ヴァアアア！」

思わず悪態をついてしまう遊星だが、理性を失った様子の相手がそんな事を気にする筈もなく。耳を劈くような叫びと共に全身から放たれた衝撃波が、地面を抉ると共にゼロ距離に居た遊星を容易く吹き飛ばす。

「硬いの相手じゃ剣は無理か、だったら——レッツ、ゴーオン！」
掛け声と共に、遊星が纏っていたスーツは光に包まれ。光が収まると、その姿を青き戦士に変えていた。

変えたといっても基本的な部分はゴーオンレッドと変わらず、細部が違うのみと、手に持っていた剣が無くなり、代わりにその手に大型重量バズーカこと「ガレージランチャー」に持ち替えている事くらいか。

突然姿が変わったことにビートルファンガイアは驚き、その驚きに答えたのは遊星。

「ノーモーション変身だよ、生身と他の戦隊からはしないけどな——
ゴー、オン！」

叫びながら、構えたバズーカから何発も光弾を放つ。

放たれた光弾は直撃し、ビートルファンガイアは硬かったその皮膚から火花を散らして吹き飛ばされ、後方に転がる。

「読みが当たった、この調子で一気に——何？」

倒れ込んだビートルファンガイアの姿がゆらゆらと、陽炎の様に消えて行く。まるで、最初からそこに居なかつた様に。

不思議に思う遊星だが、周りに他の怪人が潜んでいる様子もない。仕方がないので変身を解き、さやかが立っている方向へ向き直る。顔は俯いていて分からないが、怪我してないようだ。

「おい、大丈夫か？」

「……ッ!!」

「? おい、どうし……」

声を掛けてくる遊星の事を無視して、突然さやかはその場から逃げ出すようにして、道の向こうにへと駆け出してしまふ。

その場に一人残された遊星はそれを追いかけてしようとすも、

「……はあ、はあ、難儀な、物、だ。これ、抑え、る方、法はな、いの、かね」

心臓を抑え、その場に膝をつく遊星。苦しんでいる表情を軽く見せるも、直ぐにその表情は落ち着いた物に戻り。

「これくらいで済んだ事を幸運に思うべきか——？ まあいい。とりあえずは……」

さやかを追うべきだと判断する。

自分の言葉で傷付けてしまった事には責任を感じる遊星。

彼女の中でどんな考えがあつたかは知らないが、彼女の戦う理由も、何も知らずにあの言葉で納得させてしまった——それは、今自分がしてはいけない事だ。

体に無理やり鞭を打ち、遊星も後を追って駆け出していった。

「……最低だ、あたし」

さやかの今の心境を一言で表すならば、情けない、という気持ちで一杯だった。

言われた事とはいえ、自分の都合で変身して戦うかどうかを迷ってしまい、挙げ句の果てにそれにどこか納得してしまう自分がいた。

何をやっているんだ、あたしは。ママさんみたいな、正義の魔法少女になるんじゃないのか？ そんな、正体がバレるなんてそんな事を気にして——

遊星の言葉、そして何より自分に対しての苛立ちが積み重なっていく。

そんな彼女を待っていたのは——

「……さやかさん？」

「え？ ……仁美？」

「休みなのにお家に行っても朝から帰ってないって聞いて、少し心配してたんですよ？」

「う、ちよつと今日は朝から特訓やら何やらが……いやいやいや何でもない、大した事ない用事が、ちよつと、ね？ それより、仁美の方こそどうしたの？」

「……ええ、さやかさんに少し、お話が」

「——私、ずっと前から上条恭介君の事をお慕いしてましたの」

改変前の世界から続く、恋の因縁だった。

第四話 協奏曲 音を愛するリトル・マーメイド

美樹さやかは恋をしている。

相手は入院中のバイオリニストこと上条恭介。

さやかは恭介の病室にほぼ毎日と言っていいほどCDを片手に見舞いに行き、その献身的な姿は周りの人間からは恋仲だと言われている程である。本人はそれを知らないが。

そんな彼女が今どうしているかと言えば。

「……」

公園内の湖沿いの道にあるベンチに座り込み、複雑な表情をして頭を悩ましていた。

その原因は、先程偶然出会った親友の志筑仁美が放った衝撃の言葉にあった。

『私、ずっと前から上条恭介さんの事をお慕いしてましたの』

『私、明日の放課後に上条君に告白します』

『丸一日だけお待ちします。さやかさんは後悔なさらないように決めてください。上条君に気持ちを伝えるべきかどうか』

「どうすれば、いいのかな……」

ボヤキながら色々と考えてみたさやかだが、結論は出ない。

本当の気持ちと向き合えるかと言われたさやかだが、自分自身その気持ちが分からなくなってしまったのだ。

「……なんで、あたしは恭介の事を好きになつたんだろ」

恭介の事は確かに好きだ。しかし、何が好きだったのか、何故好きになつてしまったか分からなくなってしまっていた。

そんなフワフワとした動機で告白なんて出来る訳がない。そう考えたさやかは自身の頭をフル回転させて考えていたが、分からずじまい。

「好きかだけじゃない。戦う理由も……契約した理由も、何も分からなくなっちゃった」

乾いた笑みを浮かべながら、自身の黒く染まり始めてるソウルジェムを、ポケットから取り出した手持ちのグリーンフキユーブで浄化すると、元の深い海の様な淡い光を放つ自身のソウルジェムを見つめながら考える。

契約した理由は、勿論好きな異性である恭介にもう一度彼の好きなバイオリンを弾いて欲しかったから。しかし、何故そこまで自分は恭介の事を好きだったのだろう。

最近の話であるのに、それすらも分からなくなってしまっていた。しかも、契約した事を恭介にバレてしまったら、という事を考えた時、自分は動けなかった。

それは——自身のおかげだとバレたら嫌われてしまうかもしれないから戦わなかったのではないか？

それはまさしく偽善である。自身が憧れていた、正義の味方とは程遠い物だ。

さやかは苛立ちから思わず力任せに自身の足を思い切り殴る。

ジーンとした痛みと足に走る強い衝撃は、自分が馬鹿であるという事をどうしようもなく再確認させるだけだった。

「あたしって、ホント馬鹿」

そうしてさやかが振り絞る様な声で呟いたのは、奇しくも改変前の世界での最期の言葉と同じ言葉。

様々な要因が重なってしまい、さやかは今忘れてしまっていた。

戦う理由。契約した理由。恋した理由。

本筋とは違うとは言え、本来ならばこの後さやかは様々な経緯を辿った後に円環の理に導かれ、その計らいにより根底にある願いを理解して消滅していくだけの運命にあった。

——しかし。運命が交差した事により、さやかはまた新たな結論に到達する。

「——やっと、見つけたぞ」

いつの間にか、目の前に誰かが立っている事に声でさやかは気付いた。

俯いている顔を上げなくても分かる。今日二度目、それも出会い方が同じなのだから。

遊星だ。さやかを探して町中を駆け回ったのだろう、額から汗を流して息を荒げている彼は、さやかの隣の空いているベンチに座り、一息ついていた。

「……何の用よ。何度も言うけど、あたしはあんたに用は——」

「すまなかった」

「え」

突然予想もしない言葉が遊星の口から吐き出され、さやかは思わずその顔を上げて遊星の方を向いた。

その表情を歪ませながらも、遊星の目はしっかりと今顔を上げたばかりのさやかの目を見据えている。

「お前の戦う理由も覚悟も、何も知らずに下がってるなんて言っすまなかった」

「……」

頭を下げて謝罪する遊星に、さやかは何も言えなかった。

誠意を感じられなかったとか、呆れて何も言えないとか、そういう理由からではない。

今の、何もかもが分からなくなってしまった自分に、その純粋な謝罪がどうしようもなく自分の心に突き刺さってしまった。

「……るきゃー」

「んっ」

「うるさいー」

思わず、怒鳴り散らしてすまう程に。

それはさやかの心を乱すものだった。

「あんたに何が分かるの!?何もあたしの事を分からない奴が、指図も謝罪もしないで!」

言って、さやかは直ぐに心の中で後悔した。

正直言っただ目の前の人物には良い印象を抱いてない。それでも、彼は自分に対して謝罪した。

彼は悪くないのに。悪いのは、忘れてしまった自分なのに。

突然の怒声に、無表情のまま少し固まる遊星。

しかし、大きなため息をついた後、

「何があつた?」

態度も何一つ変えずにさやかに話しかける。

何事も無かつた様に、しっかりとさやかの目を見据えて。

「え……?」

「俺と別れてから何かあつたんだろ。流石にその取り乱し様はおかしい」

「別に、何も……」

「……まあ話してみろ。自分一人で抱え込むより、誰かに話を聞いてもらった方が楽だろ」

相変わらずの無表情。しかし、その口ぶりは明らかに自分を氣遣つてくれているものだ。

確かにこの男は怪しい。自分たちを襲った事も忘れた訳じゃない。

それでも、さやかは少し迷った後に。

「……実は……」

気を許さない相手の筈の遊星に、自分の事情を話し始めた。

辿々しくも、全てを話し終わり。

全てが終わった時には、綺麗な青空が赤みがかつた色に染まる程。

全てを聞いた遊星は、黙って俯いたまま少し何かを考え込んでおり。次の瞬間、顔を上げると

「よし、その上条少年の家に行つて演奏を聴くぞ」

さやかからすれば、何を言っているんだと言いたげな事を平気な顔で言い出した。

「いや、ちょ、はあ!？」

「文句があるのか？」

「ありまくりよ！何で恭介の家に行く事になってんのよ!?!しかも口ぶりからしてあんたも来る事になってると思うんだけど!？」

「話を聞く限りでは会うのが一番だと感じた。後、俺も行くのは純粋な興味。将来有望なバイオリニストの腕前を見たい。お前の親戚のバイオリニストと偽って、後はその場のアドリブで乗り越えれば平気だろ」

あつけらかなとんでもない事を言い出す遊星に、さやかは絶句。

一体この男は何を言っているのだ。わけがわからないよ。あんたの興味に私を巻き込むんじゃない。

そんな考えが脳内をループしているさやかは、言葉が出ない。

「おい、愚痴を聞いてやったんだ。それくらいはしてもらうぞ」

「う、それは……」

痛いところを突かれるが、自分の愚痴を聞いてもらったのは確かに事実。

関係ない他人の様な存在の遊星だからこそ、自分の全てを言い出せたのだ。これがママやほむら達であつたら、自分はもつと話すのを渋っていただろう。

「ほら、分かったのなら案内しろ」

「うう、ごめん恭介……」

観念して、渋々なながらも遊星を案内するさやかであった。

「へえ、中々の物だな」

「恭介のお父さんも有名なバイオリニストだからね」

「そんな有名なのか？」

「……あんだ、テレビとか見ないの？」

「悪い、全く見ない」

二人が居た場所から時間にして十分程歩いたそこに、恭介の家があった。一言で言うなら、ちよつとした豪邸であった。

二階建ての立派な家で、二階には小さな半円状のベランダまで付いている。

意を決したさやかが、震える手でインターホンを押す。

ピンポーン、と軽快な音が鳴り、少し待つと声が聞こえた。

『はい?』

「……あ、恭介?」

『さやか? 珍しいね、さやかが家に来るなんて。どうしたの?』

「急にごめんね、実は……」

そうして本当の理由を隠し、建前上の理由を説明する。

さやかの親戚が今一緒にいるのだが、その人も新米バイオリニストで、恭介の話をしたら是非その演奏を聞いてみたいと言っている……などと、適当に理由を付けて話した。

「本当にごめん、迷惑じゃなかったらでいいんだけど……」

『……うん、構わないよ』

「本当!」

『僕なんかの演奏でよければ。さやかには腕が治る前に酷い事を言っちゃったし、その罪滅ぼしって事で』

「そんな、それに関してはおたしも……うん、ありがとう」

『ちよつと待ってて、直ぐ行くから』

インターホンが切られたのを確認して遊星の方を向くと、遊星の顔は少しニヤついた表情を浮かべており。

「ふーん……」

「な、なによ」

「乙女の顔をしてるぞ、お前」

「なっ!?!」

途端、さやかの顔が真っ赤に染まる。それはもう、熟したトマトの

様に。

「な、な、な、」

興奮しすぎて言葉がうまく出ない。一体目の前の男は何度自分を動揺させたら気が済むのだ。

反応が面白いさやかをからかう遊星の態度は、正に悪戯小僧と言ったところか。

文句の一つでも言っただらなければ気が済まん、と口を開こうとしたその時。上条家の扉が開いた。

「何を言っただら——」

「お待たせさやか」

「え、あ、恭介……」

勝気な態度が一転、バイオリンケースを持って玄関から出てきた少年を見るや否や、しおらしい少女の態度に早変わり。

遊星は内心面白がりながらも、それを表に出す事なく出てきた少年に一礼する。

「突然の申し出に承えていただきありがとうございます、私の名前は門矢遊星と申します」

「ええ、どうも。上条恭介です」

先程までのさやかに対する言動と態度はどこへ行つたのか。敬語を使い、しっかりとした態度で恭介と握手を交わしているその様子は、側から見ればちゃんとしている物だろう。

しかし、この男の素を知っているさやかからすれば、違和感その物。まるで人間の言葉を喋れる豚が服を着て、どうぞ私を食べてくださいと言っている様な物である。

「では早速。こちらへどうぞ」

「ええ、お邪魔します……ほら、さやかも」

「え、あ、お邪魔します……」

どうすればいいのだ、この状況。そんな事を思いながらも、さやかは覚悟を決めて恭介の家へ入っていった。

その時の心境を後にさやかはこう語る。魔王の城に、牧場主が入る様な覚悟で入っていったと。

閑話休題。

恭介家にお邪魔した二人は、とある一室に案内された。少し広めのその部屋は、防音が施された部屋なのだろう。

「門矢さんは、僕の演奏は初めてお聴きに？」

「ええ、まあ、恥ずかしながら。他人の演奏は全く聴かないもので」

嘘である。単に興味が無いだけだ。

サラツと嘘を吐く遊星に対して、さやかはそう思いながら恭介に内心謝りつつも喋らず。

「でしたら、ファンを一人増やせる様に精一杯頑張りますね」

「ははは、期待してますよ」

「勿論、さやかの為にも頑張るよ」

「えっ!？」

突然の爆弾発言。さやかの顔は再び朱に染まっていく。恭介まで何を言いだすんだ、と思いつつもムカつく様な感情は出ておらず、代わりに内心恥ずかしさで一杯の状態である。

「さやか、どうかしたの？顔が赤いけど……」

「え!?! いやいや大丈夫、いつものビューティー美少女さやかちゃんなりよ!」

「そ、そう? なら良いんだけど……」

大丈夫な訳がない、と口を揃えて言いたくなるその光景。

「なり?」と頭に?マークを浮かべて不審に思いつつも——バイオリンを構えると、空気が一変。

心優しい少年の顔は、真剣な物に変わる。

「では、行きます」

心を安らかな気持ちにさせる、優しいメロディが恭介の弾くバイオリンから奏でられている。

それはまだ未熟さを感じさせるものの、確かに目の前の客に喜んで貰おうという強い意志を感じさせるものであり、その意思が表現され

ているそれは美しいという言葉以外浮かばない

心が動揺しまくってたさやかは一気にそれに引き込まれ、その表情を少し驚いた物にした遊星は真剣に、恭介の奏でる音色を感じ取り。

演奏が終わった時、二人の手から自然と拍手が出た。まるで、素晴らしい演奏に敬意を払うように。

「ふう……ありがとうございます」

「先程の冗談が本当になってしまっ、素晴らしい演奏お見事でした」

「良い演奏だったよ、恭介。もう完全復活だね！」

二人の演奏に対する素直な賞賛に、少し照れた様子を見せた恭介。するとどうしたことか、恭介はバイオリンを持ったまま遊星の方へ近づき、

「ありがとうさやか。では、お次は門矢さんの番です」

そうしてバイオリンを差し出してきた。

それを見たさやかの心の中は、とてつもなく素晴らしい物で満たされた満足感から一転、一気にその肝を冷やした物になる。

「え?!いや、門矢さんはちよつと都合が……」

「え、そうなのかい? こんな機会無いし、せつかくだから聴かせてもらおうかと思っただけど……」

「……いえ、構いませんよ。ですが、バイオリンは自前のがありますので」

少し考えた後、そう答えた遊星。

その言葉に驚愕するさやかを他所に。どこから取り出したバイオリンを片手に持ち、先程まで恭介が立っていたその場所に歩いていく。

すれ違ったその時、遊星の持つバイオリンを何気なく見た恭介は内心で驚愕する。

そのバイオリン程の名器を、恭介は見たことがない。

一度恭介が父親の知り合いに見せてもらったかの名器、ストラディヴァリウス。それを、明らかに超えたと断言出来る程のバイオリンであつたからだ。

恭介は知る由もないが、それも当然。

そのバイオリン——「ブラッディ・ローズ」は、元天才バイオリニストである「紅 音也」が、その魂をかけて作り上げた逸品であるから。

そんな品に触れる機会があるのは、天性の才を持つバイオリニストだけだろう。遊星への不信感が浮かび上がるが、それと同時に恭介は無意識に目の前の彼にワクワクしていた。

自分に、どれだけ素晴らしい音を聴かせてくれるのだろうか。

そんな恭介の視線に気付いたのか。正に弾こうとしたその直前に、突然口を開いた。

「上条さん。もし、失望してしまったらその時はすみません」

「え……？」

演奏する時から何を言っているのだろうか。

その真意を掴むことが出来ぬまま、演奏が始まった。

その演奏は、精度であればプロ一步手前の実力を持つ恭介のそれを遥かに超えていた。

凄まじい技術で奏でられる音は、天才の一言しか浮かび上がらせない。どこかの大きな大会に出させたら間違いなく優勝だ。

しかし、ただそれだけなのだ。

さやかは演奏に圧倒させられているが、恭介からすれば、その演奏には心が乗っていない。

演奏が出来る機械が凄い演奏を注文され、それを弾いている様。人を感動させる事は決してない、ただの凄い演奏。

音楽プレイヤー等で聞いた時の音とはまた違う。例えるならば、その記録のような。ただの、とある誰かがこんな演奏をしていましたよ、と書かれている演奏の図鑑を読んでいるような。

それが、遊星の奏でている音であった。

演奏が終わり、遊星は二人に目をやると、やはりかと言う反応を見せる。

さやかは、凄まじい演奏に圧倒された顔をして声が出ず。恭介は、

ただただ不自然だと言わんばかりの表情で遊星の事を見ていた。

その様子を見た遊星は、一つ大きな溜息をして。

「……失望させてすみません、お邪魔しました。さやか、行くぞ」

「え、あ、うん。ごめんね、恭介……」

「ちよつと、待つ……」

恭介の制止を聞かず、困惑するさやかを連れて部屋から出て行ってしまう遊星。

再びすれ違ったその時の顔は、相変わらざる無表情ではあったが。

恭介には、それが苦しんでいる様にも見え。

「あれだけの演奏をするのに、どうして一切心を乗せられてないんだ——？」

一人になった恭介のその眩きに、答える者は誰も居なかった

帰り道、気まずい雰囲気になってしまった二人。

どこを目指すわけでも無く、ただ適当に歩いている。

「……バイオリン、弾けたんだ」

「……まあ、弾けるだけだがな」

「え？それって——」

弾けるだけとはどういう事なのか。

その言葉に違和感を持ったさやかが尋ねようとするが、それは遊星の言葉に遮られる。

「それより、答えは見つかったか？」

「……何かは掴めそう、だったけどダメ」

「……俺は分かったぞ。単純な話で、バレバレだった」

「え、何であんたが!？」

自分にも分かかってない自身の事を、遊星が確信している事にさやかは驚いて遊星の方へ向き。

自身の考えを確信している遊星が、ニヤニヤとした笑みを浮かべてさやかに告げる。

「……自分を見てみる、それがヒントだ。じゃあ俺は忙しいんで」

「は、ちよつと!?!」

それだけ告げると、遊星は手を軽く振った後に何処かへ走り去ってしまふ。

残されたさやかは、遊星の残したヒントを元に考えていた。

「私を見る……? 鏡でも見ろつての?」

自分自身を見るというのも変な話だが、実際その真意が分からないからどうしようもなく変な考えに到達してしまうさやか。

無論、鏡を見るなんて単純な話ではないだろうとその線を捨て、再び長考に入る。

「あいつには見えてた……?」

遊星には見えていた。しかし、一体いつの時の話だろうか。

からかわれてた時? 恭介と会った時? それとも――

『よし、その上条少年の所家について演奏を聴くぞ』

と、そこで。そもそも恭介の家に行つて、演奏を聴いた発端をふと思ひ出し。

次の瞬間、電流が走る様に閃いた。

「あ、演奏を聴いてた時――!」

いつも恭介の演奏を聞いていた時、自分はどう感じていたのか。さやかは必死に思ひ出し、そして気付いたのだ。

演奏の時、自分はいつてもその音を少しも聞き逃さない様に集中している。正に、音楽に魅入られているかの様に。

そこまでする理由。それは単純な話であり。

恭介の奏でている音楽に、そしてそれを奏でている恭介に、自分は無意識に魅せられてしまっていたからだ。

「思ひ出した……!」

それが引き金となり、次々と流れ込んでくる様にさやかの心に響いたのは、優しい音色――先程聞いた、恭介の奏でる音。

これを、世界中の人々に聴いて欲しかった。だからこそ、さやかは消滅するという運命を受け入れてキュウベえと契約し。

恭介の素晴らしい演奏、そして恭介自身の演奏に乗せて人々に伝える心——言うなれば、心の音楽に、魅入られたから。

「だからあたしは、恭介に恋をしたんだ……」

それが自分の本当の気持ちである。不思議とそう信じられたさやかなの行動は、早かった。

急いで来た道を戻り、恭介を呼び出し。遊星と

二回目に出会ったあの公園に連れて来て、今現在二人並んでその道を歩いていた。

「どうしたの？ 門矢さんと出て行っただと思っただら、急に散歩なんて……」

「え、えーつと……」

しかし。いざ告白するぞという時、さやかは一言で言うならへタレとなつてしまい。上手く言葉が出ない自分の喉を、恨んでしまう程にその心中は荒ぶっていた。

「（動け、動け動け動け動いてあたしの喉！……ここまで来てチキッたら一生後悔する！）あ、あの！ 恭介!!」

「は、はいー!」

振り絞りすぎて思わず大声で叫んでしまい、思わず恭介もつられて大声で返事をする程。

緊張しながらも、さやかは勇気を持って言葉を続ける。

「わ、私、美樹さやかは、貴方の事が」

しかし、その言葉は。無慈悲にも上空から恭介に飛んでくるその牙を偶然目にした事で途切れ、無我夢中で恭介の手を取り、引っ張る。

「ダメ、恭介危ない!」

「うわっ!?!」

恭介の首筋に刺さる筈だったそれは対象を失い、地面に突き刺さり。引っ張られた恭介も無事に済み、さやかが一安心した所で。

先程遊星が倒した筈のビートルファンガイアが、どこからともなく二人に姿を現した。

「なんだ、あれ……バケモノ!？」

「何であいつがここに……!？」

「美樹さやか、お前が目当てで狙ってるんだろう」

「!？」

いつの間に、二人の後ろに立っていたのはビートルファンガイアを睨む遊星。

いつの間に、いやそもそも何故ここにいるのか。

さやかのような疑問を見抜き、答える遊星。

「門矢さん!?何でここに……」

「ごっそりお前を尾行してた。さっきは俺を狙ってたのかと思っていたが、どうやらまほ……お前のライフエナジー——ざっくり言えば魂を吸い取りたかったらしい。上条少年を狙ったのも、お前が庇うと思ったからかもな。全く、理性がないクセに変な所で頭が回る奴だ」
遊星の言葉に、さやかは思考を停止させた。

つまり、どういう事だ。自分が——彼は恭介がいる為に隠して伝えてくれたが、魔法少女であるから。

自分の最愛の人は、狙われてしまったのか？

その事實は、どうしようもない程にさやかの心に響き。

「とりあえず、二人とも下がってろ。奴は俺が——」

「——許さない。絶対に、絶対に許すもんか!」

「さ、さやか?」

「……うん?」

目の前の存在に、純粹な怒りを感じていた。

自分が最愛の人を巻き込んでしまった事は、勿論重く責任を感じている。

ただ、それよりもさやかが抱いている気持ち。それは、

「私の、最愛の人を傷つけようとした事、その音楽を断とうとした事

……絶対に、許さない!」

愛である。普通の人間がどうしようもなく異性、或いは同性に抱い

てしまう感情。とある悪魔曰く、希望よりも熱く、絶望よりも深いもの。

その自分への告白にも近い言葉に、恭介はどう反応したらいいのか分からず立ち尽くし、遊星はただ一言。

「答え、見つかったんだな。良かったじゃないか」

「うん。あたしの新しい戦う理由。それは、人の奏でる音楽を守ること」

「……」

「恭介のおかげで、人はこんなにも素晴らしい音楽を心から奏でられる、って知れたんだ。だったらあたしは、その人の心に流れる音楽を守る為に戦いたい——変、かな？」

「……いいや、ちよつとばかり驚いた。まさか、その言葉が出るとは思ってたなかったから——これも、なにかの巡り合わせって奴なのかね」

どこかに遠い目を向けながら、そんな事を呟いた。その真意を掴むことは、さやかに相変わらず難関であると悟り。

——面白い、愛と音の為に戦う女の子か。気に入った——

次の瞬間、突然さやかな脳裏に声が響き渡った。

「え？」

「どうした？」

「いや、なんか幻聴が……」

——幻聴？　この天才の素晴らしきお声は幻聴などではない——

「っ、やっぱり……」

確かに、自分に聞こえているキザっぽい声。

遊星や恭介には聞こえていないので、魔法少女同士で使うテレパシーの様な物であるときやかは納得するが、同時に疑問も生まれる。

この声の主は、一体何を目的に話しかけてきたのだろうか？

「(あんだ、何者？いきなり何の用事?)」

——そう焦るな、焦っている姿もまた愛おしいが——

「(ええ……)」

困惑してしまう程のキザっぷりに呆れてしまう。

まだ人生経験も少ないさやかだが、この男は絶対に道行く女性全員に声をかけまくっている、と断言してしまいたくなる程に。

——まあ待て。少しこの天才が力を貸してやろうと思っただけだ

「(え?)」

——人の音楽を守りたいという願い。そして何より、惚れた男を傷つけようとした相手への言葉。俺に惚れていないという点は残念だが、そこ以外は気に入った。ますます今の俺に肉体が無いことが悔やまれるよ——

「(何でそんな、急に……)」

——偶然から生まれた気まぐれだ。それ、少し俺の記憶が入るぞ——

その言葉と共に、一瞬だけさやかを襲った頭痛。

それと共に、ある男の記憶が流れ込んできた。

それは、ひたすら愛に生きた物語。

先程の声の主であるその男は、確かにさやかの思うような人物であつた。

しかし、彼が本気で求めた愛は何処までも純粋な思いを貫き、同時に心の音楽を汚そうとした相手に対しては本気で怒り、自分が本気で愛した女の為なら命も張れる。

どこか憎めないキザっぽい愛の救世主——紅音也は、自分の愛に向き合ったさやかの為に一度限り、その力を貸した。

「美樹さやか——それ、どうした?」

さやかが気がつくのと、本気で驚いた表情をした遊星が、さやかの肩辺りを見つめている。

その視線の先。自身の左肩には黒い蝙蝠が佇み、さやかの方をその黄色い目で見つめていた。

『ふん。音也の認めし少女よ、初めましてだな』

そしてその蝙蝠が、低い声で喋りかけてきた。

さやか自身それに少し戸惑ったが、既にキュウベえという前例があるので直ぐに受け入れることができ。遊星はやってしまったという顔をしながらその蝙蝠の名前を告げた。

「……キバットバットⅡ世、か。なるほど納得」

「キバットバットⅡ世……それが、あんたの名前なの？」

『ああ、間違いない。貴様のような奴に、本来この鎧を纏わせる気は無いのだが——一度限りの特別だ、使わせてやる』

すると、次の瞬間。さやか達を包んでいた景色が一変。

中世にでもありそうな、玉座の間だろうか。血塗られた玉座に座り込んでいるのは、いつもと同じく魔獣である。

——ただ、唯一違う点があるとすれば。玉座まで辿り着くまでの間に、何体ものビートルファンガイアが、行く手を阻んでいる事だ。

「そんな、魔獣と手を組んで——？」

「……俺が最初に戦ったのは、魔獣に備わっていた分身能力で生まれた内の一体、と言った所か。つか、お前」

「ん？」

「正体、バレてもいいのか？」

こっそりと聞かれた問いに、一瞬さやかは考え。

いつも通りの、柔らかな笑みを浮かべたら、後ろにいる恭介の方へ向き直った。

「ごめん、恭介。多分今から色々ビックリさせる。戦い始めたら恭介は隠れてて、全部終わったら話すから」

「……僕には、よく事情は分からない。それでも、これだけは言えるよ」

恭介は、その場の状況に付いていけてなかった。怪人やら魔獣やら、何を言っているのか分からない。

しかし、それでも。自分にさつき告白した少女が、今から戦うという事だけは何となく分かっており。

せめて自分出来る事。かつて自分が腕を負傷して、絶望していた

あの時彼女がしてくれたように。今、無理をして自身に笑いかけてくれている彼女に対して。

「男の子がこんな事を言うのも頼りないけど——頑張つて、さやか」
心から、応援の言葉をかけた。

その言葉だけ。それだけでさやかにとって、戦う理由は十分すぎる程だ。

再び魔獣の方へ向き直り、溢れてきそうな涙を拭う。

「はは、あたし何悩んでたんだろ」

「……悩みなんてそんな物だ。解決すれば、なんてこと無い夢のように消えていく」

「……」ここで戦つて、恭介に嫌われてもいい。その音楽を守ればそれでいいって、今のあたしはそう思つてる。それでいいのかな」

「十分だ」

短くそれだけ言うと、遊星の手に握られたのはキバットバットⅡ世によく似た金色の蝙蝠。

キバットバットⅢ世と呼ばれるそれは、本来の饒舌さを発揮する事なく黙つたまま。

『我が息子……ではない、な』

「……ああ。あんたはともかく、こっちはただの模造品みたいな物だよ」

『ふん。力の代償もデカイだろうに、何故戦う？』

「……さて、ね」

キバットバットⅡ世と遊星の間で交わされた、その会話の意味はさやかには分からない。

間違いなく遊星の秘密に関わる重要な話。しかし、その会話の半分も何かの知識の前提で話してる為か理解不能。

「俺には戦う理由がない。戦わなくちゃいけない理由はあつても、な」
「……？」

「だけど、今だけは。紅渡の理由を借りて——人に流れる音楽を守る為に、戦うよ」

訳が分からなくなつてきそうな展開。それでも、怪人に対しての怒

りは収まっていない。

さやかは自分のさっきの言葉を——人の音楽を守る為。そして愛を貫き通す為に、戦う。

「私も、さっき言った言葉に嘘をつく気はない。今回だけ力貸してよ、コウモリもどき！」

『フツ、よかろう——ガブリ！』

「こつちも行くか、手動だけどな——！」

さやかの手に収まったキバツトバツトII世を、知っている様に慣れた手つきで空いているもう一方の手に噛ませる。同じように、遊星もキバツトに手動で手を噛ませた。

二体のキバツトバツト族が、それぞれの持ち主に魔皇力を注入し、眠る魔皇力を——さやかの場合、代用して魔力だが——を活性化させる。すると二人の肌に怪しげな模様が浮かび、その腰に巻き付くように鎖が出現、やがてそれはベルトの形を作り。

「変身！」

その叫びと共に、バックルの止まり木部分に逆さまに装着した。

二人の姿が、体内から出た鎖に包まれて行き。

その姿を、変えていく。

黄色い、蝙蝠の羽を模した複眼。赤い上半身に、黒い下半身。しかし、その肩と右足にはカテナが巻きつけられ、その真の姿を封印されている仮面ライダーキバ。

緑の、また蝙蝠の羽を模した複眼。黒いボディに、それを包み込む様な真紅の装甲。何処からか吹いた風にたなびく白いマントが、その姿が王であるという象徴をしている仮面ライダーダークキバ。

本来ならばこの世界で登場する筈もなかった二人の皇帝が今、新たな資格者を得て並び立っていた。

「うわあ、あたしのいかにも悪っぽい……」

「ダークキバだからな。ああ、変身にお前の魔力使ってたから、多分その姿でも魔法少女の力使えるぞ」

「え？ ……本当だ、でも何この色」

さやかが試しに何時もの要領で剣を出そうとすると、変身して大きくなった身体のサイズに合わせてはいるが、確かにいつも自分が使う西洋風の剣が現れた…何故か、持ち手の部分が金色になり、その刀身がダークキバの鎧と同じ赤みを帯びているが。

「変身した影響で、一時的に魔法がダークキバに合わせた物になったんだろ」

不思議なものだ、などと思っている暇はない。既に二人の周囲は、分身したビートルファンガイアに囲まれており。

「さて、キバっていくとするか」

「ありがたく思いなさい、絶滅タイムよー」

決め台詞と共に、玉座に座る魔獣目掛けて駆け出して行く二人。

その道中を塞ぐのは何人ものビートルファンガイア。

だがしかし、ここに揃っているのはそのファンガイアの頂点たる皇帝二人だ。

百でも千でも、今の二人には響かない。

「そろそろあー！ さやかちゃん、の剣戟を喰らええ！」

魔皇力を模した魔力で強化された二刀が交差に振るわれる。

その一振りで近くにいたビートルファンガイアの分身はいとも容易く切り裂かれ、更にその振るった衝撃で出た赤い斬撃は、その向こうにいた分身までをも消しとばす。

更に後ろから襲いかかってきた分身にも、振り向くことなく剣を逆手に持って迷わず突き刺すと、そのまま剣を動かし、別方向から飛びかかってきた分身に対する盾とすると、剣を引き抜いて容赦なく思い切り蹴りを入れた。

ダークキバの影響で身体能力が大幅に強化されているのは勿論あるが、それを引いてもさやかの戦闘のセンスは底が知れない物であった。

「調子に乗るんじゃない、痛い目見るぞ」

一方のキバ。

近くにいた分身の腹に何度も拳を叩き込んでから、締め蹴りを入れる。

更に2方向から襲いかかってきた分身を軽々しく避けると、二体の頭を同時に掴みそれらをぶつけ合う。

敵の攻撃を避け、攪乱しながら戦うその様は蝙蝠の様。

今の二人に、敵と呼べる者はこの空間には存在してなかった。

「ごめん、少し舞い上がってたかも」

「……まあ、今回位は思い切りやってみろ。迷いも捨てられたんだし」

「……うん、じゃあ思い切りいくよー」

背中合わせに話しながらも、その手を休める事なく殲滅を続ける二人。

そうして分身の数も後僅かと言った所で、沈黙していた魔獣が動いた。

その口から白い息の様な物を吐き出すと、それは徐々に個体を持ちながら分かれて行き。

再び、ビートルファンガイアの分身が二人の周りを囲む形で現れた。

「ああもう、面倒臭い！」

「無尽蔵なタイプか……なら仕方ない。コイツらは俺に任せろ、俺はお前を上を飛ばすから奴はお前がやれ」

「りょーかい！」

キバが手で形作った足場に乗ると、そのとてつもない腕力で上に飛ばされたダークキバは、上空に魔法陣を展開、それをまた壁として利用すると、剣を構えながら勢いを付けてそれを蹴った。

無事に飛んだ事を確認したキバも、腰に装着されているスロットから取り出したフェツスルをキバットの口にくわえさせ、吹かせる——無論、寡黙なまま。それでは締まらないので、遊星が代わりに叫んだ。

「ウェイクアップー」

瞬間、辺りが暗闇に包まれ。キバの右足のカテナが、完全に解放された。

そのまま天高く飛び上がると、本来ならば出ていない筈の月を背に。

地上に向けて、その蹴り——ダークネスムーンブレイクを放つ。

「はああああ!!」

「くらえええ!!」

その二つの攻撃を、邪魔する者は誰もいない。

地面に放ったキバの蹴りは、そこにキバの紋章を残し、クレーターを作り出すほどの威力で、分身とそれに紛れていた本体も跡形も無く消しとばし。

迷いを捨てた乙女の攻撃も、兵を用意するだけの愚かな王を気取った魔獣を貫いた。

戦いが終わり。巣が崩壊すると同時に、さやかの変身も強制的に解除された。

——見事だったぞ、美少女よ。この天才こと紅音也の賛美だ、ありがたく受け取るがいい——

「(ん。力を貸してくれてありがとう、音也さん)」

——うむ、苦しゆうない。これからも音楽とその男を愛し、愛を貫けよ。さらばだ——

さやかの脳内に話しかけていたその声の主——紅音也の声は、じきに聞こえなくなり。先程までいた筈のキバツトバツトⅡ世も、そして遊星すらもまた姿を消して。

その場に残されたのは、さやかと隠れていた恭介の二人だけであった。

別の場所に現れた魔獣を退治していたママ達が公園に現れたのは、それと同じ様なタイミングだった。

駆けつけた一行が最初に見つけたのは、遠目に何かを見つめている遊星。

「遊星!?こんな所で何を……」

「……あなたも魔獣を追ってここに?」

「……輝夜と魔法少女一行か。丁度良い、面白いものが見れるぞ」

「あれは美樹さやかと……上条恭介?」

視線の先に居たのは、互いに向かい合っているさやかと恭介。

しかし、当のさやか本人は、向き合っても何を言えば良いのか分かんず。その場に立ち尽くすだけになってしまっていた。

「(やばいやばいやばい、さつきより緊張する!あの怪人に怒ってたとはいえ、さつきあたし告白みたいな事言っただけになかった!?)」

「……さやか」

「は、はい!」

「怒らないから教えて。もしかして、僕の腕を治してくれたのはさやかなのかい?」

「っ!?!」

いきなり、凶星を突かれた。

恐らく、今起こった戦いを見て。戦い慣れしていたさやかを見て、恭介は自分に起こった奇跡の真実を見抜いたのだろう。

真剣な表情の恭介の瞳は、さよかの隠された想いすらも見通している様で。

「……そうだよ。あたしが、戦いの運命と引き換えに治したんだ」

「……そっ、か。やっぱりそうだったんだ」

「恭介——!?!」

突然。さやかは、恭介に抱きしめられた。

怒られるだろう、と思っていたさやかは、茹で蛸のような顔色にしな

がらも何も言えず。

「ごめん、本当にごめん、さやか。僕が君を、そこまで追い詰めてしまったって事、辛い戦いの運命を背負わしてしまった事」

「そんな、恭介が謝る事じゃ……」

「うん。それは僕が謝らなくちゃいけない事。そして一つ、お願いがあるんだ」

「お、お願い？」

さやかをいきなり抱きしめる様な気概を見せながらも、恭介は内心とても緊張しているようだ。

とても大きく深呼吸をした後。意を決して言葉を紡いだ。

「僕には、その戦いの運命から君を解き放つ事は出来ないかもしれない。それでも、それに立ち向かう君を支える事は出来る」

「きよ、う、すけ……」

「それだけじゃない。さっきのさやか風に言うなら、君の心が奏でる演奏は、僕にとってとても尊い物だった。その心の音色に、いつの間にか僕も魅せられてたんだ。それに、気付いた」

それは愛を謳う告白。

おぼろげながらも、恭介の誠実な気持ちが現れている言葉。

正しく、さやかが惚れた恭介の心の音楽その物と言っても過言ではなくて。

「君と一緒に、これからの人生を共にしたい——締まらないけど、良い、かな？」

「っ、うん——！」

そう言つて、さやかも思い切り恭介に抱きついた。抱きしめ合う二人の眼には自然と涙が浮かんでおり。

その光景を見たマミ達も、少しもらい泣きをしている程。

「美樹さん、良かったわね……」

「馬鹿、マミ。泣いてるんじゃない……ははっ」

「あなたもじゃない……ふふ」

ほむらは貫い泣きも何もしておらず、ただその光景を微笑ましく見守つてた。

——どうしようもない程に自身の心に浮かび上がる違和感に、疑問を浮かべながら。

「(さやかが上条恭介と結ばれるのに、何故違和感が沸くの——?)」
きつと、改変前の幾度となく繰り返された時間に、その光景が無かったからだろうと。

そう思うことにして、今は目の前の友人の交際を素直に喜んでいい。

「——チツ、やっと終わったか」

そんな一行からいつの間にか離れ、人気のない森林の中で倒れていたのは遊星。

いつもの頭痛に襲われ、ようやく終わったらしい彼は、額の汗を拭き取り。

「キバットバットⅡ世——タイミング的に考えれば、先程紅音也で演奏したから、か……分かつてる。分かつてるさ、キバットバットⅡ世よ。このままだと、俺の肉体が耐えられないなんて事は」

「それでも戦わないといけないんだよ——英雄の力を奪った俺は」

運命が交差した事で、人魚の乙女は円環の理に導かれる事なく真実の愛を手に入れた。

しかし、それはどうしようもない矛盾を何処かに起こし——世界に、異変が始まる。

第五話 理由

——夢を、見た。

夢に出てきたのは、一人の少女。

終わりのない永遠の命を持った「彼女」は、果てしなく続く歴史をこの眼で見してきた。

素敵な物は山程あった。

悲しい物も山程あった。

彼女は永遠の命を持った事に後悔をしていなかった。過程に思う事はあっても、その結果自体に今は後悔していない。

同じ永遠の命を持っていて殺し合う関係になった友人、自身に仕えてくれている頼れる臣下。

素晴らしい物が揃っている彼女に、後悔などある筈もなかった。

——しかし、そう思う前の彼女の周りはとても酷いものだった。

今では愉しく殺し合う友人とも、その前は険悪とも言える関係。

その友人をそうさせてしまったのは自分。友人から憎悪の表情しか伺えないその時だけ、彼女は自分の過去に後悔を抱いていた。

それが決定的に変わったのは「——」の時。

彼女が本当に守りたいと思う物を、見つけた時だった。

これは、そんな彼女が再び守りたいと思う物を見つける物語。

いつも通りの日々を、過ごしていく。

「……よく寝れたわ、おはよう遊星……いけない、遊星は今居なかったわね」

朝。朝食を適当に済ませ、その後軽く食後の運動に町内の走り込み。

「999、1000つと……とりあえずこんな感じでもいいのかしら？」

昼。気分転換にテレビでも見ながら、腹筋運動やスクワット等をノルマ分こなす。

「っ、怪人——！」

怪人の気配をアークルが察知したら即座に家を飛び出し、走って急行。

『ジャラゾグスバ、クウガ！』

「人は襲わせないわよ！」

現場に到着。一般人を襲っていた怪人に思い切り蹴りをくらわせてやった。

因みにこの独特の言語を喋るのがグロンギ。本来私ことクウガの敵である怪人らしい。

私自身グロンギの言葉は喋れる訳ではないが、何故かそれを聞いて意味を理解する事は出来る。

遊星にこの事を何気なく話したら微妙な顔をされたのは未だに謎だ。

「大丈夫ですか？早く逃げてください！」

「あ、ああ——助かったよ、ありがとうね！」

「……よし、離れてくれたわね——変身！」

『ダグバボバシゴボバギレ！』

ダグバのなり損ない。私の変身するクウガを見たグロンギは、揃って私のことをそう呼ぶ。

ダグバというのは彼らグロンギの王様の様な存在の名前らしく、私のアークルの中にダグバは眠っているとか。

私自身そんな自覚はないのだが、そのせいで私の変身するクウガは本来の進化を辿らずに変質してしまっているらしい。

「これで終わりー！」

特に手こずる訳でもなく、追い詰めたグロンギに対し、封印エネルギーをたっぷりと込めた必殺の蹴りをお見舞い。

体内に流し込まれた弱点のエネルギーに耐えれず、グロンギは呻き声を上げながら爆散した。

「……一件落着つと」

特に手こずることなく終わったので、体力もほぼ消費していない。折角だしどうせなら買い物を買わせてしまおう、とスーパーに寄る。

「これと……後、あれも買っておこうかしら？」

目に付いたレトルト系や食パン、お惣菜などを適当に籠に突っ込む。

一度遊星に教えてもらいながら料理を作った事があるが、料理が絶望的に下手な事が判明したのでそれ以降調理は遊星に止められている。

遊星が作る料理はとても美味しいのに、その遊星から教えてもらって何故あんなゲテモノが出来てしまうかは自分でも不明だった。今でも思い出してしまいそうな程の味だったが、二度と味わうのは御免だ。

「……今夜は月が綺麗ね」

夜。適当に食事を済ませ、その後寝る時間まで外をパトロールがてら散歩する。

月の光を楽しみながら歩けば、その時間もあっという間に過ぎていく。

「つと。こんな素晴らしい日にも、怪人は出るのね——！」

——何もなければ、の話だが。

怪人の気配とその方角をアークルが教えてくれる。

しかも魔力の入り混じったこの感じ、間違いない。魔獣だ。

気配を感じた場所に到着する。

相変わらずの白い巨人が何体も佇む光景の中に、最近知り合った少女達の姿もあった。

「……輝夜さん、どうも」

「あらほむらちゃん、こんばんは……全く、こんな夜遅くにまで現れるなんて。夜更かしは肌の天敵って言うのに」

「同感です。手っ取り早く片付けちゃいましょう！」

「アタシはそんなのは気にしないけど——とつとと寝たいし、さつさと片付けるとしますか！」

そうして各々と連携を取りながら、魔獣に立ち向かっていく。

これが、最近の私の日常と化していた。

戦いも終わり。

帰り道の違うほむらちゃんやマミちゃんとは別れ、暗い夜道を歩きながら私達は楽しく女子会の様な話をしていた。

「……それで、上条君だっけ？その男の子とは最近どうなのかしら？」

「えっ!?ど、どうってそりゃあ特に、何も……」

「二人で仲良くデートの話をしてたのが何もないなんて、随分進んだ関係になってるじゃねーか」

「ちよ、杏子お!?!」

顔が真っ赤になりながら私や杏子ちゃん達に弁明するさやかちや

んは、随分と微笑ましい。

「どうやら私達と魔獣を退治した後、遊星と出会って何かあったらしい。」

「遊星に話を聞こうと思ったなら何処にも居ないので、詳しく何があったのかまでは知らない。」

「が、どうやら彼女は仮面ライダーに変身したらしい。それも、本来の変身者に資格を認められて。」

「しっかし、この前まではその男の話をしただけで顔を真っ赤にしてたのに。付き合うなんて何があったのさ？」

「もー、その話はしたくないのに……まあ、ちよつと色々、ね？門矢さんに色々と言われたっていうかなんて言うか……」

「は？ちよつとちよつと、大丈夫だったのそれ？」

「ステイク状の菓子を加えながらも、驚いた様子をした杏子ちゃんがさやかちゃんに尋ねる。」

「うん、まあね。それに関しては謝ってもらったし、結果的に本当の戦う理由も見つけられたから。だから、ちよつとだけ。あの人の事は、信頼してもいいかな……なんて」

「……ま、さやかがどう思おうが勝手だよ。アタシはまだ信用してねーけど」

「もによもによとしたもどかしそうな表情をしているが、その中には確かに遊星に対して感謝をしている様子も見られた。」

「最初に聞いた時は驚いた。まさか遊星がさやかちゃんの恋愛話に首を突っ込み、告白させるなんて。」

「……しかしまあ。同時に、心の何処かで納得もしていた。彼だったらやりかねない、と。」

「それにしても——」

「戦う理由……少し、羨ましいなあ」
「えっ？」

「私ね、こうやってクウガとして戦っているけど……未だに、戦う理由ってというのが見つからないの」

「そうだったんですか？ そんな事ない、って思ってたんですけど」

……」

「——実はね、私記憶喪失なのよ」

「記憶喪失!?!」

さやかちゃんの方へ向けられていた杏子ちゃんの視線が、驚愕と共に私の方へ向けられた……まあ、それも当然だろう。

「気がついたら遊星に拾われて、それ以前の記憶は全く無し。クウガの力を持つてたから、心の赴くまま戦っていた——って感じかしら。正義のために、なんて事は全然考えた事がないの」

その場に沈黙が走る——失望、されただろうか。

私には戦う理由が無い。今日のように一般人がいたらその人を守ったりはするが、その行動自体に理由があるわけじゃ無い。ただ、心の衝動に従って守り、戦っているだけなのだ。

「……それでいいんじゃないの?」

「え?」

そう口を開いたのは、ポケットから取り出したクッキーを頬張っている杏子ちゃんだった。

「戦う理由なんて誰もが見つけようと思っただけじゃなく、見つけられる訳じゃない。無理に正義の為、なんて気負う必要ねーよ。きっと戦う中でいつか見つかるさ、アンタだけの戦う理由が」

ニツ、と笑う杏子ちゃんの顔は、どうしようもなく頼れる予感しかさせない。姉御とでも呼ぶべきような笑顔だった。

なんて素晴らしいのだろう。まだ魔法少女の皆と交流を深めて時間が経っている訳ではないけど、杏子ちゃんの言葉は妙な説得力を持っていて。

それが経験から来た言葉なのか、それともはたまた別の理由かは分からない。それでも、彼女は年下に慕われるいいお姉さんになれると思う。

「……うん、ありがとう。いつか見つけてみせるわ、私がクウガとして戦う理由を——」

「——クウガ?」

その時だった。暗闇の奥にいたらしい男の人が、私のクウガという声に反応して、電灯の光で姿を現したのは。

何故かボロボロの布と化している軍服を着た男は、私に視線を向けている。

——まあ間違いなく言えるのは、この男は只者ではないという事だろう。こんなにも相手を威圧できる一般人がいる訳がない。世紀末じゃないんだし。

「(輝夜さん、知り合い?)」

さやかちゃんのテレパシーに対し、首を横に振る。

こんな男と知り合った覚えはない。記憶を失う前、という事だったらお手上げだが。

——しかし、彼は今クウガという単語に反応したのだ。

それが意味するのは、つまり。

「ビガラ、ギラクウガドギダダバグドギダダバ?(貴様、今クウガとして戦うと言ったか?)」

「……ええ、言ったけど。あなたはどちら様かしら?」

彼がクウガという存在に釣られた、という事。

「(アンタ、あいつの言葉分かるの?何言ってるのか全然分かんないんだけど)」

「ええ、何となくだけど……多分、私がクウガだからじゃないかしら?」

「ゴグバ —— バサダゴセドダダバゲ!(そうか——ならば俺と戦え!)」

咆哮と共に、異形に姿を変えた。

明らかに人間のものではない筋肉と外骨格は、それが怪人に分類させる存在だと知らせ。

体の所々に身につけている古代の装飾品の特徴が、私にグロンギだと教えてくれた。

その場を凍てつかせる程の闘気が、そのグロンギから伝わってくる。

「怪人——!?!」

「……グロンギ。それも、話に聞くゴの集団辺りかしら？」

戦闘民族であるグロンギには、階級の様な物が存在する。

確かゴ集団はその中でも、かなり高い位置にいると聞いた気がする。遊星曰く、手強いのが多いとか。

そんな相手に敵うのだろうかとも思ってしまうが、相手が相手なので逃げてはいられない。

何より、クウガが目当てになっている内がチャンス。一気に叩いて、人々に被害が出ないようにしなければならぬ。

「ゴンドゴシザ、クウガ。ガガ、ダダバグゾ！（その通りだ、クウガ。さあ、戦うぞ！）」

「……ここまで熱いお誘いはされた事ないわね、全く」

冗談を言いながらも、即座に体内のアークルを出現させ、腕は変身の構えを取る。

そして、独特のポーズを取りながら左手の甲をアークルの脇にあるスイッチに持って行き。

「行くわよ、私の——変身！」

叫びと共に、右手でそのスイッチを押し込んだ。

私の姿が白い光に包まれ、クウガの鎧に合う様にその身長も少し大きくなる。マントを翻す様にその光を吹き飛ばし、私の白きクウガへの変身は完了した。

それに合わせて、二人も姿を変える。

「ほう、俺の知るクウガとはまた別のクウガ。そして生身で戦うリントの女か。しかし、これは——貴様、ダグバのなり損ないか何かか？」
「グロンギは全員それ言うわね——そんなに似ているのかしら？ 後貴方、日本語喋れるのね」

「リントの言葉など覚えるのは容易い。しかし、その闘気で自覚なしだど？ ハハハ、面白い——その力、この破壊のカリスマ「ゴ・ガドル・バ」が試してやる！」

言つて、彼——ガドルは私たち目掛けて突進してきた。

さやかちゃん達二人は、いつでも飛び出せる様な姿勢で相手を待ち——私は、強く拳を握って飛び出した。

「はああああっ！」

「オオオオオっ！」

お互いに間合いまで入り、互いに同時に思い切り拳を振るう。

相手はゴ集団、その中でも手練れだろう。間違いなく苦戦する相手だ。

ならば先手必勝。数はこちらが有利なので、流れを作れば勝機はある——！

彼と私の拳がぶつかり合う。途端、全身を走る衝撃。ビリビリと伝わるそれは、このグロンギが格上である、という事を無情にも教えてくれる。これだから理不尽だ。

「流石、ゴはそこらのグロンギより違うわね！」

「それ以上の力を持ってよく言う！」

拳を引つ込め、勢いに乗せて蹴りを放つ。しかし腕を盾にする事で、それも難なく防がれてしまう。

あまりにも一方的すぎるその光景に、ガドルは少し苛立っている様子だ。

「この程度か？」

「まだまだ——なーんて、ね」

「何？」

言葉と同時に、次の攻撃に移る——ように見せかけ、思い切り横に飛んだ。それだけで、何を狙っているのかを彼女達に知らせられるだろうと信じて。

生憎だが、私は真剣勝負をするつもりはない。相手がクウガを目当てとしているなら、それを利用するだけだ。

恐らくガドルは、私が突然戦線を離脱した事に一瞬気を取られるだろう。そこを狙い目。

「喰らえええっ！」

私の真後ろでスタンバイしていたさやかちゃんが、私の離脱と同時に地面を蹴る。魔力を込めているそれは、青い閃光と化してガドルの

懐まで一瞬で潜り込み。

その体を串刺しにでもしてしまいそうな程の勢いで放たれた突きは、ガドルの体を確かに貫いた。

グロンギは基本しぶとい性質。それで完全に倒せる等とは思っていないが、きつと戦闘の足枷にはなってくれる。

「——この小細工も含めての、その程度かという質問だったのだが」

そんな私の想像は、あまりにも早く打ち砕かれる事となった。

体を貫かれても平然としているガドルは、さやかちゃんが刺した剣を平気な顔をして引き抜いた。

不条理だと叫びたい程だ。体を貫いたのが、その程度なんて言い切るなんて。

「体を貫かれてるのに……！」

「甘い、甘いぞリントの女！その程度で、この俺に打ち勝てると思うな！」

激昂した様子のガドルは、引き抜いた剣を持つとそれをモーフィングパワーで自身が使う剣に変化させ……不味い！

「やらせるか、ってのー！」

一瞬で振られたその剣は、横入りした杏子ちゃんの横振りの槍によつて押し留められた——しかしガドルが力任せに剣を振るおうと力を込めると、その鏑迫り合いは一瞬でケリがついてしまい、押し切られた杏子ちゃんが姿勢を崩す。その空いた隙を逃さずに蹴りを叩き込まれ、後方に吹き飛んだ。

「まだ私との戦いは終わってないわよ！」

二人をやらせる訳にはいかない、と私は白いクウガの転移能力を使つて、ガドルの後ろを取り同時に拳を叩き込む——が。

一瞬で後ろに回り込んだ筈なのに。それでも、ガドルは反応して。私のお腹に、持っていた剣を思い切り突き刺した。

さやかちゃんも既に斬られたのか、血を流して倒れている。

「甘いのは貴様も同じだ」

「が、あ、っ……!?!」

熱い、熱い、熱い。

突き刺される感覚が、こんなに痛いとは思わなかった。体が警報を鳴らす様に、全身に冷や汗をかく感覚が染み渡る。

尚も熱い。鉛を流し込まれている様でもあるその痛みは、じわじわと広がっていつてしまいそうだ。

意識がはつきりしない。自分が膝をついているのは分かる。血塗られた剣が眼前に見えることから、多分腹に突き刺されたそれが引き抜かれているであろう、という事も分かる。

もう一つ分かるとすれば。ガドルが、本気で私に失望している事だ。

「——弱い、弱すぎる！これならまだあのクウガの方が強かった！究極の闇を継いでいる貴様はもっと強いはずだ！」

ガドルの怒声が、私の耳につんざく。正直余裕がない私にとってはうるさいが、言っている事は確かだ。

多分、やろうと思えば私はコイツを倒す事ができる。ダグバというのは、グロンギの頂点に立つ者の名前。その力を完全に引き出したクウガならば、まず間違いなく圧倒できるだろう。

しかし。

「ダグバの力、を——受け入れたく、ない」

それにどうしようもない程恐怖を抱いているのが、私だ。

戦う理由がない——その状態で力を解放するのが、途轍もなく恐ろしいと感じてしまっている。

理由のない暴力は、悪意と同じ。

自分を律して戦っているつもりでも、いつの間にかそのタガを外してしまっているかもしれない。

自分でも何故ここまで恐れているのかは分からない。

けれど確かな事は、私が臆病であるという事だ。

「……力を使いこなせない、ただの弱者だったか。ならば死ぬ！」

「輝夜、さん——！」

既に私の事は見限ったのだろう。ガドルは血塗られた剣を振り上げ、そして——

突如どこからか飛んできた黄色いリボンに剣は絡み取られ、ガドルの手を離れて行った。

ああ、黄色いリボンを使うのはあの子しかない。

「ム……？」

「そこまでよ！」

「マミ、ちゃん……！」

先程別れた筈のマミちゃん。そしてその横で弓を構えるほむらちゃん。

怪人を察知して来てくれたのであろう二人が、並び立っていた。

「これ以上、可愛い後輩と新しい仲間に出すのはやめてもらえないかしら？」

「新しい女のリントの戦士、か」

正直、本当に助かった。

二人が来てくれなければ、ここで私達は死んでいただろう。

私の方は指一本動く気配がない。倒れたさやかちゃん、吹き飛ばされて壁に激突した杏子ちゃんもその意識を失っている。

——そこで、唐突に。脳裏にある姿が浮かんだ。

漆黒の中、それは確かに存在感を放っていた。

真っ白な体、それに浮き出ている全身に張り巡らされた血管の様な組織。

装飾品を纏っている事から、彼もまたグロンギだろう。

その場所に佇んでいるグロンギは私に手を差し伸べ、助けてやると言わんばかりに右手を差し出している。

それを必死に脳内で拒絶する。

ダメだ、アナタの力は使わない。使いたくない。

しかし、考えれば考えるほど焦りの様な感覚と共にその脳内の姿がこちらに近づいて来ている気がする。

——そして彼の姿が目の前まで来た時。私は、彼に吸い込まれる様な感覚と共に意識を失った。

巴マミは、焦っていた。

今日の前で対峙しようとしている怪人。跪いている輝夜、更に杏子やさやかが気を失っているという事が、彼女の焦りを急増させた。

それはつまり、この怪人が三人を相手に取れる実力者だという事。油断が出来ない。

「ねえ」

そこで唐突に。輝夜から、冷たい声が発せられた。威圧を乗せたその声は、一言だけでその場を支配する。

「輝夜さん……？」

「……ほう」

彼女から発せられた雰囲気、ガドルの中のある記憶を呼び起こす。

自分の身が凍りつく様な、あの感覚。それを思い出させる相手は、後にも先にも一人しかない。

その相手を思い浮かべた刹那。ガドルの全身が、炎に包まれた。

「あなたは私を楽しませてくれるのかしら？」

愉快そうな声で喋りながら立ち上がる輝夜の様子は、まるで人形遊びをする子供の様に。

この状況を、楽しんでいる様だった。

そして、それは内側から燃やされているガドルも同じ事。

「目覚めたか、ダグバ……！」

輝夜の内側に眠っていたそれが目覚めた事に、ガドルは歓喜し、この状況を作り出した誰かに感謝した。生前では果たせなかった、ダグ

バへの挑戦。それが叶ったのだから。

ガドルの拳とクウガの拳が、再びぶつかり合う。

先程と全く同じシチュエーションであるのに、驚愕したのはガドルの方だった。

クウガの力が、先程と段違いに上がっているのだ。それこそ、ガドルが電撃体でなければ今の一撃でやられていた、と確信する程に。

「ガグガダグバ、ドギダダドボソバ（流石ダグバ、といったところか）」
「ほらあ、もつと私を楽しませてよー！」

殴る、蹴る、また殴る。互いにそんな攻撃を繰り返している。

ガドルは、ひたすら戦闘に身を置きたい衝動から。

そして輝夜は、自身を「楽しませてくれる」相手とひたすらに楽しむ様に。

その光景を見た一般人が居るとしたら、こう語るだろう。

——怪物同士が、笑いながら仲間割れしていると。

その二人の戦いに、マミ達は入り込める気がしなかった。無論、戦闘の激しさだけで言うならばまだ入り込める余地はある。

そういう物ではなく——今の輝夜に、恐怖して動けないのだ。

おかしくなってしまった輝夜は、仮面の下で狂った笑みを浮かべながら戦闘しているだろう。

自分たちの知る彼女とは、決定的に違う。

優しくて穏やかな性格の彼女は今、どこかにいなくなってしまうていた。テレパシーを送っても反応はない。ただ見ていることしか出来なかったのだ。

「……ッ！」

「曉美さん、何を……!？」

しかし。そんな中でも、彼女は。

ほむらだけは、足を動かす事が出来ていた。

「助けに行くわ……輝夜さんを！」

ほむらには、分かっていて。

彼女が自分からおかしくなろうとしていることに。

「彼女」が世界から消えてしまった記憶を取り戻した時、無理をしてそれを自分の内側に隠し、誰にも見せないようにしていた時期があった。

無理して平静を装って、一時はまどかは存在しない、と思い込もうとしてしまった——今から思えば、我ながらとても馬鹿な行為だと思うが——時もある。

その時の自分に、今の輝夜が似ている。それだけの理由ではあるが、故に放っておけない。ほむらの心には、それしか浮かんでなかった。

自分から狂気に取り込まれようとしている彼女を見るのが、ほむらにとってはとても辛かったのだ。

「輝夜さん、目を覚ましてください！」

自分でも柄にもない事だ、と思いつながらも叫び、再び叩き込まれようとした拳を後ろから全力で抑えるほむら。

しかし、魔力で強化している筈の腕力でも、それは何とか抑えられている程度。クウガからすれば、歩いている道に水たまりがあつたから迂回する程度の抵抗をすれば、この通り。

「邪魔よ」

「きゃ……!?!」

少し腕をふり払うだけでほむらの拘束をいとも容易く解き、ほむらの方を向くとその拳に炎を纏わせる。

普段の輝夜ならば、間違つてもしない行為。それに、今の輝夜は手を染めようとしていた。

「私の楽しみを邪魔するなら——死になさい」

「……!」

態勢を崩しているほむらには、何もする事が出来ない。

普通の人間ならば即死するであろう輝夜の拳は、がら空きのほむら

の腹部に吸い込まれる様に叩きつけられ——る直前に、その拳を止めて変身を解除して、その場に倒れこんだ。

「輝夜さん！」

「……ダグバの力に精神が耐えきれなかった、か」

冷ややかに喋るガドルだが、その内心ではこれ以上ない程にダグバの力を持ったクウガに対して興奮をしていた。

冷や汗をかかされそうな程の圧倒的な力。

ダグバがかかって戦った黒の金のクウガとはまた違う、狂った故の強さ。

恐らくはその力に精神の方が付いていけなかったのだろう、とガドルは推察した。

同時に、失望をしてしまった事を撤回する。

グロンギの頂点たる「ン」に相応しい力、その鱗片を味わえた事に感謝をした。

完全に狂えば今の自分を楽々と超えられるであろう実力。それを倒せたのであれば、自分は更に高みに登れるとガドルは確信している。

「面白い——おい、そのリントの女」

「!?……何かしら?」

次は自分の番か、と身構えていたマミは警戒しながらも慎重に様子を伺う。

「クウガに伝えておけ。明日のこの時間、人質と共にこの近くの廃工場で待つとな」

「……人質?」

人質という言葉に疑問を抱いた次の瞬間。ガドルは米俵を担ぐ様にはむらと倒れていたさやかを担いだ。

「な、どこ触ってるのよ、離しなさい!?!」

「黙れ、貴様らはもう一度クウガと戦う為の人質になってもらう」

ほむらがジタバタと暴れても、ガドルは全く離してくる様子はない。

それも当然だ、普通の蟻が象に敵わないのと同じで、ほむらがいく

ら暴れようがガドルはそれ以上の力で拘束している。

流石に蟻と象程力量が分かれている訳ではないが、それでも腕力で言えば彼の方が圧倒的に上なのだ。

しかし当然、それをマミが見逃す筈がない。

「二人を離しなさい！」

「銃か。撃つのは勝手だが、俺は容赦なくこの二人を盾にするぞ？」

「ッ……い！」

銃を出現させて構えるマミだが、ガドルの言葉に心を揺らされる。

その隙について、ガドルは二人を担いだまま人間離れした脚力を使い、上空へ飛び上がり、そのまま暗闇に消えていつてしまった。

「美樹さん、暁美さん……い！」

人質にとられたとはいえ、慕ってくれる大切な後輩を守れなかった自分を心中で責めるマミ。

悔しい。勇気の足りなかった自分に反吐が出てしまいそうだ。

しかしそれ以上にやらなければいけないことを忘れたわけではない。

杏子の無事は、ソウルジェムの魔力で確認できる。だからといって後回しにする事を申し訳なく思いつつも、腹から血を流して倒れている輝夜に駆け寄り声を掛けた。

「輝夜さん、大丈夫ですか!?! 輝夜さん！」

「……っ」

声を短く上げた事から、とりあえず息はしているらしいとマミは安堵する。

しかし、輝夜のその表情はどこか悪夢に魘されている様でもあった。

それが何を意味するのか分からないマミは、とりあえず輝夜を道の端に横たわらせ、同じく気を失っているだろう杏子の救出に向かった。

——輝夜の腰に取り付けられたままのアークルの霊石アマダムが、異常をきたしている事を示すかの様に妖しく光ったのにも気付かぬまま。

—— ■■■さん、俺、な■■■す ——

—— ■■■は、■■■だけしていて■■■しかった ——

「う、ん……」

猛烈な眠気が引き、目が覚める。

何か長い夢を見ていた気もするが、内容は思い出せない。

「……知らない天井ね」

天井に見える壁の模様には、見覚えがない。

身体を起こして辺りを見回してみるが、やはり見知らぬ部屋だった。

お洒落なカーペット。いかにも洋風、といったデザインの手すりが付いた階段。

一つだけ言えるのは、恐らく一人暮らしの部屋である、という事だ。

「私、なんでこんな所に……？」

そう、確か昨夜。

魔獣と闘い、マミちゃんやほむらちゃんと別れてさやかちゃん達と帰って……

それを、思い出してしまった。

「っ、そう、私、は……！」

違う、違う、違う！あれは私じゃない。

私は戦いを楽しむ様な事はしてない。私は暴力を振るう事に身を任せてなんかいない。私、は——

『——死になさい』

ほむら、ちゃんを。殺そう、と、なん、か——

「ああ、そんな、な——」

心の何処かで、それは分かっていた筈。

その筈なのに、私は認めたくなかったのだ。

私の本性は暴力を楽しむ様な、最低な人間だという事を。自分から、あの狂気を望んでいたという事を。

全て、認めたくなかったのだ。

「……あ、輝夜さん！目を覚まして……輝夜さん？」

「、来ない、で——！」

ママちゃんが心配そうな顔をして近付いてくるが、それを手と声で必死に静止する。

駄目だ、今は。

今近付いてきた人を、私は受け入れられる自信がない。

「っ……すみません……あの怪人が、昨日と同じ時間に人質と共に廃工場で待っている、だそうです」

「……そう」

心配するママちゃんの事を思わず拒絶してしまい、ママちゃんは沈んだ表情になる。

それを見るだけで、自分に対する嫌悪感はますます増大していく。

最低だ、最低だ、最低だ。一言だけ返し、その場で立ち上がる。

——今の私が、戦える気がしない

「……ちよつと、外に出てくる。ちゃんと約束の時間には行くから」

「外って、お腹の傷は……！」

何か言っていた気がするが、そんな物を機にする余裕は今の私にはない。ひたすら衝動を抑える事だけを考えていなければ、多分私自身が耐えきれないからだ。

ママちゃんの住んでいたマンションを飛び出し、行くあてもなく街

を駆け回る。

何かから逃げる様に、ひたすら。

もし止まってしまえば、その何かに捕まってしまうそうだったから。

そうしてひたすら走ったその先。ふと立ち止まってみると、そこは河川敷だった。

距離にしてどれくらい走ったのか、想像もつかない。

「……」

走り回って逃げていても、仕方ない。

その土手に、思い切って仰向けで横たわってみた。

太陽の暖かな光が、私を包み込む。普段なら穏やかな気持ちでそれを堪能出来るが、今の私にとってはそれすらも堪えかねる。

「あれ？あなた、もしかして……」

「……え？」

そこで、不意に後ろから声を掛けられた。立ち上がって振り向くと、見知らぬ子連れの夫婦が立っている。

しかし夫婦の内の女性の顔には、見覚えがあった。

それも当然だ。何故ならその女性は、昨日私が昼間に助けたあの人だったのだから。

「やっぱりそうだ！」

「お知り合いかい？」

「ああ、まあ、昨日ちよっと、ね。困ってたのを助けてもらったのさ」
女性は夫と思わしき男性の疑問に、少しボヤかしながらも答える。今の言い方からして、恐らく私を匿ってくれたのだろうか。それとも、人外の怪物に出会った等という虚言とも取れない事を話すのは戸惑うからなのか。

いずれにせよ、彼女に感謝しなければいけない。私の存在をバラさないでくれているのだから。

「あ、今時間ちよっとだけ良いかな？出来れば、ちゃんとお礼を言いたいんだけど……」

「……ええ、まあ」

「ごめんなさい、ありがとうございます。少しタツヤの事お願いしてもいいかな？」

「うん、大丈夫だよ。ほら、パパと一緒にあつちで遊ぼうか」

やはり夫だったのだろう。穏やかな父親としての一面を見せながら、タツヤと呼ばれた男の子と共に河川敷の方へ向かっていつてくれた。気を使って貰って申し訳ない。

張本人である彼女は、座り込む形になっていた私の隣に座る。

そうしたら急にこちらを向き、勢いよく頭を下げた。

「昨日は本当にありがとうございます！お陰で命が助かった！」

「え、いや、そんな頭を下げなくて……」

「それくらい感謝してるんだ、アタシは。あの時急に襲われて、もう息子や夫に会えないのか、なんて思うと……ね。そんな時に、助けられたのがアナタだった。お陰で命は救われたんだけど……何か、怖くなっちゃってね。仕事休んで、家族水入らずで過ごしてたんだ」

語っている彼女の視線は、向こうの河川敷で遊んでいるお父さんと息子さんに向けられている。

「……あ、勿論アナタの事は誰にも話してないから。あいつが人間の敵うような相手じゃないって事はよく分かる。警察に言って話しても、どうせ実際に見なきゃあいつらは信じないしね」

「……ありがとうございます」

「……元氣ないみたいだけど、何かあったのかい？」

怪訝な顔をした彼女が尋ねてくる。

無理に平気な顔をして対応しようにも、どうしてもバレてしまう物なのだろう。

「……まあ、昨晚ちよつと。強い奴との戦いに、負けちゃいました」

「え……ちよ、ちよつと！怪我は大丈夫なの!？」

負けたという事を聞いて、慌てて私の心配をしてくれる。

やはり、彼女は優しい人なのだろう。その優しい心が、少し羨ましくもある。

「ええ、まあ。私、怪我しても直ぐに治っちゃうんですよね」

そう。私の体は、アークルが体内に埋め込まれている影響からなのか傷の治りが恐ろしく早い。

昨日剣で刺された傷も、もう治っているのだ。

……今ならわかる。多分、正しく生物兵器として

ある為の防護機能の様な物なのだろう。

兵器が傷付いては、困るのだから

と。そんな事を思っていると、唐突に。

私は、彼女に抱きつかれていた。それはまるで、子供をあやす母親の様に。

「え……？」

「傷っていうのはな。例え消えても、その人の心の中に残っちゃう物なんだよ。傷が消えたなんて、そんな辛そうな表情をして言う物じゃないよ」

「そん、な……」

そんな、筈は。無い。

今の私の顔は、普段通りの筈だ。

そんな、辛い、なんて。

『ほらあ、もっと私を楽しませてよー！』

「ツ——！」

唐突に、思い出すのは昨日の私。紛れもない、本性。本当の姿。狂気に塗れているのが、私なのだ。

そんな私が優しくされる資格なんてない。

しかし、それでも。彼女は、私を抱きしめる力を緩めないばかりか、更に強くする。

「大丈夫、怖くない。怖くないから」

「……離して、ください。私、昨日大切な仲間も殺そうとしたんですよ？あなたなんて——」

「アナタはそんな事しないよ。ほら、自分の顔を見てみなよ」

そう言つて彼女は、持ち歩きの手鏡を手提げバックから取り出して私の顔を見せてくる。

そこに写っていた私の顔は――

「誰かを傷付ける事に躊躇わない奴は、傷付ける事を怖がつて泣いたりなんかしないさ」

――泣いて、いたのだ。

彼女は取り出したハンカチで、私の顔を拭ってくれる。

まるで、泣き腫らした自分の子供の顔を拭う様に、しようがないなという顔で、笑いながら。

「ほら、別嬪さんの完成さ――おっと!？」

そこで、堪らずに。

私の方から、彼女の胸に飛び込んでしまったのだ。

それでも嫌な反応を一つも見せずに、彼女は泣き囁る私の事をまた抱きしめてくれていた。

一通り、泣き終わった所で。

自分がどれだけ恥ずかしい事をしていたのかを、脳が正確に理解して。

私は、心中で悶えていた

「……すみません、凄く恥ずかしいところをお見せして」

「ううん、いいんだ。元はと言えばアタシから子供扱いしちゃったしね」

いつそ殺してほしいとも思うくらい、今の私は悶えている。

それでも、この母親の様な事をしてくれた彼女は私に対して笑いかけてくれている。

「アンタみたいな娘がいたらなー」と言っている彼女に、私は感謝した。

彼女のお陰で、胸の中にあつた黒い感情は晴れた。まるで青空の様な、清々しい気分になつている。

「……その、ありがとうございます。お陰で、楽になりました」

「こんなおばさんのお節介で笑顔に出来たなら、それが何よりさ」

「……私、笑つてます?」

「気付いてなかったの?今のアナタ、凄く綺麗な笑顔をしているよ」

……無意識すぎて、自分でも気づかなかつた。そうか。今の私は笑っているのか。

再び手渡された手鏡を見る。そこに写っていたのは、多分先程までの私では出来なかつた笑顔。

自分の笑顔で言うのも何だが、見ているだけで清々しい気分になりそうさ。

「……気付きませんでした。笑顔つて、とても素敵な表情です」

「そうだろう?やっぱり、人類皆笑顔でなくっちゃ。そうすれば、辛い時も乗り越えられるしね」

「——そつ、か」

彼女からしたら、何気ない言葉だったのかもしれない。

でも今の私にとって。それは、自分の世界を変える様な言葉だった。

笑顔というのは、とても素晴らしいものだ。

見ているだけで人を勇気付けてくれる事もあるし、励ます事もある。

それならば、笑顔でない事は?

勿論悲しい。沈んでいる気持ちは伝染して、その場を悲しみに包み込む事もある。

笑顔とは、人に幸せを届けられる様な効果を持っている。人類の宝の一つと言っても過言ではない。

だったら。今この人が、私にやってくれた様に。

私は、皆を笑顔にしたい。そして皆の笑顔を守りたい。

その為なら戦える。そう思うくらい、妙に心にしっくりくるのだ。そう、まるでなるべくしてなったような。元々、そうであったような。「……悩み、解決したかな？」

「はい、全て。さて、私はそろそろ行きますね」

「ああ。私は見ている事しか出来ない、卑怯な立場だけど——頑張つて、って。言ってもいいかな？」

「ええ、勿論。あ、じゃあその代わりに、あなたのお名前を伺ってもいいですか？」

「アタシ？ああ、まだ名乗ってなかったね……鹿目詢子、って言うんだ」

「詢子さん——ええ、覚えました。ではまた、何処かで！」

彼女——詢さんは、頑張れよと言わんばかりに親指を立て。

私も、それに返す様にサムズアップをした。

あの時、力に飲まれた恐怖を忘れたわけではない。

あの時、腹を貫かれた痛みを忘れたわけではない。

それでも、笑顔を守る為なら。それを乗り越える事が出来そうだった。

何故かというところ——多分、私がクウガだからだ。

人気の無い廃工場で、その男——ゴ・ガドル・バは、さやかとほむらを縄できつく縛り、口にも噛ませて、仁王立ちで構え立っていた。

精神を統一させ、コンデイションを万全に。

昨晚見た狂気のクウガを思い浮かべて、それを乗り越えるイメージトレーニングを果たし。

静かに、その時を待っていた。

そこまで彼がする理由。それは、彼が一度死んだ存在だったからだ。

ガドルには、一度死んだ記憶がある。

強敵であるクウガとの対決の末、その命を落としたのだ。

しかし、気付けば彼は見知らぬ場所に倒れており、彷徨っていたら輝夜と出会い、クウガという言葉聞いて対決を挑んでいた。

これは運命か何かだ、とガドルは思った。

あのダグバの力を宿したクウガを乗り越えるのが、蘇った自分に課せられたゲゲルの様な物なのだ、と。

そう思い、心待ちにしていたのだが。

「……俺は、クウガとの戦いを望んでいたのだが？」

「輝夜さんは今戦える様な状態じゃない。代わりに私が相手をするわ」

その前に立ちほだかったのは、他でもない。

覚悟を決めた表情をしている、マミだった。

マミがここへ来た理由は一つ。輝夜の代わりに、戦う為だった。

輝夜がああ調子では戦うのは無理だろうし、そもそもああ精神状態で戦わせたくない。

「……人質のリントを助けたいからか」

「ええ、その通りよ。こんな不甲斐ない先輩が、たった一つ出来る事だから」

あの時、勇気が無かった自分をマミは悔いていた。手が届く場所にいたのに、それが助けられなかった。

自分が情けなくて本当に仕方がない。

だからこそ、先輩として自分が後輩達を助け出すと。その決意を持ってここに来ていた。

「(マミさん、逃げて下さい！そいつは——)」

「(分かってる。それでも、信用して待ってて)」

慌ててテレパシーで話しかけるさやかは制止は、今のマミには届かない。

マミは自分の実力を過大評価しているわけではない。相手との力量差もきっちり分かっているつもりだ。

だから分かる。マミがこれまで相手して来たどの魔獣よりも彼が

強い事に。

それでも彼女は戦うのだ。大切な仲間を助ける為に。心配をさせない様に、ガドルの後ろで縛られている二人にマミはニコリと笑いかける。

自分の心に広がろうとする不安を、必死に抑えながら。

「……まあいい。クウガが来るまでの暇潰しになるだろう。どれ、手合わせ願おうか……!」

その言葉と共に、ガドルは怪人としての姿に変身する。

その姿は雷撃体と呼ばれるのではなく、目の色が赤である所謂格闘体と呼ばれるものだ。

「昨日と姿が違う……?」

「貴様相手にはこれで十分だ。弱きリントの戦士よ」

「……あら。その言葉、前言撤回する事になるわよ!」

言葉と共に、ガドルは飛び出した。

昨日少し相対した時に、マミの使用する武器が銃である事をガドルは知っている。接近戦に持ち込めば勝てると思った故の行動だった。

対するマミは、落ちて着いて自分の周囲に銃を展開。その一斉放火で、ガドルを迎え撃つ。

しかしそれは、常人とは圧倒的に異なる硬質な肌を持つガドルにとっては無意味。鉄の壁を、小石を投げて壊そうとする様なもの。

「ふん、この程度——!?!」

無意味な物だ、とその身で受けようとしたガドルは次の瞬間驚愕する事となる。

自分の体に弾かれた丸い弾丸が、毛玉の様にほつれ。質量を無視した量のリボンとなり、自身の上半身を包み込んで来たのだから。

「バビ?! (なに?!?)」

驚愕したガドルの視界が、黄色一色に染まる。

しかし、魔力を込めて強化されているとはいえリボン。高が知れているそれを、ガドルが引きちぎるのは簡単な事だ。

そしてそれは、マミも分かっていた事。

「ム……!?!」

再び視界が確保されたガドルの前には、マミの姿は一切無かった。右、左、後ろ。振り向いても何処にもいない事に一瞬戸惑った刹那、まだ見ていない場所がある事に気付く。

そう、上。

振り向いた先には、天井一面を埋め尽くす程のマスケット銃が展開されており。

「少しじゃ駄目でも、この数だったらどうかしらー！」

一斉に放火。

激しく鳴り響く爆音と共に、空を埋め尽くす程の銃弾の嵐が、ガドル目掛けて襲いかかって来た。

「グ、ヌウ……いー！」

雨粒が降りかかる様に襲い掛かる銃弾。

一発程度なら何ともないそれも、何十、何百と同時に絶え間なく降りかかって来れば、勢いも相まってその皮膚を削り、ダメージを与えるのには充分すぎる程だ。

「な、めるな……いー！」

しかし。それはあくまで、少しダメージを与えた程度。

その程度でやられるなら、彼は破壊のカリスマの異名を名乗れていない。

銃弾を全て受けきったガドル。その心中に、マミに対する弱者という評価は消え去っていた。

それを示すかの様に変身。クウガを打ち倒した、雷撃体に再び姿を変えた。

新たに現れた強者との戦いに、ガドルは嗤う。

「——認めよう、リントの女よ。貴様は強い」

「お褒めに預かり光栄だわ。後輩を助ける為だもの、これくらいしなくつちやね——！」

二人が飛び出したのは、同時だった。

お互いに自身の近接射程まで入り込み、激しい競り合いが行われる。

当たったら即死であろうガドルの拳が、マミの頭目掛けて振るわ

れ。

頭を逸らしてそれをかわし、出現させたマスケット銃をまるで棍棒の様に振るうマミ。

「接近戦なら銃に勝てると思ったかしら？」

「対策済みか——それも面白い！」

身を傾けてそれをかわすガドルだが、マミは素早く構え直すとそのマスケット銃から弾を放ち。

ガドルは、それをかわした。自分から喰らいにかなかったのだ。

「あら、先程までは当たってくれてたじゃない」

「わざわざこの局面で危険を顧みずに撃つたのだ。何かあると思うのは、当然だろう？」

仕掛けたマミにとっては凶星の様な物。返事と言わんばかりに、不敵に微笑んだ。

それもそう、今マミが撃った弾は特別魔力が込められた特別品の様なもの。おおよそ10丁程のマスケット銃分の魔力を込めているそれは、無駄遣いが出来ない代わりに、雷撃体となったガドルをも貫く自信がある物だった。

「あら残念。さつきと同じで、油断しているかと思ったのだけれど」「生憎、それで反省したのでな」

ガドルの猛攻に、マミは耐え抜いていた。体術を交えたそれは、鍛え抜いて来たガドルの技術に劣っていない。

それも当然。バマミはとある例外を除けば、魔法少女の中でも本来最強と称される少女でたる。単純な戦闘能力に加え、長い戦闘経験で培って来た勘。リボンを交えた拘束と、武器に頼りすぎない為に身につけた体術。

それらが合わさり、しかもマミの精神状態は絶好調。

今のマミを止められる者は、早々といない。

「ははははははー！」

一方のガドルは、また笑っていた。

久しく見ぬ実力者。しかも、クウガではない。超常の力を持っているとはいえ、生身の人間なのだ。喜ばない筈もない。

「——そろそろね」

「何？」

今尚行われている近接戦の最中。

唐突に、マミが呟きと共に上空に飛び上がったのだ。無論、それを追いかけてようとするガドルだが、それは叶わない。マミが呟いたその瞬間に、全ての準備が完了したから。

そもそもの話、近接戦でガドルに対抗出来る程の切り札をマミは持っていない。その経験と熟練の技を武器にして、あくまで対等に戦えているだけの話なのだ。

では何故、近接戦に持ち込んだのか。至って簡単だ。広い視野を持たれ、自分たちの周囲——普段なら既に消えている筈の散らばったマスケツト銃を魔力代わりの媒体にして、大規模な魔法を展開しようとしている事を悟らせない為だった。

そして、その魔法が起動する。黄色い、巨大な魔法陣がガドルの立っている場所を中心に展開。

その魔法陣の向こう側から現れたのは、またまた無数のリボン。しかしその数は、先程までの比ではない。

先程までは、精々が数十本。

今回のは——その場の誰にも数えきれないが、恐らく千を超えるのではないか。

そう思わせる程の数。工場一帯を包み込んでしまいそうなそのリボンの一部が、ガドルを拘束した。

「な、んだと——!？」

「膨大な魔力を引き換えにしたんだもの。その拘束は振りほどけないわ」

マミの言葉通りだ。ガドルがいくら力を込めても、それはビクともしない。

当たり前だ、それは先程の数千倍もの強度を誇る無数のリボン。解けた所で、また拘束されるのがオチだ。

そうしてガドルが争っていると、残りのリボンが再び収束し。

いつも彼女が使う物よりも更に一回り大きいサイズの大砲が、ガド

ルを狙う形で出現した。

「ここまで火力を出した事は無いけれど、偶にはかっこつけなきやね——テイロ・ファイナーレ！」

そうして彼女は、何時もの様に。

昔TVを観ていて憧れたヒロインの魔法少女の様に、必殺技の名前を叫び、自分を奮い立たせながらも大砲を発射した。

「グ、ヌオオオオオ！」

最早ガドルに、残された手はない。

放たれた巨大な砲弾を模した魔力の塊が、ガドルに近付いて行き——その場が、爆炎に包まれた。

「(うわあ、مامィさんすっげえ……)」

「(当たり前でしょ。あの人、絶対調の時の強さは半端じゃないんだから。メンタルが崩れやすいだけで)」

これが、絶対調の時のバمامィ。

何かを助ける為に戦う彼女の強さは、そこいらの魔法少女とは比べ物にならない。

「……そんな」

「全く、間一髪だったな」

その筈、なのに。更にその姿を変え、ガドルは蘇ってきていた。体の所々に、更に装備された装飾品。

その厳格な見た目とは裏腹の、薄いピンク色の眼。

そして何よりمامィが気になったのは、彼から感じられる魔力だった。

「確かに先程までの俺であれば、砲撃で死んでいただろう。しかし当たる直前、この身——正しく言えば、このベルトの魔石ゲブロンが、貴様が持つその力を吸収して進化を促進させた」

「そん、な……!?!」

確かにمامィは先程まで惜しみなく魔力を使っていた。よって今の廃工場は魔力が立ち込めた状態になっている。怪人にとって未知の力であるそれを吸収し、進化したというのにも一応筋が通っている。

それはママも理解している。

だけど、それでもあまりにも理不尽。ママの一撃は、確かに届いていたのに。

もし進化していなかったら、間違いなくその一撃はガドルを打ち砕いていただろう。

しかし、理不尽な存在だからこそその怪人。だからこそそのガドル。

「さて、行かせてもらうぞ——！」

ガドルは強化された脚力で一瞬でママに近付き、一撃。鳩尾に拳を叩き込む。

動揺しているママには、それに反応する事が出来ず。容赦なく、その意識を刈り取られた。

「貴様は強かったぞ、リントの女よ」

ママの魔法少女としての変身が解除され、その場に倒れこむ。

その前に立ち尽くすガドルは、自分の新たな進化に喜びを覚えていた。

ガドルに宿った新たな力——魔法体とでも名付けるべきだろう——は、ガドルの力を更に高みに上げ。

今の彼ならば、ダグバと互角以上に戦えるだろう、と。そう自分に思わせる程の力が宿っていた。

「フフ、フハハハハ！これならばダグバに勝てる、勝てるぞ！」

抑えきれずに思わず高笑いをするガドル。

そんな彼は、魔法体として覚醒した影響により強化された感覚で、先程から此処に近づくところある気配を感じ取っていた。

姿形は違えど、それはガドルの好敵手。

「誰に勝てるって？」

「——来たか、クウガよ！」

クウガ。それに変身する輝夜が、廃工場の入り口に立っていた。

その表情からは、迷いが一切見受けられない。まるで友人に話しか

ける様な、そんな気さくな表情をしていた。

「……何があった？ 貴様、一皮剥けたような顔をしているぞ」

「あら、そうかしら……そうね、多分戦う理由を見つけられたからじゃないかしら」

「ならば、全身全霊を以って相手をしようではないか——！」

威嚇をする様に、ガドルの全身から魔力が噴出する。

常人なら恐怖で気絶するだろうそれも、今の輝夜にとってはそよ風のような物。

気にせず、アークルを展開した。

「私は、皆の笑顔を守る為に戦う。だからこそ——」

語る輝夜の顔が一変。

笑顔から、真剣な表情になり。真つ直ぐと、ガドルを見据え。

「——皆の笑顔を傷付けたあなた、そして私が許せない。その為に戦ってみせるわ、究極の闇を継ぐ者として——クウガとして！ 変身——！」

その表情を覆い隠すように、白きクウガの鎧は纏われる。

それは、何時ものクウガとは少し違う風貌をしていた。

基本的な色は変わらない。しかし、何時もの鎧が異なる形に変化していた。

肩には金色の肩当ての様な物が装着され、白い鎧には黒い血管の様に組織が浮き出ている。下半身を太腿辺りまで覆う様な金色の前垂れが、装着されている。

ガドルは、その姿に——否、より強まったその風格に覚えがあった。昨夜と同じ、或いはそれ以上。

しかし、昨日とは決定的に異なるのは。彼女から、ドス黒い殺気を感じられない事だった。

「ダグバ——！」

「あなたも進化しているみたいだけれど——私も、少し進化したみたいね」

仮面ライダークウガ ダグバフォーム。それは、まだ不完全ながらも真の姿を取り戻していた。

ダグバの力を受け入れられなかった時よりも、そして精神が狂っていた時よりも、その力はずっと強いだろう、と。

ガドルは、戦う前からそう感じていた。

理不尽なまでの成長を遂げた彼女に、ガドルは怒ってなどいない。否、逆にまた喜んでいる。

進化した自分と、また渡り合えそうな相手が来たのだから。

「クウガ——ジャザシ、ゴセンラゲビダチズガガスバ（やはり、俺の前に立ちふさがるか）」

「ええ。貴方が誰かを傷付ける限りね！」

それを皮切りに、二人の最強同士がぶつかり合う。

クウガが脚力を用いて一瞬で近付き、硬質な腹部に膝蹴りを叩き込もうとするが、一步後ろに下がったガドルに届かず。

再びその距離を詰めて来たガドルの拳が、無防備なクウガに激突する。しかし、当たったのは咄嗟に交差した腕。大したダメージにもならない。

ならば追撃だ、と言わんばかりにガドルがもう一方の拳を放とうとした時。

下からの衝撃とともに、ガドルの視界が揺れた。

「ガッ……!?!」

「甘いわよー！」

つま先での蹴りが、ガドルの顎をアッパーカットをするような形で蹴り上げていた。

魔力で強化されている体とはいえ、生物の弱点とも言える脳を揺らされれば隙も出来る。

脳が揺れて状況が整理できないガドルに、クウガの容赦ない追撃。

右腕に炎を纏わせると、一撃。その場の空気を一気に燃え上がらせる様な爆炎とともに、その拳が無抵抗のガドルをブチ抜いた。

「喰ら、えええええええ！」

「おおお——!」

想いを込めた炎が、強化された筈の硬質な皮膚を焼き尽くす。

全身を焼き尽くされるその痛みは、尋常では無いはずなのに。それ

でもガドルが膝を付くこともなく、ただひたすらそれに耐えていた。それは、ガドルの並外れた精神力がさせる賜物。死後という特別な状況だからこそ生まれた、もう一度猛者との死闘を演じたいという執念がさせている物。

それがあれば、彼に不可能は無い。

身を振り絞って全身から魔力の衝撃波を発すると、身を包んでいた炎を一瞬で消し飛ばす。

「ボンデグゾゼゴセゾダゴゲスドゴログバ！（この程度で俺を倒せると思うな！）」

「さーて、こっからが本番ね……！」

輝夜は、再び動き出すだろうガドルを目の前にして本腰を入れ。

ガドルは、先程までの自分の醜態を反省し。吠えながらも、行動に移った。

装飾の一つを引きちぎり、モーフィングパワーを用いて剣を精製する。

それは対するクウガも同じ。新たに腕に取り付けられていた腕輪が一瞬金色に光ったかと思えば、そこから剣——輝夜のクウガがもう決して到達できないであろう、紫のクウガの獲物であるタイタンソード——を出現させ、右手で構える。

そうして互いに、ゆっくりと近付き合う。

自身の獲物の射程内まで、一步、また一步と互いを睨み合いながら、慎重にその時を待ち。

両者が同時に相手の射程に入った瞬間。同時に思い切り振るわれた剣が、二人の鎧と皮膚を切り裂いた。

「はっー！」

「おおおっー！」

両者共に少し仰け反るが、それでも再び同時に剣を振り、また傷付き。それを何度か繰り返し、斬撃音のみが虚しく響き合う。

それは、戦闘というよりかは意地と意地のぶつかり合い。ガドルは、決して二度もクウガに負けてたまるか、という意地。輝夜は、新

しく出来た戦う理由のために、絶対に倒れられないという意地。

やがて、何度めかの衝突かで二人の持つ剣は同時に刃毀れを起こした。当然だ、クウガもガドルも、今の両者を包む鎧は強固な物なのだから。

それを確認した二人は、同時に剣を投げ捨てると、今度は拳同士でぶつかり合う。

「おりゃああー！」

「フーン！」

殴る度、殴られる度に湧き上がる鋭い痛み。輝夜はそれを、この戦いの中で決して忘れることはしない。

それが、殴られる者の痛み。殴るものの、心の痛みであるから。

こんな悲しい、苦しい思いを無関係な人々にさせたくない。だからこそ彼女は心の笑顔を忘れずに、ただひたすら殴るのだ。

「きやつー！」

「クツー！」

そうしてまた何度目かのぶつかり合いで、二人は衝撃により後方まで吹き飛ぶが受け身を取り、再び立ち上がり相手を見据えた。

切り合い、殴り合った両者は既に疲労困憊。その鎧や皮膚はボロボロの状態となっている。

であるならば、取るべき行動は一つ。ここで決着をつける。それだけだ。

ガドルは体内に眠る雷の力と魔力を活性化。その二つを体内で融合させると、体から電撃状のオーラが出現し。全身にそれを纏い、それから両足にそれを収束させた。

クウガはただひたすらに、精神を統一させる。アークルを最大限まで働かせてエネルギーを作り出し、またそれを右足に集中させていた。それを示すかのように、右足が強く輝きを放ち始める。

そうして、全ての準備が終わったその瞬間。二人は同時に駆け出していた。

最早、二人の間に言葉は不要。力で真つ向からねじ伏せ、自分の意地のほうが強いと相手に分からせるだけだ。

ある程度まで進んだ地点で、二人はまた同時にジャンプ。

「フン!!」

「はああああ!!」

声と共に、同時に蹴りを放ち。それが空中で激突した。

「負、けるかああああ!!」

「オオオオオオオオオ!!」

意地でも負けを譲るもんか、と両者共に吠え。同時に背中から、ロケットという推進の役割を果たすように、ガドルには雷の、輝夜には白い輝きの、それぞれが持つエネルギーが放出される。

しかし、それは二人共両方が負けないという気持ちの一心で出した物。本来エネルギーを制御しなければ安定しない筈の物だが、強敵だけを意識している今にそんなことが出来る筈もなく。

やがてそれは、エネルギーの制御が効かなくなり。空中で大爆発を引き起こした。

多大なダメージから変身が解除された輝夜は、その場に倒れ込んでいた。

意識までは失っていないが、そうなるのも仕方がない。新たに進化したダグバフオームの力でも、魔法体となり強化されたガドルを相手するのは至難の業だった。それ程までに、ガドルというグロンギはひたすら強かった。

——しかし。ガドルは、まだ倒れていない。倒れた輝夜の目前にて、その体をボロボロにしながらも立っていたのだ。

それは輝夜もわかっていたが、彼女の体はもう少しも動かなかつた。

やっと見つけた、戦う理由。それを胸に戦ったというのに、一歩届かなかつた。それが、輝夜にとってはとても悔しくて。思わず、眩い

てしまう程。

「……悔しい、なあ。勝ったと思っただけだ」

「いいや、勝ったのはお前だ。クウガよ」

「……え？」

何とか力を振り絞り、顔を上げる輝夜。

そこに立っていたガドルの肉体。より正確に言えばベルトの部分には、クウガの紋章が確かに刻まれていた。

それはつまり、ガドルに確かに封印エネルギーを叩き込めたということ。もう、数分もしない内にガドルの肉体は爆発を引き起こすだろう。

「そんな、抵抗すればまだ……！」

「貴様と戦う前、そのリントの戦士に追い詰められたのでな。この体も既に限界を迎えている。そんな余力はもう残されていない」

そう語るガドルの声は、何処か満足げだった。

「誇れ、クウガよ。貴様は狂気にも陥らず、この破壊のカリスマを乗り越えたのだ」

「……誇れって言ったって、何も嬉しくないわよ。貴方を殺したのよ？そんな相手に言われても、正直微妙だわ」

「悲しみながら、笑顔の為に戦うか。リントの心はよく分からないものだ」

「……ねえ、ガドル。貴方は私以外のクウガを知っていたみたいだけれど、どんな人だったの？」

「そうだな。リントとしての奴は、よく知らん。ただ——」
「ただ？」

—— 一つだけ言えるのは、恐らく貴様とあのクウガは違うようによく似ている。

それだけを言い残したガドルの体は、爆炎に包まれ。

廃工場の天井を突き破り、巨大な火柱を上げる程だった。

その音で目覚めたマミはさやかとほむらの縄を解き、疲労に耐えきれず気絶した輝夜を連れてまたマミの家まで運び込まれた。

幸い輝夜は数時間程で無事に目が覚めた。覚めたの、だが。

「……で、何であなたは私のアークルの中に居るのかしら？」

『こちらが聞きたい所だ。何故俺はここにいる？』

「知らないわよ！」

目が覚めたら、死んだ筈のガドルの魂が輝夜のアークルに宿っていたのだ。

原因は不明。あまりの事態に輝夜は卒倒しかけるが、そこは何とか気を強く持ち。

話を聞いてみると、どうやら彼自身も気がついたら意識だけの存在となっていたらしく。神経系に接続しているアークル内部にいるので、輝夜の身体を操ることも可能だと語った。無論、主人格である輝夜の命令が優先されるが。

そこで、マミ達に傷付けたことを謝罪、そして絶対に人間を傷付けたり、強制的に体を乗っ取ろうとしない、という事を条件とし、戦闘の際、たまにガドルに体の主導権を渡すことを輝夜は提案。ガドルは、驚きながらもそれに承諾していた。

余談だが、ガドルの性格は明らかに少し丸くなっていた。

肉体を失って魂だけになった影響からなのか、それとも擬似的に輝夜と一体化している影響で輝夜の性格に染められたからなのか、それともその両方からなのか。

とにかく輝夜は早速ガドルに身体を譲り渡し。マミ達に謝罪をさせていた。それはもう、魔法少女たちが戸惑う程の立派な土下座付きで。

「……戦闘にて傷付けた事、殺そうとした事、誘拐をした事を謝罪する。すまなかつた」

「輝夜さんの体で言われると、何かすつごい違和感あるんだけど……」
「仲間を傷付けた奴は許せねーけど……二人がいいんだつたら、アタシはいいぜ。ちゃんと反省しなよ」

「……まあ誘拐された事は気が済んでないけれど、それも何とか済んだし。これから心を入れ替えてくれるなら、とりあえず私は受け入れてもいいわよ」

「ちよ、二人共いいの!?!?!?!?!あーもう、分かった!あたしもいいよ!意地はつても仕方ないしね!」

何だかんだで、マミ以外の魔法少女はそれを受け入れていたが。

マミだけは真剣な目付きでガドルの事を睨みつけていた。それに、他の魔法少女たちも気付いている。

当然だ、彼女からしたら大切な後輩を傷付けた相手。そう簡単に許せる筈もない。

突然その場から立ち上がった彼女は、未だ土下座をしているガドルの前まで詰め寄り。

「少し、顔を上げて貰えるかしら?」

「ああ……っ!」

瞬時に魔法少女姿に変身すると、顔を挙げさせたガドルの頬を思いつきり引つ叩いていた。

パチーン、と場に軽快に響くその音は、軽快さとは裏腹にその光景を見ていた魔法少女達の肝を思い切り冷やさせる。

叩かれたガドルは、その痛みを自分の罪だと実感しながらもそれを受け入れる様に静かに目を閉じ。その様子を見たマミは、溜息と共に変身を解いた

「大切な仲間を傷付けたあなたは正直今でも許せないけど……そこまですら、私も大人にならないとね。許すには時間がかかるけど……とりあえず、受け入れるわ。あなたのこと」

そう言つて、少し微笑んだマミ。それにガドルは戸惑うばかりで。

「……全く、リントの心は本当によく分からん」

「あら、そこはこれから学ばいいじゃない。時間はたっぷりある訳だし」

「リントを、学ぶ?……なるほど、一理あるな」

破壊のカリスマである自分を追い詰めたマミに、二度も倒したクウガ。

どちらもリントであり、超常の力を持っているとはいえ本来打ち倒せる様なものでは無いはずだ。

グロンギと人間。その違いが、恐らく自分に敗北を齎したのだろう。ならばその違いが分かれば、今度こそ。自分は、またさらなる高みに立てるのではないか。

ならば、今はその人間を観察しよう。そして、学ぶのだ。何が違うのか、何が足りなくて、自分は負けたのか。

二度死んだガドルの、新たな決意が生まれた瞬間であった。

本来起こるはずのなかった運命は、破壊のカリスマであるガドルに新たな運命を与えていた。

それが、何を生み出すのか。どんな結論に至るのか。

まだ、誰にも分からない。

「ん?……妙に心中が騒がしいと思つたら、貴様の平手でクウガが痛がっているぞ」

「え、痛覚共有してるの!?ご、ごめんなさい輝夜さん!」

『ま、魔法少女の本気のビンタ、今回暴走した罪だと思つて甘んじて受けたわ……めっちゃ痛いけれど』

第六話

失われた昨日へ

かつて、明日を守る為に戦った戦士達が居た。

30世紀の未来から来た彼ら、そして現在で戦いに巻き込まれた彼は、自分に都合の良い未来を甘受するのではなく、誰かにとつて悲惨になる未来を変える為に犯罪組織と戦い、結果現在を守り新しき未来へと繋げた——のだが。

その歴史は、粉々に砕かれた。

絶え間なく永遠を刻む筈だった時計は、何の前触れもなく止まったのだ。

そこまでに積み上げられた努力が、苦労が、そして結果が。全て水の泡と化し、何事も無かったかのように消え去ってしまった。

針が壊れた時計は、再び前に進むことも出来ないまま止まり。

再び彼らが揃い、針を進める時を静かに待ち望んでいた。

佐倉杏子は所謂魔法少女である。

キュウベえと呼ばれる生き物と契約した彼女は、平日の昼間は学生として、夜間は世界を脅かす魔獣と戦う魔法少女として、二つのやるべき事を両立をさせながら日々を過ごしている。

元々は隣町である風見野市の魔獣を狩っていた彼女だが、風見野が平和になったところで旧知の仲であるマミから魔獣狩りを手伝って欲しいと頼まれ、隣町の見滝原に移住、今はマミの家に居候をしている。

この街に来てから新たに出会った魔法少女は、二人。

美樹さやか。杏子からすれば初めに会った時から随分成長した、という印象だ。

初めて出会った時はとても弱く、険悪な関係だったが、今では背中を任せて戦ってもいい、と思える友達になれた。そう杏子は思っている。

そして、もう一人。暁美ほむら。

彼女に関しては、杏子は未だその心中をよく分かってない。

戦っている最中稀に心ここに在らずといった表情をしたり、話していると妙に自分の事を見透かされていたり、少し不気味にも思える。

しかし、戦闘に集中している時は自分達仲間の事を第一に考えたり、仲間を大切にする一面も兼ね備えている。

今の杏子にとっては、それだけで充分仲間と呼べる。呼べるのだが。

「……」

「……」

放課後。突然ほむらに呼び出された杏子は、ハンバーガー店に寄り道。

しかし一向に話す気配もなく、何処か話すの躊躇っている彼女に対しては、流石に苛立ちを覚えずにはいられなかった。

「おいこら。わざわざこんな所に呼び出しておいて、何も話さないわけ？」

「……ごめんなさい、心の準備が出来ていなくて」

どこか申し訳なさそうにするほむらの表情に、嘘はない。

であれば、本当に話すのを躊躇われるような事があるのだろうか、と判断した杏子だったのだが。

「……杏子。最近何かがおかしいって感じないかしら?」
「はあ?」

そんな突拍子も無い話をされるとは微塵も思っておらず、思わず指でつまんだポテトをトレーの上に落としてしまう程。

「ちよつと、それどういう事?」

「言葉の通りよ。何か、こう……日常に違和感を覚えたりはしてないかしら?」

何かの聞き間違いかと思わず聞き返すが、先程とは一転、ほむらにはあっけらかんとした態度で言い放ち、それが聞き間違いでないことを思い知らされた。

「アンタ、頭でも打った?」

「……そう思われても仕方ないのは分かるけど、とりあえず聞いて?」

「……杏子、あなたと私はどうやって出会ったのか覚えてる?」
「は?」

何を言っているんだ、と思いつつも杏子は昔の記憶を思い起こさせ。

難なく思い出せたそれを話した。

そう、あれは確か。

「……マミに呼ばれてこの街に来て、紹介されたのが初対面だろ?」

「……そう、よね。じゃあ、それはいつ?」

「確か……二ヶ月位前の話じゃないっけ? 詳しい日付までは覚えてねーけど」

「……それも、そうよね」

よくわからない過去の質問に杏子が答えると、ほむらはそれに無理やり納得をしている様に頷く様子を見せる

言葉の通り、杏子がこの街に来たのは二ヶ月ほど前。忘れてしまう様な期間でもないだろうに何故こんな質問を、と疑問に思う杏子。

「じゃあ……あなたとさやかとは、どんな経緯で仲良くなったのかしら?」

「は？何でそんなこと——」

「いいから答えて」

「つたく、人使いが荒いつつーか……ん？」

有無を言わせないほむらの態度に呆れながらも、杏子はまた過去の記憶を思い出そうとして、そこでふと自分の記憶に、不明瞭である部分がある事に気付いた。

思い出せないのだ。自分とさやかとの絆が深まる過程が。

仲良くなる前の険悪な関係は覚えている。

仲良くなつた後の良好な現在の関係も覚えている。

しかし、その間だけが何故か思い出せないでいる。そう、まるで存在していないかのように。

「あれ……？変だな、思い出せねえ。つーかあれだろ、戦いの中で自然に仲良くなつたみたいな」

「真面目に言ってるの？」

「う……」

容赦を許さないほむらの言葉に、杏子は思わず口をつぐませる。しかしそれはほむらの言葉が正しいと認識しているからこそ。

自分でも何故こんな事を言つたかは分からないが、杏子には実際そうであるとしたか考えられないのだ。

同時にさやかに対してもし少し申し訳なさを感じてしまう。大切な友達との記憶を一部とはいえ思い出せない、しかもそれをなあなあで流そうとした。馬鹿みたいな事を言ってしまった自分に向つ腹が立つ。

「……何故こんな事をあなたに聞いたか分かるかしら？」

「？」

「私も思い出せないからよ。貴方達がどうやって今くらい仲良くなつていったのか」

「んな、馬鹿な……!？」

ほむらの言葉は、杏子にとって安堵と驚愕を同時に覚えさせるものだった。

自分と同じ状況に陥つた仲間を見つけた時の安堵。そして、まさか

ほむらまで覚えてないなんてという驚愕。

杏子、ほむらがマミ達と共に魔獣狩りをする様になったのはほぼ同時期である事は覚えていた。

であれば、杏子とさやかとの間の絆が深まる過程をほむらは少なくとも見ている筈。

それを覚えていないという事は、つまり。

「マミとさやかにも聞いてみたけど、覚えてないそうよ。それどころか、さっきのあなたと同じ事を言っていたわ」

「おい、それって……」

「——杏子。今から風見野市に一緒に来てくれないかしら？ 確かめたい事があるの」

話の流れを切るような突然の提案。だが、杏子は不思議とその提案に否定的ではなかった。

何故かといえば多分。それを提案してきたほむらの表情が、普段の彼女と同じ様に見えて違う——確かな感情を露わにしているものだからだろう。

少し考えた後にカップに残っていた飲み物を飲み干し、鞆を背負う様に持って立ち上がると一言。

「地元であたしが通ってた美味しいラーメン屋があるんだ。そこで晩飯奢ってよ、それが条件」

「……ありがとう」

いつもと変わりない、八重歯を見せながらの活発な笑顔をほむらに向けた。

見滝原から風見野までの距離は、バスで数十分程。

風見野のバス停に着いた時には既に夕日は沈みかけ、空を暗闇が覆

い始めていた。

バスから降りた杏子の目前に広がっていた光景は、正しく杏子の知る通りの街の風景。

自身の記憶と何ら変わりないそれに、記憶に自身が少し持てなくなっていた杏子は安堵。

一方ほむらは、険しい表情で街の風景を見つめていた。

「記憶の中の風見野市と何か変わりはある？」

「いや、今の所はねーよ。前とあまり変わりない」

「……じゃあ、散歩がてら街を見て回るわよ」

そうして、時間としてどれ位が経過したのか。

風見野中を満遍なく歩いて回り、たまにほむらが立ち止まったかと思えば杏子に記憶と変わりがないか尋ねて、変わりがないと答えるとまた足を動かす。

何度かそのやり取りを繰り返した後、二人が辿り着いたのは。

「……は」

口からこぼれ落ちる様に杏子が呟いた。

外観からでも分かる、凄まじく荒れ果てた教会。

ボロボロになったそれは杏子の記憶にあるそれ——過去の、父の教会と同じ。

「……扉が開いてるわね」

ただ一点、二人がが気になるのは。その扉が——恐らく何年振りかに——開かれているという事。偶然とは思えないタイミング。覚悟を決め、開かれた扉の隙間から恐る恐る教会の中に入った。

外観の様子と同じくボロボロになった中は、もう何年も使われていない事を知らせているかの様。

しかし奥の講壇の上。我が家の様にくつろいで寝そべっている何者かの影が確かにあった。

「っ——おい、そこで何してやがる！」

怒りを露わにした杏子の怒声が、教会中に響き渡る。

荒れ果てたとはいえ、元々は父親が運営していた教会。我が物顔で居座られていたら、怒るのも無理はない。ないのだが。

「あア……？」

その時ばかりは運が悪かったと言うしか無い。

寝そべっていた上半身裸の男が講壇から降り、杏子達の方を向いて一睨み。

蛇の様なその瞳が、二人を貫いた瞬間。彼女らが今まで味わったことのない様な恐怖が、二人の身体を縛った。

「何だ、あいつは……!?!」

「体が動かない……!?!」

運動をしたわけでもないのに、心拍が上がり呼吸が荒くなる。体内が活発だと言うのに、その身体が動く事はない。

正に蛇に睨まれた蛙とでも言うべきか。

「何だ、テメエ等は」

講壇の近くに置いてあった椅子。その背に掛けてあった蛇柄のジャケットを羽織ると何故か椅子の上に置いてあったスタンド式の鏡を右手で乱暴に掴む。

その後黒いズボンのポケットから長方形状の何かを左手で引つ張り出した男は、動けないほむら達に近付いてきた。

しかし、彼女らは幼くても超常の世界に身を置いている魔法少女という存在。

恐怖を無理矢理にでも断ち切りその身を光に包ませ、魔法少女としての服を纏い、本能的にそれぞれの得物を男に向けた。

普段の二人ならば、丸腰の一般人に武器を向ける等絶対にしない。しかし彼から発せられる気配は、二人が今までに感じたことのない程にどす黒い物。

純粋な悪意と言ってもいいそれは、二人を最大限警戒させても不思議ではないものだった。

そしてそれは、男が二人の変身した姿を見るとより一層濃いものに

なる。

「ライダー、じゃねえなあ……まあ、何でもいいさ」

「——新たな祭りの始まりだ」

言葉と共に鏡を乱雑に上に放り投げ、男——浅倉威と呼ばれる男が、左手の「カードデッキ」を向けている姿を投げた鏡に写し出す。直後、浅倉の腰に中心部に窪みがあるベルトが出現。宙で一回転した鏡が再び浅倉の姿を映し出した時、紫の鎧に包まれた蛇の戦士が誕生していた。

黒の素体の強化スーツ。その上から手足と胴体を覆う紫の鎧。蛇の頭を模したデザインの頭部。

左手に同じく先端が蛇を模した杖「ベノバイザー」を握ったその戦士。

その名は王蛇。仮面ライダーという英雄の名が一番似合わない戦士。

「ああ……こつちもイライラしてたんだ、楽しませろよナア！」

新たな獲物を見つけた蛇が舌舐めずりをする時の様に王蛇が頭をゆっくりと動かす。

ほむらや杏子にとって、謎の男が変身したその姿には見覚えがあった。

遊星や輝夜の使う英雄の力——もつと細かく言うならば、輝夜に教えてもらった「仮面ライダー」と呼ばれる方の特徴によく似ていた。

二人に次ぐ新たな戦士。英雄という名前から程遠い、言うなれば殺人鬼の様な雰囲気醸し出しているそれは、ほむら達にとっても最大限警戒するべきもの。

「ほむら、アンタは後ろで見てな。この場所じゃ弓は扱いにくいし、何よりその場所ならやばい時直ぐに逃げれる」

「あら、心外ね。私がさっさと逃げる様な性格に見えるかしら？」
「(……) ったく、気をつけるよ。コイツやべえぞ……！」
「(ええ、分かっている。あなたこそ注意して。この男、残忍さだけで言うなら恐らくこれまでの敵よりも上よ)」

そんな状況でも、魔法少女達は身体と心を縛る恐怖を跳ね飛ばし。恐怖からか無意識の内に下に向けていたそれぞれの武器を、再び構え直す。

「黙りこくってねえで、さっさと俺と戦え！」

『SWORD VENT』

テレパシーで会話した二人を見て更にイライラした様子の浅倉が、勢いよくカードデッキから一枚のカードを引き抜き、ベノバイザーの先端に備え付けられていた挿入部分にカードを挿れる。

くぐもった男性の様な低い音声が鳴ると、王蛇の右手に蛇の尻尾を模した剣「ベノサーベル」が出現。

握られたそれを、子供が拾った木の枝を振るようにブンブンと振り回している様子は、まるでそれを振るう感覚を取り戻している様。

直後、浅倉によって上に放り投げられていた鏡が地に落ちて粉碎され。

同時に、杏子と王蛇が駆け出した。

「おらあぁあー！」

元々そこまで気性が荒いわけでもない杏子が、珍しく雄叫びに近い声を上げながら姿勢を低くして一気に地を駆ける。

相手の得物は剣。対して、杏子は長槍。射程で語るならば杏子が有利。

俊足を用いて、一気に王蛇の目前まで距離を詰めた杏子が槍を振る

うが、それは槍と同時に同じ軌道で王蛇が振るったベノサーベルに防がれる。

それを何度か繰り返し、衝突する度に互いに衝撃で後退し、しかしそれでも再び衝突し。

「この程度か？もつと楽しませてくれよ！」

「へっ、んな事言っているとその内足をすくわれるぜ、おっさん！」

軽口を叩きながらも何度かの競り合いで杏子は気付いた。刃を重ねる毎に、この男の力が少しずつ、しかし確かに上がっている事に。

今はまだ誤差で済む程度だが、まるで戦闘の感を取り戻していくかの様に力の上がり方は増して行っている。このままなら、あと何度かの衝突で不利になる。

「……さーて、そろそろ勘が戻ってきたぜ」

そんな事を考えていた直後の衝突。王蛇の言葉と共に、それまでとは一線を画する様な凶暴な刃が。杏子の槍を軽々と跳ねばし、教会の出口付近の床に突き刺さった。

「な」

「甘いんだよー！」

宙に飛ばされる槍。直前までそれに体重を乗せていた杏子は、無理やりそれが飛ばされた事により身体のバランスが崩れてがら空きに。

好機を見逃さず、相手が少女だとしても容赦なくその身を切り裂こうと刃を振るうが——突如その腕に走った鋭い激痛が、その行動を阻害した。

「ッ……!?!」

いかに狂人と謳われる王蛇であろうと、人間である以上身体の機能である痛覚を完全に無視することはできない。

構えていたベノサーベルを落とす、腕の痛みが走る部分——矢で貫かれた様な傷跡が鎧の上からあるその部分を抑えながら、それを行ったであろう存在——弓を構えていたほむらを、仮面の下からでも想像に難くない憎悪の表情で睨みつける。

「立てるかしたら、杏子？」

「ああ、何とかな……わりい、助かった」

「——決めたぜ、まずテメエからぶっ潰す！」

横槍を入れたほむら——無論、単に苛立ちの衝動がほむらに向いただけというのが理由だろうが——に完全にキレたという様子で叫びながら、再びカードデツキから引き抜いた一枚のカードをベノバイザーに装填した。

『ADVENT』

音声とともに、変身する際に用いた鏡の破片——立ち上がった杏子の足元にまで届いていた小さな破片から出てきたその影が杏子を襲う。

前触れも、殺気もなしの突然の襲来。「ミラーワールド」という概念を知り得ないので仕方ない事なのだが、対応する事が出来ず、身体に巻き付いた何かに拘束されてしまう。

「そこで見てな、後で相手してやる」

「杏子！」

「クソ、離しやがれ！——待て、何だコイツは」

悔しがりながらも、自身に巻き付いている存在を見上げ——絶句した。

杏子が知っている限り、その存在は蛇に分類されるのだろう。しかし、確実に地球上に生息している普通の蛇ではないという事だけは分かる。

天井とまでは言わないものの、蛇であるのに巨体とも呼べるその大きさは、まるまる人間を飲み込めてしまいそうな程。

口から垂れている毒々しい液体は、喰らったら魔法少女であっても確実にただでは済まないであろうと想像させる。

王蛇に呼び出された蛇——否、コブラ型の契約モンスター「ベノスノーカー」は、主人である王蛇に世界を超えて呼び出され、その命に従い杏子を拘束した。

力任せに振りほどこうとするも、抵抗すればする程その身体に巻き付いた拘束がより一層強固なものになり、下手をすれば骨すら折られかねない。

「さて、これで邪魔は入らねえなあ！」

「く……い！」

「馬鹿、逃げろほむら……い！」

落としたベノサーベルを再び拾い上げると、王蛇はほむらの方に向き直る。

正直言えば、ほむらはこの場から逃げ出すことは不可能ではないと思うし、実際その通りだ。やろうと思えば幾らかチャンスはあったし、教会を飛び出してマミや輝夜達を連れてくれば勝てない相手ではないと確信している。

しかし、それをさせないのが拘束された杏子の存在。この場を離れれば彼女に何をされるか分からないし、それどころか「前」の様に道連れで男ごと死にかねない。

それだけは嫌だった。見捨てて逃げる事だけは、この「やり直せない」時間を生きているほむらにとつての愚策。「彼女」の事を覚えていないとはいえ、彼女は仲間なのだ。

正義の味方を気取るわけじゃない。安っぽい同情に流されたわけでもない。

ここは彼女——まどかの犠牲の上で成り立った世界なのだ。であれば、これ以上自分を助ける為に目の前で犠牲になる仲間を見捨てたくない。それだけの話だ。

だからこそ。ベノサーベルを担いで迫ってくる王蛇に対し、無謀な

がらも弓を射る手を休めないのだ。

「ハッ、無駄だよー」

桃色の奇跡を描きながら、次々と放たれる矢。その数は一、二、三、四、五、六と次々射られていくが、それら全てが振るわれたベノサーベルに阻まれる。

どんな軌道で飛び回ろうとも王蛇がそれを叩き落とす。その状況に、ほむらは焦りを覚え。

次の瞬間、突然王蛇の姿が眼前から掻き消えた。

「消えた……!?!」

突然相手が消えた事に動揺するほむらだが、それも一瞬後に落ち着き。

自身の周辺にある、飛び散った鏡の破片に意識を集中させた。

先程ベノスネーカーが鏡の破片から出てきたのをほむらは目撃している。その上である仮説を立てていた。

仮に、仮にだが——鏡の世界。或いは、それに類する何かがあるのだとすれば。そこを出入りする機能があの蛇の様な生き物に備わっているのだと、或いは元々鏡の世界に住んでいたのだとすれば。

その主人たるあの戦士も、鏡を通して別の世界に出入りする事が出来るのではないかと。

ほむらの説は概ね正しかった。

王蛇、そしてそれに類する——言うなれば「龍騎の世界」のライダー、そしてミラーモンスターと呼ばれる存在はミラーワールドと呼ばれる鏡の 世界に自由に出入りする事ができる。

しかしただ一点だけその仮説は間違っていた。それは、その鏡の世界への入り口を「鏡」と限定してしまった事。

ミラーワールドに入れる入り口は鏡ではない。光を反射する性質がある物であれば、何処からでも出入りできるのだ。

そう、例えば。

「つまらん——さつさと死ね」

「な、あ……!?!」

「ほむらっ!!」

先程王蛇によって弾かれ、今は教会の出口付近に突き刺さっている槍の穂先からですらも。

完全なる情報不足からの不意打ちに、ほむらは対応することが出来ずに。

ベノサーベルで正確にその心臓を貫かれた。

浅倉威がこの場に居たのは、少なくとも彼からしたら偶然の出来事だった。

凶悪な犯罪者であり脱獄者でもある彼は、宿敵である男との決着がもう永遠につかないことに苛立っていた時、自身を追って現れた警官隊に生身で立ち向かい——四方から一斉に放たれた凶弾に、倒れた筈だった。

しかし気がつけばこの教会に居て、しかも身体に傷一つついていなかった。

自身が何故蘇ったかも分からないまま、とりあえずここを根城にする事を決め、一度休息をとっていたその時にはむら達がやってきたという訳であった。

よって、ほむら達が「龍騎の世界」のライダーを知らないように、浅

倉も魔法少女という存在においての最大の秘密について知らないわけ。

「ほむら……!?!」

「——ああ?」

心臓を破壊され、傷口からも大量の出血をしてその服を血に染めているほむらが。

ベノサーベルを持っている右腕を、その細身からは想像も出来ない程の握力で掴まれれば、その奇怪さに思わず声が出てしまうのも無理はなかった。

未だ尚ほむらの身体を貫いているベノサーベルを引き抜こうにも、握力が強すぎて引き抜くことが出来ない。

「——そうか、ソウルジエム!」

同じ魔法少女である杏子には、死んでいる筈のほむらの身体が活動できる理由にすぐ思い当たった。

魔法少女の魔力の源とも言えるソウルジエムには——世界が改変された事により、最大の秘密は無かった事にされたが——秘密が隠されていた。

それは、ソウルジエムには魔法少女自身の「魂」が宿っているという事。

たとえば肉体がボロボロに——或いは、消滅までさせられたとしても。ソウルジエムを破壊されなければ、肉体がミンチにでもならない限り魔法少女として活動できる。魔法少女にとって肉体とは、外付けのハードウェアでしかないのだ。

奥でベノスネーカーに拘束されている杏子の場所からでも確認できる——否、恐らくほむらが見せつけているのだろうと判断した。

顔は王蛇が邪魔で確認できなくとも、その左手の甲。ほむらのソウルジエムがある場所ををわざと杏子に見せつけるかの様に、不自然に

左腕を横に突き出していたのだから。

左手の甲のソウルジェムは、確かにいつもと何ら変わりなく紫の妖しい光を放っていた。

魔法少女とは条理を覆す存在。たかが心臓を破壊された程度で、活動停止するほど甘くない。

それに、ほむらにはまだ胸に秘めた願いが残っている。

誰にも分かってももらえないであろうその願いを叶えるまで、自分は倒れる訳には行かないと。

その強い意志が、心臓を破壊された痛みにも耐え。こうして、王蛇の腕を掴んでいた。

「チツ、ゾンビみてーな体しやがっ——あん？」

心臓を破壊されても尚立ち上がる。原理が分からず、さらに苛立ちを募らせる王蛇は——そこで初めて、今のほむらの表情を見た。否、見てしまった。

才色兼備と言われる面影は何処にもなく。鬼面の如き表情と殺気立った視線が、仮面で見えない筈の王蛇の眼を貫くように睨んでいた。

門矢遊星にも、そしてゴ・ガドル・バにも敗北したほむらの心は、他の誰よりも壊れかけていた。

それは、ある意味での脅迫。己から己に対して課せられた呪いのようなもの。

史上最悪の魔女——ワルプルギスの夜に繰り返す時間の中で何度も負け続け、その結果「最高の友達」を失ってしまった彼女。

自分が負けては誰かが消える。だから負ける訳には行かない。

——負けるもんか——

強迫観念にも近いその想いは、彼女の心を縛るように今もなお渦巻

いて。それは、ほむらに眠るある感情を呼び起こした。

——負けるもんか——

世界が「彼女」の事を記憶しなくなった時からずっと、暁美ほむらはこの感情を忘れていた。

——負けるもんか——

「彼女」を助けるために、何度も時を繰り返したあの時の感情。

「負ける、もんかああああああ！」

自身を突き動かしていた、感情の力を。

ほむら自身にもこれが何なのか分かってない。ただ一つ。確かに言えるのは。

まどかを思うほむらの感情が、彼女に世界の条理を覆しうる新たな力を与えたという事だけだ。

「ガ、アアアアアア!!」

王蛇には、何が起きているのかが理解出来なかった。

突如ほむらが叫んだかと思えば。彼女の背中から灰色の翼が出現。

羽がある空間に対して侵食している様にもみえるそれは、一瞬で王蛇の体全体を飲み込む。

飲み込まれた王蛇は、突如身体に流れ出す痛み[!]に叫び出した。

全身を襲う激痛に身を置きながらも、自身の視界を取り巻くように現れた闇をベノスネーカーで振り払う。

しかし、王蛇がいくら剣を振るったところでその闇は消える事がなく。

逆に浅倉自身の意識に入り込んでくるかの様に、一層闇に取り込ま

れる感覚までしてきて。

「ガ、ガ、ガ……！」

意識が堕ちていく。どこまでも、どこまでも。

視界は既に完全なる黒に染まっている。腕を掴んでいた筈のほむらでさえも消え、その闇にはいつの間にか変身が解けた浅倉しかいなかった。

それでも必死に足掻く浅倉だが、最早自分が何を喋っているのかも理解できていない程に意識がはつきりしていない彼に、抵抗の余地はない。

脳が、筋肉が、眼球が。浅倉の体全てが、闇の中で眠る事を受け入れられる。

残ったのは、彼の「記憶」だけ。しかし記憶だけの存在である彼に存在する意義はない。

無念。苛立ち。怒り。浅倉威という男が抱いていた感情が、徐々に消え去っていった。

——んな所で祭りは終わりかよ。クソ、が……——

消えていく意識の中で。

自分を「引き戻そうと」していた何者かに対して、呪いにも近いそれを心で呟きながら。

この世界に本来存在する筈のなかった浅倉威という男の記憶は「再び」闇の中で眠るのであった。

佐倉杏子には、今現在何が起きたのか理解が出来なかった。

自分達の目の前で見せた事の無い魔法でほむらが生み出したと思われる灰色の翼が、突如王蛇を包み込み、同時に自身を拘束していたベノスネーカーが苦しみながら消滅。

翼が収まったかと思えば、変身が解け——先程まで自分達が戦っていた男とは、別の人物。

「く、そ——ようやく収まったか……?」

「アンタ、なんで……!?!」

顔を苦痛に歪めた門矢遊星が立ち尽くしているほむらの前で、肩を震わせながら膝をついていた。

まるで何かに少し怯えている様子の彼は、ほむらと杏子が居ることには気付いているものとても話せるような状態ではなく、ただただ息を整える事だけに意識を向けている。

そして、ほむらはいええ。

「まど、かあ……!」

泣いて、いたのだ。

普段のクールな一面からは想像も出来ない程顔をクシヤクシヤにし、大粒の涙をポロポロと零しながら。聞き慣れない名前を口にしながらも涙を零すほむらの様子は、まるで抑えていた欲望が溢れてきている様で。

誰かの助けを求める様に、杏子に向けて震える右手を伸ばした。

「っ、ほむら——!」

あまりにも悲痛な光景に、思わず一瞬息を飲み。刹那、迷った心を振り切ってほむらに駆け寄った。

身体には先程まで締め付けられていた事による多大な疲労は残っている。しかしそれでも、その手を掴みたいと。

過去の、手を伸ばせなかった家族の二の舞にはしたくないと。杏子はそう願ったのだ。

ほむらの伸ばした手に応える様に、杏子も手を伸ばし返し。

『……ソノヨクボウ、カイホウシロ……』

希望は、容易く打ち砕かれる事となる。

教会中に響き渡った言葉と共に、何処からか赤色のメダルがほむらの背中目掛けて飛び込んできた。

すると、ほむらの中の何かと惹かれるようにそのメダルは体内に吸い込まれ。

ほむらの内に秘められ、そしてつい先程まで歪んだ形で暴走していた「欲望」を、また歪んだ形で解放させていた。

「あ、ああああああ!!」

叫び声と共に、突然ほむらが頭を抱えその表情を悲痛な物に歪ませ。

同調する様に、その身体からは先程ほむらの体内に入れられたそれ、とはまた違う銀色のメダルが排出。チャリン、チャリンと音を立って床に散らばった。

「ほむら!?!」

「グリードか? しかし、一体どこに——」

次の瞬間。叫びに同調するかの様に、ほむらの真上に黒い穴が出現した。

人一人が余裕で入れそうな程の大きさその穴は、そこにある物を全て吸い取らんとばかりにどんどんと辺りの物を吸い込み始める。

「何だ、あれ……!?!」

「……ワームホール」

遊星はそれがどういった物なのか知り、しかし驚いた声色で呟く。それに気付かなかった杏子ではないが、問い詰める事はしないのは理由があり。

それを生み出したと思われるほむらは、抵抗する事なく——或い

は、抵抗する気力もなく——徐々に彼女の身体を浮かび上がらせていく吸引力に身を委ねている。

その様子に、杏子はますます焦燥するも足を止める事無くほむらに近付き——

——掴んだのは、大切な仲間の柔らかな手ではなく。ほむらの身体から大量に溢れ始めた銀色のメダルの一握りで。

杏子の手が届くことなく、ほむらはその中に吸い込まれてしまう。

「ほむらああああっ!!」

悲鳴にも近い、杏子の叫びがほむらに届いたかは分からない。

既にほむらは吸い込まれ、深い闇に沈んでいきその姿は徐々に見えなくなっていく。

「——クソっ！」

手が届く相手なのに助けられなかった。

自分へのやるせなさから悪態をつく杏子。しかしそんな彼女もまた、例外なく穴に吸引される立場にある。

近くの物にしがみ付いて抵抗しようと身体を動かすも、荒れ果てた教会の中をまるで掃除しているかの様に、周りの物を巻き込んで凄まじい勢いで吸い上げるそれに耐えられる筈もなく。

「クソおとおおっ！」

「飲み込まれるか——！」

なすすべも無く、疲労していながらも杏子と同じく抵抗しようとしていた遊星と共にその穴に吸い込まれていった。

「まだだめよ」

一面に白い花が咲き誇っている丘の上で、蠱惑な衣装に身を包んだ少女はワルツを踊る。

月明かりの下、まるで愛しい人と踊っているかのように。

「まだだめよ」

可憐で激しい動きでも、片手に持ったグラスの中の赤黒いワインを零す事はない。

それどころか、水面に波紋一つ起こる気配さえない。まるで時が止まっているかのように。

——丘の上だというのに少しの風も吹く気配すらない辺り、もしかしたら本当に止められているのかもしれないが。

「まだだめよ」

色気のある妖艶な笑みを、月明かりが照らす。

純真な少女の様に鼻歌を口ずさみながらも、成熟した女性の様に踊るその様は見る者全てを魅力してしまいそうな程。

「まだだめよ」

そうして夢中で踊っている内に彼女は丘の先端、崖になっている場所に辿り着く。

気付いていない、或いは気付いていながらも踊る事を止めず、そして——

ワームホールに吸い込まれた杏子と遊星。

どこまでも暗闇が続き、光が存在することが許されていない世界。

穴の向こうに繋がったその世界は、そう。例えるなら神秘さを欠いた宇宙。

飛ばされた二人は互いの姿を視認する事は出来るものの、今の彼らの関係性ではそんな事は無意味に等しかった。

「クソ、こいつは何処に繋がってやがるんだ!」

「多分どこかには繋がっている筈だ、俺から離れるなよ」

「は? アタシ達をまた襲つといて信用出来るかっての!」

「……ま、それだけ余裕があれば平気か」

未だ尚続く謎の吸引力によつて何処かに移動させられ、決して安心出来る状況ではないものの、そんな状況に怯える様な二人ではない。ないのだが。

杏子はますます信用出来なくなった遊星の事を拒絶し、遊星はそんな杏子の様子に「まあいいか」と思考を放棄した様子で。

前触れもなく、二人はその空間から放り出された。

「——うわあああああっ!?!」

「流星に空は少し予想外だったぞ……!」

視界が一転。完全なる黒から色を取り戻すが——同時に、彼らの身に強大な風圧が襲い掛かった。

恐らく、地上から数千メートルはあるであろう空中。それが二人の放り込まれた環境だった。

いくら魔法少女に変身出来ようが、英雄の力を使えようが「一応」ただの人間である今の二人に空を飛ぶ術はない。重力に従って風を切り裂き、真つ逆さまに下に落ちていく。

「これだったら——スカイ、変身!」

しかしその状況も直ぐに解決する。遊星が腰にまた見慣れぬベルトを出現させ、いつもの掛け声を叫ぶとその姿が一変。

緑とやや赤みがかつた赤色という不釣り合いのボディ、そして赤い複眼。

栄光の十人ライダーが一人、スカイライダー。それが、彼の変身した姿の名称だった。

変身の際のポーズも取らずにいきなり変身したスカイライダーは、

一息つく暇もなくベルトの横にある機能を起動。すると杏子にかかっていた風圧が多少とはいえ和らぎ、徐々に落下していく速度も緩やかになって行った。

「!? ちよ、これって……?」

「セイリングジャンプ——これで何とかなつたか」

これこそがスカイライダーが「空」の名を持つ理由。

セイリングジャンプと呼ばれるその機能は、自身とその周りにいる人物にかかる重力を極限まで軽減させる事ができるのだ。

これにより、地球上とは言え二人を擬似的に空を飛ばせる様にすることが出来るのだが——一息ついたスカイライダーが、理由もなくふと杏子の表情を覗くと、それに気付いた杏子是不機嫌に顔を逸らした。

「礼は言わねーからな」

「……ああ、勝手に助けたんだからそんなのいらないさ。さて、ここが何処だか調べて……——」

「あん? どうし……オイコラ、何だあれ」

今現在の険悪な状況に気不味くなつたか。さつさと自分達が辿り着いた場所が何処なのか調べようと視線を地上に向けた遊星は、唐突に言葉を失い。

遊星の様子を怪訝に思つた杏子が、遊星と同じ方向に向け——思わず、そんな言葉が出てしまうほどに。

その視線の先に広がるのは、地獄のような光景だつた。栄えていたであろうその都市の建物は、既にその九割が廃墟となつており。

家も、ビルも、木々も。全てが荒れ狂う暴風によつて無残にも薙ぎ倒された様な状態になっていた。

それだけならいい。問題は、その街が「何という名前であるか」を彼らは知っている事だ。

何故知っているか? 「自分達が住んでいる街」なのだから当然だろう。

いくら朽ち果てようと、余りにも特徴的なデザインの建物が多いの街を間違える筈はない。

「何で……、何で見滝原がこんなになってんだよ！」

感情を隠せなくなった杏子が、感情的に叫ぶ。しかしそれも無理はない。

「ママが、ほむらが、さやかが、そして自分が。」

魔法少女が守ってきたその街が、少し離れている間に何者かによって人気もなくなり、天災に襲われた様な状態になっていた。

「ついさつき「手が届かなかった」杏子にとっては、更に精神的に重く押し掛かる事。打ち付けられていた杭を、更に深く打ち付けられた様な。」

「落ち着け！ここはお前や俺の知ってる見滝原じゃない、恐らくまた別の……！」

「うるせえ！ テメエの言葉は信用しない、さつきそう言つたらろ！」

激しく動揺した杏子に語りかけるが、今は状況が悪かった。

杏子からしたら、今の遊星は二度も自分達に襲い掛かってきた怪しげな男。

その彼の言葉が、少なくとも今の精神状態では信用できる筈もなく。肩を掴もうとした遊星の手を、力任せに払いのける。

魔法少女の全力の力で行われたそれは、危害を加える気も無かった為に力を込めてなかったスカイライダーの手を難なく払い除け、それどころかその体勢を一瞬だけ崩し、仰け反る形にさせ。

次の瞬間、どこからともなく飛んできた銃弾の嵐が、隙だらけのスカイライダーの身体を襲った。

「ガ、ハッ……！」

「な?！」

スカイライダーの変身が解除され、現れた遊星は口やジャケットから覗かせる身体の傷から赤い液体を垂れ流しており。

そのまま力なく、再び彼の身体にかかった重力により地上に落ちていった。

何が何だか状況が掴めない杏子だが、スカイライダーの変身が解けた事により、そんな彼女もセイリングジャンプの恩恵が切れ、再び落

ちていく。

「くそ、またこのパターンかよー！」

悪態を付く杏子だが、先程と違い地上が見えているならば幾らでも方法は思いつく為対処は可能だ。

その手に槍を召喚、それを逆手で掴むと思い切り彼女の真下にある手頃なビルに向かって思い切り投げ、それを何回か繰り返し返す。

行動は同じのまま、しかしその照準だけは微妙に違わせたまま放たれた槍は、狙い通りそれぞれが別々、しかし近くのビルの壁に突き刺さり。

杏子が魔力をそれらに流し込むと、槍の持ち手だけが赤い糸に変化。

何百、何千という数になったそれらは、四角形を象るように展開。

ハンモックの様になったそれが、落ちてきた杏子の身体の衝撃を吸収した。

「……つと」

そこまで来れば後は問題ない。

地面から十数メートル程の高さなら、魔法少女であれば怪我せず落ちるのは容易いこと。

まるでちよつとした段差を降りる様に、軽々と杏子はその高さから降りた。

残ったハンモックは、まだその上にて気絶している遊星を縛り、地面に落ちてきた。

「つたく、何でこんな奴を助けたんだか……」

気絶している遊星の顔を見ながら、大きく溜息を付く杏子。

実際の所、彼女にも何故助けたのか彼女自身理解が出来ていなかった。

気絶した直後、彼女は遊星を助ける気は全く無かったのだ。当然だ、仲間でも何でも無いこの男を助ける理由は杏子には無いのだから。

——それでも。目の前で助けられる命なら、諦めちゃいけないと。そう、誰かに言われた気がしたから。

「……ま、輝夜さんが泣く所が見たくないから、って事にしておくかね」

そんな不明瞭な理由で自分が誰かを助ける筈がない。あくまで仲間と認めた輝夜のためだ、と。

自分を無理やり納得させた彼女は、再び槍を召喚し。

遊星に背を向け、何処からか自分達に近付いてきたその存在らに構えた槍を向けた。

「それ以上近づくんじゃねーよ。殺すぞ」

『ハハハ。コノギエンサマヲコロスダトハ、タヤスクイツテクレル』

ダンスの様なステップを取りながら移動する、武器を持った何体も
の戦闘員「ゼニット」。

それを引き連れている金色の「ギエン」と名乗る存在も含めて、杏子はこれらが機械の生命体だと判断する材料にあまりにも事足りていた。

しかし、それが些細な事と言える程の衝撃が杏子を襲っていた。

似ていたのだ。ギエンと、教会にてほむらにメダルを飛ばした存在の声だ。

「その声……ほむらに変なモンを入れやがった奴か！」

『ヘンナモノ？ アア、コアメダルノコトカ。「イマジン」ノコアメダルトオンナノヨクボウトヲアワセ、コノセカイニトバサセタダケダ。オンナニガイハナイ』

イマジンやらコアメダルやら、杏子にとってよく分からない単語が出てきたが、要はほむらをこの世界に飛ばすのが目的だったらしい、と納得。

同時にこの見滝原が自分達の居た見滝原ではないらしい、という事が確認できて少し彼女の中の心の余裕が生まれた。未だ傷を負っている、という事には変わりはないが。

『マア、キサママチマデツレテキタノハヨソウガイダツタガ、ドウデモイイコトダ』

「……完全なとばっちりかよ。まあいいけど」

『キサマニヨウハナイ、ソノオトコハキケンダ。ソコヲドイテ、トドメヲササセロ』

「やだね。この男は気に入らないし嫌いだけど、今はテメエの方が気に入らねえ」

『ホウ、コレデモカ?』

ギエンの言葉に、後ろに居たゼニツト達が一齐に銃を杏子とその後ろの遊星に対して向けた。

その光景に、苦虫を噛み潰した様な表情を見せる杏子。

状況は不利。自分一人なら離脱も可能だが、その場合遊星が殺される。

戦うにしても、足手まといを庇い、更に先程の浅倉との戦いで消耗した今の自分で勝てる見込みは無い。

万事休すか、と杏子が思ったその時――

『ン? キサマ! アノオトコヲドコニカクシタ!』

「はあ? 今の状況でそんな……いねえ!」

「こつちだ! ハアアツ!」

――救世主は、唐突に現れた。

聞き慣れない声がしたのはギエンの後ろ。それはつまり、ゼニツト達の方。

気がつけば、懐に飛び込んだ「赤い戦士」の流れるような剣さばきで、ゼニツト達は一人残らず瞬殺。

残ったギエンに、彼は両手に持つ刃をそれぞれ向けた。

『バカナ、キサマハモウイナイハズ……クソ、オボエテイロ!』

悔しがりながらも、ありえない物を見たかのような口振りのギエンは、懐から取り出したスイッチを押すと何処かに消えてなくなり。

ギエンと何らかの因縁があると思わしき「彼」は、宿敵が消えたのを確認すると一息ついて、その変身を解除した。

爽やかなショートヘアと、チエック柄のシャツ。

遊星が変身していたものだと思っていた杏子は、仮面の下にあった、笑顔が似合いそうな爽やかな好青年の顔に一瞬動揺し。

そんな彼女の内面を知らず、脳天気な口調で彼は話し始めた。

「なんでギエンが復活してるかとか、なんで君みたいな女の子があいつと戦おうとしてたかとか、なんで目が覚めたら縛られてたかとか……色々聞きたい事はあるけど、とりあえず自己紹介からだな。俺は竜也、浅見竜也！よろしく！」

同刻。

晴天を覆う暗雲の下、今にも木々をもなぎ倒しそうな吹きすさぶ風にも負けず、瓦礫だらけとなった街を駆け抜ける少女が居た。

体を吹き飛ばされそうにながらも、それに耐えて少女は確実に一歩一歩我が道を歩む。

「はあ……はあ……！——！」

決意を持って突き進む彼女を止める事は、何者にも出来ることじゃない。

希望と対価に絶望と戦う道を選んだ4人の少女たちを見続け、迷った末に彼女は選んだのだ。

希望を願った少女たちの祈りを無駄にしない為にも、過去に希望を願った少女たちが、絶望の末に流した涙を希望という宝石に変える為にも。

自分が、彼女らの最後の希望になると。

「もう、少し……！——！」

運動に特別秀でてるわけでもない彼女は息を荒げながらも、前を向いて懸命に走り続ける。

彼女の視線の先。物理法則を無視し、空中に浮遊している超弩級の存在こそが街の惨状を引き起こしている張本人である「ワルプルギスの夜」

彼女——「鹿目まどか」の目的は、今そのワルプルギスの夜と戦っている少女を助けることだった。

自分の知らない「自分」の死を、絶望を、数えきれない程に見てきたのにそれでも挫けなかった彼女を助けたい。果てしなく歩んだ道が無駄じゃなかったと伝えてあげたい。

ただそれだけの一心で、彼女は動いていた。その純粋な心自体は高潔な物。一度決めたらそれに突き進む頑固な所は、彼女の短所であり長所である。

ただ一つだけ。彼女が気付けなかった大事な事があるとすれば、それは。

まどかが助けようとした、少女自身の心だった。

「——そこで止まりなさい」
「えっ？」

唐突に、後ろから声がかげられ。

この場所が人気のない街中だったこと。そして、今この場には居ないはずの「彼女」の声だったこと。

それら二つの要因が重なり、まどかは振り向き、そして見てしまった。

「——お願い、まどか。それ以上進まないで」

——見覚えのない弓を構え。震える手で、それをこちらに構える「彼女」——曉美ほむらを。

第七話 疑念と信頼とほむらの欲望

「ふーん。タイムレンジャー、ねえ」

「なんだよその顔、信じてないのか？」

「まさか、信じてるよ」

与太話を聞いた様な態度を取る杏子に、竜也は不服と言わんばかりに口を尖らせ抗議する。

竜也から聞かされた話。それは「未来の刑務所から脱獄し、二十世紀にやってきた囚人達との戦いの日々」だった。

偶然からタイムレンジャーの一員に選ばれた彼は人々を守る為に戦い、一年にも及ぶ戦いの末勝利。先ほど襲ってきたギエンという名前の機械生命体も彼が戦ってきた敵の一人で、既に倒した存在の筈だという。

あまりにぶっ飛びすぎているそれは、杏子にとって色々な意味で頭の痛くなりそうな話だった。

「まあ任せてくれよ。ギエンがなんで蘇ってるのかはともかく、あいつが何か企んでる様なら俺がそれを阻止するからさー！」

「そーかい、んじゃあ任せたよ」

「あー！ その反応、やっぱ信じてないだろー！」

頭を押さえながら杏子が短く返して竜也の前をスタスタと歩き出す。ブーブーと不平を鳴らしながらも竜也はそれについて行った。

後ろから聞こえるそれを無視しつつ、杏子は歩きながら荒れ果てた見滝原の有様を改めて目にする。

いつも自分達が暮らす街の酷い現状。それは先ほどまでとは行かずとも、杏子の心に何か残るものを感じさせる。

それほどまでにこの街を、そしてこの街にいる仲間達の事も気に入っていたのだろう。

恐らく見滝原に来るまでは感じもしなかった事。そこまで牙を抜かれていたのかと自分を嘲笑いたくなるが、しかしそれ以上にそう感じる事に誇りを持つ自分もいる。

——そう感じる切欠となった記憶すら嘘だったのかもしれない。

「……クソっ」

そう思わせられる事に、杏子はどうしようもない憤りを覚えていた。

見滝原に来てから一番遅く分かり合い、しかし一番分かり合える仲間だと思っていた美樹さやか。彼女との交流の過程を、自分は知らず知らずのうちになくしてしまっていた。

違和感なく「さやかとの交流の記憶が消されていた」もしくは「元々そんな物が存在せず、違和感を抱かない様に書き換えられていた」という事は、それは他の仲間に対しても言えるだろう。

もし、後者だったとすれば——巴マミは、暁美ほむらは、蓬来山輝夜は、本当に信じられる仲間なのだろうか。

「どうした、大丈夫かい？」

「……なんでもねーよ」

様子を見かねて竜也が声をかけるが、杏子はぶっきらぼうな態度を崩さない。

聞かれたくない事なのだろう、と納得して竜也は「そっか」とだけ返事をし、それ以上詮索することはなかった。

別に竜也の事が気に入らないわけではない。

先程からこんな態度を貫いている自分にも、竜也は気を悪くする事なく話しかけてくれ、むしろこちらが少し負い目を感じている。

それでもそれを止める事がない理由はただ一つ。門矢遊星という存在だ。

「なああんた、門矢遊星って男は知らないんだよな」

「さつきも言ったろ。そんな奴、本当に知らないんだよ」

嘘を付いている態度ではないが、それがまた杏子の頭を悩ませる。

この男が先程まで「門矢遊星だった」事は状況から見ても間違いないのだが、どうやら竜也にはその記憶がないらしい。しかしその事から杏子はある仮説に至った。

自覚のない多重人格者。それが門矢遊星という男の抱える秘密の一つなのだろう、と半ば確信に近いものを得ている。そうするといくつかの疑問にも納得が行く答えを出せる。

初めて会った時、そして先程の教会で遭遇した時に襲いかかってきたのそういう「人格」が表面に出ていたから。幾つもの戦士の力を使うのは、自分が抱えている人格の力を行使しているから。

「——しっかしなあ」

ため息をつき、自分の後ろをトボトボと歩く竜也の方を振り向く。

門矢遊星の正体は未だに不明。

それに「紅音也」なる男——門矢遊星の中の人格の一つに過ぎないそれがなぜさやかに語りかけられたのかも分からないし、遊星の中にある人格の数なんて想像もつかない。

なぜ他の人格の力を使えるのかも疑問だが、この仮説が正しいとすれば答えも絞られる。教会で襲ってきた男に多重人格の自覚はなさそうだったが、人格が切り替わった後の遊星の言動は明らかに自覚のあるそれだった。

ならば、門矢遊星は他の人格よりも上位の存在なのだろう。何を以って上位とするかは不明だが、他の人格より上位にいるなら「同じ自分」なのだから、その力を自分のものとして発揮できる——という事なのかもしれない。

「んー……」

どうにも纏まらない結論が出たが、元々自分はほむらやマミとは違つて頭を回す役でもない。

出ている情報からすればこの辺りがいいところだろう。そう結論を出し、門矢遊星や浅見竜也についての考察はそこで打ち止めにした。

今やるべき事はほむらの探索とギエンの撃破。関係ない遊星に關してを考えている場合でもないし、浅見竜也は——

「なあ、ギエンが出てきたら君は下がっててくれよ。女の子に戦わせるわけにはいかないからさ！」

これである。楽観的で正義感の熱いバカ。

浅見竜也を一言で表すとしたら、正にこの言葉しかないだろう。

「……ハハッ」

その言葉に、杏子は思わず失笑した。

「あ、笑ったな！」

「悪い悪い、別にバカにしたわけじゃないんだ。ただちよつと、ね」
浅見竜也を信じるべきか否かで杏子は迷っていた。自分を騙している可能性もあるし、何か隠している事があるかもしれない。記憶の脆弱性が疑われる今では、尚更信じるべきか慎重に考えるべきだろう。

——しかし、そんな彼を「信じてみたい」と考える自分がいる事に気づき、思わず笑いがこぼれてしまった。

「……ま、とりあえずアタシから離れるなよ。迷子はゴメンだからね」
「ちゆ、中学生に迷子の心配って……あ、ちよつと待てよ！」

「——動かないで」

「な」

「え」

それが起こったのは、本当に唐突だった。

竜也と杏子の前に音もなく現れた「彼女」は、ありえないものを見るような目で杏子を見つつも右手に構えた拳銃を二人に向けている。竜也は突然の出来事に狼狽るだけだが、杏子もまた混乱をしている。

何故なら、目の前の「彼女」こそが。

「——佐倉杏子、何故ここに……！」

「——ほむらっ？」

探し求めていた暁美ほむらその人なのだから。

「ほむら、ちゃん……!?!」

鹿目まどかは驚いていた。

今はワルプルギスの夜と戦っているであろう暁美ほむらがこの場に姿を現し、どういう訳か自分に見慣れぬ弓を向けているからだ。

動揺するまどかを見据え、表情一つ変えずにほむらは口を開く。

「覚えているかしら。この前、私があなたに伝えたことを」

その言葉からまどかが思い起こさせられたのは、先日ほむらの家に行った時のこと。それまで彼女に抱いていた冷酷な印象とは真逆の、隠された一面をむき出しにしながら伝えられたその言葉を忘れる筈

もない。

おそらくその事だろうと見当がついたまどかは弱々しくコクリと頷いて答え、ほむらは「そう」とだけ返事をして直ぐさま言葉を続けた。

「その言葉を覚えていてくれているなら、お願い。今すぐ避難所に戻って」

「……ごめん、ほむらちゃん。それは出来ない。ママさんやさやかちゃん、杏子ちゃん。皆が死んじゃう所を見ることしか出来なかった私が、ようやく見つけられた願いだから」

まどかが今胸に抱く希望は、彼女にとって諦められるものではない。自身を救おうとするほむらを解放する事にもなり、過去に絶望を抱いて行った全ての魔法少女達を救う事にもなるのだから。

たとえほむら自身に否定されたとしても、それで諦められる理由にはならない。

仮に、これが彼女の知る暁美ほむらであったとするなら。その言葉を聞いてしまったならば、まどかの決意を揺るがせる事はなかっただろう。

しかし、ここにいるほむらはまどかの知る彼女とは違う。

「——全ての魔女を、生まれる前に消し去りたい」

「……え？」

故に。ほむらが言い放った予想外の一言が、まどかを揺るがせた。

それはまどかがキュウベえに願おうとした願いそのもの。胸に秘めたそれは、家族は勿論ほむら自身にも、誰にも話した覚えはない。

なのに、何故彼女は知っているのか。

「なんでそれを……」

「答えは簡単よ。ここにいる私は、あなたを助ける為に繰り返される時間に身を投じている最中の暁美ほむらじゃない——私は、あなたがその願いを叶えた後の時間から来た暁美ほむらよ」

ほむらが告げた衝撃的な告白。

そこでまどかの中に、一つの疑問が生まれる。だとしたら彼女がここにいるという事は、また時間を戻してしまったのだろうか。

その思考を読み取ったのか、ほむらは「とはいっても」と言葉を続ける。

「ここに来たのはただの事故みたいなもの。恐らくこの時間の私は、今もワルプルギスの夜を倒そうと躍起になってる途中よ——そんな事はどうでもいい。もう一度言うわ、引き返して。あなたの祈りは尊いもの。けれど、その選択は多くの人を、そして貴方自身も悲しませる事になる」

そう。この先の未来、鹿目まどかは終わりのない救済に身を投じ、この世界から存在ごと姿を消す事となる。魔法少女を救済する概念となった彼女を認識できるのは、絶望の淵に沈んだ魔法少女のみ。

しかしそれ以外の者には認識されず、こちらから語りかけることも出来ない。

鹿目まどかという存在の消失。まどか自身にとっても、そしてまどかを忘れる家族や友人にとっても、それは残酷な結末。

「……そっか。やっぱり、未来では私は消えちゃってるんだね」

しかし。まどかは自身の祈りから生じるその結末に薄々気付いていた。

最初からか、或いはほむらの態度を見てか。どちらにせよそれを悟っていたまどかに、驚きで目を見開かせたほむらは堪らず叫ぶ。

「それが分かっているなら尚更！」

「ごめん……私の事を想って言ってくれてるのは分かるよ。それでも、私はこの祈りを捨てたくない」

何かを考える様にして目を閉じてそう答えたまどかは、少ししてその目を再び開く。

決意に満ちたその眼差しは、ほむらにとつてとても見覚えのあるそれ。

「私ね、ここに来る前にママに止められたんだ。でも、ママは私を送り出してくれた。何をどうするかなんて分からない筈なのに、それでもこの道を選んだ私をママは正しいと信じてくれた。だから——」

「——どうして分かってくれないの!?!」

まどかの言葉を遮ったほむらの叫びが、虚しく木霊する。

「まどかが消えてしまった世界で、それでもあなたと再び出会う事を願って私は戦ってきた！ その道を地獄とは思わない。けど、一人であなたの記憶を抱え込んだ私の気持ち分かる!? 私の、この気持ち……！」

反射的に叫んでしまった口を抑え、途端に自己嫌悪に陥る。

言った。言ってしまった。自分がまどかと別れてからの全てを。

——ああ、ばれてしまった。

多くの人を傷つけるなんて只の建前。ただ単に、自分が孤独に耐えかねて我が儘を言ってしまったっている事が。

でも、だって。心中で渦巻く言い訳の嵐を無理やり押し殺し、無意識に下げている弓を再びまどかに向けた。

「……私の忠告が聞けないなら、あなたを傷付けてでも止めてみせる」と、そこで。魔力で創り出した矢を引き絞り、いつでも放てる状況でほむらは気付いた。

この状況でまどかが笑っているのだ。あの「目」と共に。

身近な人に向けられるあの微笑みと共に、一步一步。まどかはほむらに近付いて行く。

「っ、止まりなさいー！」

放たれた一射目。叫びとともに放たれたほむらの矢は、無防備なまどかの体を貫くことなく彼女のすぐ横を通り抜けていく。

それでもまどかは変わらず歩み寄る。震える手で、悲痛な表情で。ほむらは再び矢をまどかに向ける。

「今のは脅し、次は当てるわー！」

「ううん、あなたが私の知ってるほむらちゃんならそんな事しない、絶対に」

二射目。常人目には紫色の光線とも錯覚するそれは、まどかの頬を掠める。

それでもまどかは退かない。頬から流れる血を気にもとめず、傷付けた張本人であるほむらから目を逸らす事なく、変わらず笑みを浮かべたままだ。

一步一步、確実にその距離を詰めてくる眼の前の少女に、ほむらは

より一層手の震えが増す様な感覚に襲われ。

おぼつかない手付きで三射目が準備出来た所で、まどかはとうとうほむらの目の前に立つ。

この距離では外そうと思っても外せない。故にその指を離せば、ほむらの望みは完遂される。

殺す訳ではない。あの場所に、自分自身がいる場所に辿り着けない状態にするだけ。それがまどかの為になるのならば、嫌われても構わない。

そう思っていた、筈なのに。

まどかの目を見るだけで、どうしてもほむらのその決意は鈍る。

それは、暁美ほむらにとつて鹿目まどかが「まどか」ではなく「鹿目さん」であった始まりの時。

『ほむらちゃん。私ね、あなたと友達になれて嬉しかった』

『あなたが魔女に襲われた時、間に合って。今でもそれが自慢なの』

『だから、魔法少女になって本当に良かったって。そう思うんだ』

まだ「彼女を守る私」ではなく「彼女に守られる私」であったあの時。

自分に別れを告げた「鹿目さん」と同じで。穏やかな性格である彼女からは想像も出来ない覚悟を決めた目を、今のまどかはしていて。

それがどうしても心に引っかけかかって。ゆっくりと、ほむらはまどかに向けていた弓を地面に下げた。

「ほら、やっぱり。ほむらちゃんは優しい子だもん」

自身の知っている「暁美ほむら」なら絶対にそんな事はしない。少なくとも、自分の目の前にいる彼女は絶対に「暁美ほむら」である、とまどかは確信していた。

「キュウベえに騙された馬鹿な私を何回も見て、ほむらちゃんは諦めずに私を助けようとしてくれた。そんなほむらちゃんが私を——うん、私だけじゃない。誰かを本気で傷つけようなんて出来るわけない。そう信じてる」

「まどか——！」

「本当にごめん。ほむらちゃんの頑張りを無駄にしないつもりだった

「ただけど……また辛い思いをさせちゃって。やっぱり駄目だね、私は」

自身の無力さを力なく笑うまどかに、今にも泣き出しそうな表情でほむらは反論する。

「っ、そんな事ない！ あなたの祈りは間違いでも、誰かを傷付けるものでもない。あなたは全ての魔法少女の希望になろうとした。誰にも見えず、ひとりぼっちになると分かっているても尚あなたは皆を救おうとした！」

暁美ほむらは分かっていた。自分が抱くこの感情がどうしようもない我が儘で、本当はまどかの方が正しくて。

世界で唯一人、まどかを覚えていた孤独は確かにあった。でも、彼女が納得しているならそれでいい。

「そんな祈りが間違いだって言う私の方が間違っているなんて分かってる！ 分かっているけど……」

それが分かっていた筈なのに、だからこそ再び彼女と巡り合う為にあの世界で戦い続けていたのに。

「……全ての魔法少女を裏切る事になっても、あなたを助けたかった。そんな辛い宿命を背負わせたくなかった。わたしのエゴでも、なんでもいい。たとえ世界が壊れても、あなただけ生き残ってくれれば、私は……！」

心の中にあつた鹿目まどかに対する「愛」とも言えるそれを、嗚咽を交えながらもほむらは語る。

慈愛。友情。そんな綺麗な言葉で表せるものではない、ただの自己満足。自覚しながらも、それでも彼女がこの行動をとった理由は最初から一つ。

鹿目まどかを助けたい。その一心であった。

それを見て何を感じとったか。再び覚悟を決めた様な顔で、まどかはほむらに話しかけようとする。

「……ほむらちゃん」

『ジヨウガジヤマラスルカ。マツタク、コレダカラニンゲンハ……』

しかし次の瞬間。その二人の邂逅を邪魔する者、ギエンが再び多数

のゼニツトを引き連れてまどか達の前に立ち塞がる様にして現れた。
「魔女……それに喋った!？」

人型の言語を喋る魔女、そしてそれが引き連れる
見慣れないそれにまどかは戸惑い、その危険さを知るほむらはまど
かを庇うようにして一歩踏み出す。

ここに彼らがいる意味。自分がこの地点の時間軸に飛ばされた理
由。それらを全て、ほむらは理解してしまったから。

「まどか、逃げて! こいつらはあなたが狙いよ!」

「え、私!? そんな、なんで……!?!」

「ハハハ、イマサラキヅイタカ」

「黙りなさい。ええ、最初から気付くべきだったわ。私をここに飛ば
したあなた達の目的——それは多分鹿目まどかの契約の阻止。違
うかしら」

『——ヒヤハハハハハ!』

ほむらが導き出した結論に、ギエンはゲラゲラと笑い出す。その反
応は、まさしく患者を笑い飛ばすそれ。

異質な光景にまどかはほむらの背中に隠れてより一層怯えるが、当
人であるほむらは顔を伏せたまま黙り込んでいる。

その様子を不審に思いつつも、一通り笑い終わったギエンが再び話
し出した。

『ジブングアヤツリニンギョウダツタトイウコトニ、ヨウヤクキヅイ
タカ! オロカナニンゲン!』

「……考えてみればおかしいことだらけだった。この時間に飛ばされ
た後、あなたは私に何かをさせようとしていた。今思えば、私を利用
するしかなかったって所かしら」

『ソノトオリダ。カナメマドカヲキサマガトメル。ジカンヲケツテイ
ツケルニハ、ソウデナクテハナラナカッタ』

『イマカラデモオソクハナイ。ソレガキサマノ、ノゾミダロウ?』

ギエンの言葉に、ほむらは何も答えない。

ああ、そうだ。自分の望みは確かにそれである。ここで彼女を止め

られたのなら、それはなんて素晴らしい事なのだろうか。

「――ふざけないで」

しかしほむらは、それを否定する。

「ええ、あなたの言う通り。本当に愚かだったわ……いけ好かない奴に騙された事を思い出すくらい」

自嘲を交えた呟きの後、ギエンらに対して自身の得物を向けた。

その顔は先程までとは違う。悲痛に満ちていた顔は、憑き物が晴れた様な清々しい表情に変わっていた。

そう、まるで。

『キサマ、ナニヲ!』

「私は私の心に従う、それだけよ」

何かと訣別した様な、そんな決意に満ちた表情で。ほむらが上空に向けて矢を放つと、それが無数の矢に分裂。雨の様に降りかかったそれらがギエン達を襲った。

「まどか、今の内に!」

「……うん!」

待ち望んでいたほむらとの再会。

それは穏やかな形で行われてはおらず、むしろほむらは杏子に対して敵意を向けている程だ。

「ちよつとちよつと、一体どうしたっていうのさ」

「……あなた、本当に佐倉杏子なの?」

「本当も何も、見たまんまあたしだろうが。何のつもりだよ?」

警戒を強めた杏子の問いに答えず、無言を貫くほむらの様子もまた何処かおかしい。

まるで、そう。彼女もまた何かに困惑している様な。こちらを見る目が、ありえないモノを見ている様にも杏子には感じられた。

「でもあなたは……まさか、まどかが契約を!」

「……? そのまどか、つてのは誰だよ」

「――え」

「この」ほむらにとってその差異は、この短時間のやりとりの中でも聞き返してしまう程には相当なものだった。

「誰って……鹿目まどかよ。魔女となった美樹さやかを助けようとした時、あなたが一緒に連れて行ったでしょ」

「魔女？」

聞き慣れない単語に、ますます顔を顰める杏子。

魔女になったさやか、とはどういう意味だろうか。それに、鹿目まどかなんて人物は知らないし、そんな名前はほむらから聞いた事もない。

しかし、ほむらはいつものぶつきらぼうな表情を崩し、杏子に銃を突きつける事も忘れて彼女の肩をすがる様に掴んだ。まるで、その言葉を嘘とでも言っただけに欲しい様に。

そしてその直後だった。独特な音をたてながら、その場にいた三人を取り囲む様にして何者かが現れたのは。

『ミツケタゾ』

「!?」

「ギエン！」

「……人型の、魔女？」

杏子達をこの世界に送った存在、ギエン。ゼニットを引き連れて再び現れた彼は、しかし身構えた杏子や竜也を見ることなく、ほむらを一点に見つめている。

人とはかけ離れた姿に最初は魔女であると誤認したが、人語を喋った事でそれは違うのだろう、とほむらは判断する。

『オマエタチニヨウハナイ。アルノハオマエダ、アケミホムラ』

「私の事を知っている……あなた、何者？」

『ソナナコトハドウデモイイ。ワタシトキテモラウゾ』

「……誰だか知らないけど、今取り込み中なの。だから——」

有無を言わず、ただ要求だけを告げるギエンを敵と判断したほむらは、左腕に取り付けられた盾を起動する。

その瞬間、ほむら以外の世界全てが静止した。

音も、人も、物も、全てが静止し静寂に包まれている中、ほむらだ

けがその世界を認識し、動く事を許されている。

「——消えてもらおうわ」

これが曉美ほむらの持つ能力——時間停止。初見にてこの能力を破れる者は皆無と言ってもいい。

コツ、コツと足音を立て、ギエンの目の前まできたほむらは、躊躇する事なく拳銃をギエンの頭部に向ける。

自分に害を与える存在に、慈悲をかける意味もない。慎重に照準を合わせ、躊躇いもなく引き金を引こうとした次の瞬間だった。

『ジカンテイシ。ナルホド、オモシロイチカラダ』

「な——」

ギロリ、と。ギエンの目が赤く光ったかと思えば、次の瞬間なんて事ない様にこの世界で動けるようになっていた。

ほむらは動揺するまま、ギエンによって間髪入れずに振るわれた腕の一撃を受けて後方に吹き飛ばされる。

「ほむら!?!」

「大丈夫よ。でも……!」

地面を転がるものの、受け身を取って立ち上がり、多少冷静になった頭を働かせる。見れば、ギエンの手下と思われる存在や、何が起こったのか理解できない杏子や竜也も通常通りに動いていた。

つまり、ギエンが時の止まった世界で動いたわけではなく、自分の魔法が無力化された、という事実にはほむらは気付いた。

「私の魔法を無力化したというの……!?!」

『ザンネンダツタナ。オマエノマホウハ、ステニタイサクシテアル。コノ、ミライノコアメダルニヨツテナ』

驚愕に顔を歪ませるほむらにギエンが見せたのは三枚のメダル。しかしこの場にいる誰もがその存在を知らない。

当然だ。遠い未来、ある企業によつてそれら——サメ、クジラ、オオカミウオのメダルは開発されたのだから。

しかし、そんな事を知る由もない。ほむらにとって今重要なのは、その三枚のメダルが自身の魔法を無力化出来るという事実だ。

ほむらにも明かしていない自身の情報が知られ、対策されている。

その事実ほむらの心をまた焦らせた。

「……ああ、なるほどな」

「佐倉杏子……？」

そして、ほむらとギエンのやり取りを見た杏子はようやく気付いた。目の前にいる彼女は、自分の知っている暁美ほむらではない。

この世界に生まれた暁美ほむら——ややこしいので、以下暁美ホムラと記載する——であるという事に。

その証拠に、杏子の知る限りほむらは時間停止の魔法なんでものを所持していない。伏せていた可能性もあるが、有用な力とはいえわざわざそんな事をする意味もない。

ここが別の世界の見滝原であると聞かされていたのだからもっと早く気付くべきだったと反省し、魔法少女としての姿に変身した杏子は槍を構え、ホムラを庇う様にして一步前に出た。

「理由は知らねーけど、どうやらあいつはアンタを狙ってるらしい。今は下がってな、あたしがやる」

「っ、待ちなさい！ 何故あなたがここにいるかをまだ聞いてないわ。あの時、あなたは私にまどかを任せて、美樹さやかだった魔女と……」

「……」

その先を聞かずとも、杏子は察してしまっていた。この世界の佐倉杏子は既に死んでしまったのだと。

別世界とはいえ、自分が死んだという事実を知り、しかし杏子は冷静を保っていられている。何故なのかは杏子自身にも分からなかったが、今はそんな事を考えている場合ではない。

『フン、アクマデジヤマヲスルカ』

「仲間のピンチらしいんでね。悪いけど、アンタには痛い目にあってもらうよ」

「その通りだ、ギエン。お前の好きにさせてたまるかよー！」

言いながら竜也もまたホムラの前に出て、杏子と並び立った。しかしその服は先ほどまでのものとは違う、赤いラインが入ったグレーのインナースーツとなっている。

「うげ……なんだよその服」

「ん？ 変身する時に必要らしいんだよ、これ。理由は説明されてもよく分からなかったんだけど……俺の趣味じゃないからな?！」

「いや、そうだったら引くわ」

軽く白い目で見てくる杏子に慌てて弁解する竜也。気を取り直し、竜也はいつもの叫びと共に左腕に取り付けられたブレスを起動させた。

「クロノチェンジャー!！」

叫ばれた起動コードとボタンにより、彼を一時的に「ストレージ・フィールド」と呼ばれる亜空間に転送。収納されていたクロノ粒子が彼の体を包み込み、彼を戦士としての姿に変化させていく。

そうして現れた赤き勇者、タイムレットは同じく亜空間に収納されていた二振りの剣——ダブルベクターを構えた。

その光景にホムラはただ驚くのみ。当然だ、彼女にとってはこんな特撮ヒーローの様な戦士と出会うのは初めてなのだから。

「変身した……!?!」

「雑魚は任せた。アタシは隙を見てあの金色を叩く!」

「……ああもう! 無茶はしないでくれよ!」

「待って、私も一緒に戦う」

「ホムラ? でも、アンタの魔法は……」

「心配は不要よ。私にはこっちがあるもの」

言いながら、ホムラが盾の内部から取り出したのは軽機関銃。ギエンが封じたのはあくまで時間停止の魔法。盾の内部にまで干渉しているわけではなかった。

しかし、夢と希望を届ける筈の魔法少女が使うにはいささか現代的すぎる兵器だが、そこには突っ込むことのない二人だった。

「分かった、いくぞ!」

ひとまずの共闘に、それまで互いに持っていたしがらみを捨てて三人は臨む。

襲い掛かってくる無数のゼニットを、タイムレットの流れる様な剣捌きが襲い、杏子の洗練された技能によって操られる多節棍が薙ぎ

払った。

先程まで見せていたお気楽な一面からは想像できない程に鍛え上げられたタイムレッドの動きに感心し「へえ」と声が漏れる。

「はあっ！」

「やるねアンタ、これなら任せられそうだ！」

「こつちも必死に鍛えたんだ！ 今更ゼニツト相手に遅れをとってたまるか！」

答えながら、不用意に近づいてきたゼニツトを一閃。機械で出来ていた身体のパーツが飛び散る。

この場において、一番戦闘経験が少ないのはタイムレッドだ。それでも彼は一年近くを戦い抜いてきた歴戦の勇士そのものであり、日々訓練を積み上げた実力は魔法少女達と並び立てる程にまで昇華された。

ホムラだって負けていない。常人ならば一発撃つだけでも反動に苦勞するそれを魔力で強化した筋力で軽々と使いこなし、二人が倒し漏らしたゼニツトにトドメをさしている。

と、そこで突然盾から何かを取り出したほむらが、前線で戦う二人に向かって大声を出した。

「二人とも、下がって！」

叫びに気付いた二人はすぐさま下がり、それを確認したホムラが包囲しているゼニツトの一角に向かって何かを投げた。

鉄製で円状であるそれは、ころころと転がってゼニツトの足元にコツンとぶつかる。

なんだこれは、と群体の中の一体がそれを拾った時にそれ——手榴弾と呼ばれる現代兵器は、轟音と共に周囲のゼニツトを巻き込む爆発を起こした。

『ナンダ!?!』

少し離れた場所でそれを見ていたギエンだが、黒煙に包まれたその場所で何が起こったか理解できずに困惑。しかし次の瞬間、煙の中から飛び出してきたそれに反応する事は出来なかった。

「はああああ!!」

勇猛果敢に叫びを上げながら、展開した多節棍を槍に戻した杏子が急接近してきたのだ。

俊敏をウリにした渾身の一撃。それを防いだのは、割り込んできた存在達によるものだった。

「何!？」

『ヤレヤレ、アブナイトコロダッタ。マア、ワタシガフセイデモ、モンダイナカッタガナ』

全力で振るった一撃を防がれた杏子は距離を取り、ギエンを守った存在達を視認する。

一方は、クワガタを模した頭部に、カマキリの様な鎌が生えた腕部。全身を覆う緑色の皮膚と、それと同じ色をした複眼。

もう一方は、ライオンのたてがみの様な頭部。獲物を狩るのに適した鋭い牙や爪。それらを黒く硬質な皮膚が包み込んでいた。

「新しい怪人か……!」

『ワタシガシハイシテイル、グリードタチダ。ヨウイシテオイテセイカイダツタナ』

グリード。どうやらそれが彼らの種族名らしい。

ギエンの語った通り彼らに意思は存在しないらしく、忠実な僕として杏子の前に立ち塞がっている。

『フム、ココハヒカセテモラオウカ』

「わざわざ目の前で逃すとも思う?」

『タタカイタイナラ、コイツラガアイテニナル。ワタシハカマワズニゲルガナ』

「……ちっ」

目の前に立ち塞がるグリード達。先程のやり取りだけではそれらの実力は判断しきれない。

それに、ギエンが逃げられてしまう事はどうあがいても不可避だろう。ホムラ達がいればともかく、二人は杏子にギエンを任せ、背後の敵の相手をしている。

『イライラセストモ、マタスグニデアウダロウ。ソノトキコソ、キサマ

ラヲチマツリニアゲルトキダ。ヒヤハハ!』

狂った様に高笑いをした後、再びギエンはグリード達と共に姿を消した。その一瞬後にゼニットを片付けたホムラとタイムレットが駆けつけたが、既にギエン達は去った後。

悔しがりながらも、それぞれが戦闘態勢を解除する。

「クソ、逃げられた!」

「……悪い、あたしが決めきれなかったのが原因だ」

「いいえ、新手が来たのは仕方ない事よ。下手に追い詰めたタイミングで出されるより、ここで相手の手札を切らせたのは大きいんじゃないかしら」

だから気にする必要のない、とても言いたげに、責任を感じている杏子をフォローするホムラ。その表情は、いつもと変わらず冷静そのものだ。

世界が変わっても彼女は間違いなく「暁美ほむら」である。改めてその認識が間違っていないと感じた杏子であった。

「……そっか、ありがとな」

「気にする必要はないわ。余計な事を気にして戦闘に集中出来ない方が困るもの」

自然な仕草で髪をかき上げ、あくまで効率を考えた上であるとホムラは告げた。合理的な面でも確かに彼女は暁美ほむらである。

苦笑いを隠せない二人であった。

「それより答えて。何故あなたがここに?」

「あー、その話なんだけどさ。ややこしい上に長くなりそうだから、歩きながらでいいか?」

「それは構わないけど……それなら、私の家が近いわ。そこで落ち着いて話をしましょう」

「ん、ありがと。でもとりあえず——」

突然杏子は懐を探りはじめ、まだ開封されていない菓子が入った包装紙を取り出すとホムラ達に差し出して一言。

「——食うかい?」

「別の世界……」

「信じられねー話だって言いたいの分かるよ」

「いいえ、信じる」

「はあ？」

ひとまず、一番最初に話すべき事——自分たちが別の世界の住人という事を説明した杏子。

突拍子もない話をしたにも関わらず、あっさりとしたホムラに対し思わず素っ頓狂な声を上げた。

「単純な話、それ以外にあなたがここにいる理由が思い浮かばないからよ。まどかが契約したのでないなら、あなたがここに存在する事はあり得ない」

「ちよつとちよつと、そんな簡単に信じていいのかよ？ あたしが偽物って可能性だってあるだろ」

「それはない」

キツパリと断言するホムラ。

そこまでこの世界の自分と交流があつたのだろうか、と疑問に思う杏子。その疑問に答える様に、ホムラは言葉を続けた。

「魔力の波動とか色々理由はあるけど、何よりその癖のある性格。間違いないあなたよ」

「……喜ばばいいのか分かんねーけどさ。そのトゲのある言い方、あなたも間違いないく「曉美ほむら」だよ」

「あら、よく知ってもらえてる様で何よりだわ」

一通り皮肉を言い合った後、二人は情報交換を始める。

一方、魔法少女でもなく完全なる部外者の立場である竜也に二人の会話の意味が通じる筈もないので、諦めて外で見張りをしていた。

そもそも、彼にも考えたい事がある。この状況についてだ。

「歴史が変わって、あいつらが未来に帰って。気がついたらこんな場所だもんなあ……」

この場所に飛ばされる直前、彼は共に戦った仲間たちとの別れを済ませていた。竜也の時代から千年先——三二世紀の未来から来た仲間と共に、彼は本来の歴史で起こる筈だった「大消滅」という出来事を食い止め、そして仲間たちは新たな未来に帰って行った。

それを見送り、気がつけば見知らぬこの場所に飛ばされていた。

「……でも、ギエンを放っておけないよな」

理由は不明だが、悪さを企んでいるのなら放っておくわけにはいかない。自分たちと同じく平和のために戦う少女達だけに任せ、自分が戦わないという選択肢は彼にはない。

「……ユウリ」

少女たちが戦うという状況から、竜也は一人の仲間を思い出した。未来に帰った四人の仲間の内、ただ一人の女性。

彼女の名前を愛おしげに呟き、溢れ出そうになる感情からか未だ暗雲が立ち込める空を見上げた。

「……人の感情を吸い上げる魔獣に、魔法少女の終わりを看取る円環の理。そっちの世界はどうなっているの？」

「こつちからしたら、この世界の方が驚きだよ。魔女——魔法少女の成れの果て」

あまりの情報に頭を押さえながら、ホムラが尋ねる。が、それは杏子だって同じ事。

魔女。魔法少女とは対極の存在で、この世に絶望を振りまく存在。それだけならば魔獣とはそこまで大差ないが、その正体が問題で。

希望を失い、ソウルジェムが濁りきった魔法少女の行き着く先——それが魔女。

「あたしたちの行き着く先がそんな存在だったのか……？」

「美樹さやかは魔女となり、退治されたわ。他でもないあなたにね」

「……クソ、マジなのかよ」

希望を振りまく存在の魔法少女が、最終的には絶望を振りまく存在

に変わり果てる。

そんな皮肉があつてたまるかと思ふ所だったが、ホムラの顔は至って真剣。そもそもこんな冗談を言うような性格でもないことが、情報が真実である事を物語っていた。

「でも、そちらの世界では魔法少女は魔女にはならない」

「……ああ。そもそも魔女なんて見たこともねーよ」

「なら、魔女ではなく魔獣になる可能性は？」

「無いとは言い切れないけどさ。ただ、あいつらはあんたの言う魔女とは特徴が違いすぎるんだよ。いくら世界が違うからって、そこまで変わるものなのか？」

「……そうね。仮に魔女化しない理由があるとすれば——」

「円環の理、か」

円環の理。

ホムラの世界には存在しないそれは、魔法少女が消える際に現れ、幸せの国に誘う女神様——と、杏子たちの間では伝えられている。こちらの世界との差異の根幹の部分に位置する存在であるのは間違いないのだろうが、杏子も実際に見たことはないらしい。

魔女化を止められる存在がいるとすれば、それは途方もない力を持っているに違いない。

「……まさかね」

こちらの世界では存在しないが、あちらの世界には存在する。逆にこちらの世界では存在するが、あちらの世界では存在しない。尚且つ、強大な力を兼ね備えた存在。

そんな都合の良い存在がいるとすれば——否、いる。ホムラの知る限りどうやら確かに一人いる様なのだが、彼女だとすれば何がどうしてそうなったのか理由が想像もつかない。

「どうした？」

「いえ、なんでもない。擦り合わせはこの辺りまで、本題に入りましょう。とりあえず、優先して話すべき事は二つある。一つは、ワルプルギスの夜について」

「さつき話してた奴か。超大型の魔女だっけ？」

「ええ。私と戦ってたそいつが突然消えた」

暁美ホムラからして、それは突然の出来事だった。

「いつも通り」ワルプルギスと戦っていたホムラ。必死に対策し、策や武器を用意し、しかしそれらが通用せず。

諦めかけていた所で、突如ワルプルギスの夜が目の前から消失したのだ。

「何故かは分からない。原因を探す為にも街を散策していたら、ソウルジエムがあなたの魔力を感知して……その後は分かるでしょ？」

「……なるほどな」

「理由は不明だけど、タイミングも考えればおそらく……あのギエンという機械が関わっているとみて、間違いなさそうね」

そこには杏子も同意した。

偶然にしてはタイミングが出来すぎている。ギエンが何かしたとというのは間違いなさそうだが、目的はよく分からない。

「そもそもあいつをどうにか出来る技術を持ち合わせている……ってというのが驚きなのだけけれど」

「あー……多分なんだけど、未来の技術って奴のせいかも。多分三十三世紀辺りの」

「はっ」

予想通りの反応。しかし、その話には人伝とはいえ根拠もある。

竜也が語っていた話の中に出てきた犯罪組織——ロンダーズファミリーについて、大まかに話す杏子。

全てを話し終わった後、ホムラは頭を押さえていた。

「……まあ、いいわ。二つ目の主題も出てきたし——浅見竜也について。彼は何者？」

「どう話したもんかなあ……なあ、こっちの世界に門矢遊星って奴はいるか？」

「心当たりもないわね」

やはりか、と杏子は肩を落とす。

こちらの世界に彼がいるなら話は早かったが、どうやらそう都合よくもないらしい。元々ホムラが竜也の変身を物珍しい様に反応

していた事から期待もしていなかったのだが。

「その人が関係あるという事？」

「そうなんだけど……まあ、あいつは味方だと思ってくれていいよ。あの金ピカとも戦った事あるらしいし」

「……そう。あなたがそういうなら、ひとまずはそれでいいわ」

ひとまずという前置きがあつたとはいえ、ホムラがすんなりと受け入れたのは意外だった。

あちらからすれば浅見竜也は正体不明の存在で、二つ返事で信じるとは思っていなかったから。

「一応言っておくと警戒はするわよ。あなたも彼のことがわからないなら、とりあえず戦力としてはみなすって話」

思考を読んだかのような発言に合点がいく。

竜也の戦闘能力は、一般的な魔法少女と比べても引けを取らない。戦力としてなら間違いなく信用できる相手だ。

「……ま、そういう見方でもいいとは思うけどさ。なんならあいつと話してきてみたらどう？」

「えっ？」

「アンタの目で判断してみるのも悪くないんじゃない？」

杏子が竜也を判断しようとするので、どうしても遊星のことも判断材料に含めてしまう。間違いではないのかもしれないが、杏子としては複雑な一面もある。

だからこそ、杏子はホムラには自分の目で判断するべきだと考える。他人を信じる事の難しさを実感している現在の自分が言えた事ではないと思いつつも。

「——信頼なんてくだらないわ」

しかし、その提案にホムラは首を横に振った。何か地雷を踏んでしまったのか、ただでさえ鋭い目つきが一層鋭くなった様にも思える。

それも突然だ。ホムラにとって信じて頼るという行為はとうに諦めたものなのだから。

「話したところで何が変わるとは思えない」

いつか、どこかの時間にて。誰も魔女化の真実を受け止めきれな

かった事から、彼女は仲間を信頼することをやめた。

誰も頼りにならない。自分しかあの絶望的な未来を変える事は出来ないのだと。

「……そっか」

「ええ。今の私が誰かを信じるだなんて、そんなのありえない」

言い切ると、ホムラは突然立ち上がり、部屋の外にへと足を向け、タスタと歩いていく。

「どこ行くんだ？」

「……少し外の空気を吸ってくるだけ」

それだけ言い残し、ホムラは家の外に出て行った。

一人取り残された杏子が、苦笑しながら一言。

「素直じゃねー奴」

「……」

「……」

浅見竜也は困惑していた。

家の外で見張りをしていたら突然ホムラが出てきて「失礼するわ」とだけ言う。と竜也の隣に同じように塀に寄りかかり、そのまま喋る事もなく数分が経過。

コミュニケーションが苦手な方ではないと思っっているが、相手が無言な上に年下の中学生と何を喋ればいいのかも分からず、竜也からも話しかけづらい状況だった。

「……ねえ」

無言に耐えかねたか、それとも腹を据えたのか。ホムラの方から竜也に対して話しかけてきた。

「あなたは何の為に戦ったの？」

「……え？」

「佐倉杏子から軽く聞いたわ。別の世界で、あなたはあの金色の奴と戦っていたのでしょうか？ それは何故？」

「何故って言われても……うーん、明日を変える為、かな」

「明日を？」

おもわず聞き返してしまう。明日を変える。それはまるで、今現在の自らの状況ではないか。

驚愕するホムラの様子に気付かず、竜也は話を続ける。

「俺、いいところのお坊ちゃんって奴だったんだどさ、レールの敷かれた人生つてのに嫌気がさして家を飛び出したんだよ。そんな時、あいつらに会った」

「あいつら……仲間かなにか？」

「ああ、未来から来た仲間たち。そこにロンダーズって悪い奴らも現れて、そいつらから今を守って自分の未来を切り開きたい。そう思ったから俺は戦えたんだ」

「……その道すらも運命に決められてるとは思わなかったの？」

何度も同じ時間を繰り返したからこそ、自分に運命という大きな敵がいる事は容易に想像がついていた。

ホムラにとつての運命の刺客——ワルプルギスの夜。宿敵ともいえるその魔女に、時間を繰り返すたびに敗れてきた。

「ああ、俺が戦う事は運命で決められてた」

とある男の陰謀により、竜也がタイムレンジャーとして戦う事は歴史の重要なポイントとして決められていた。

「それでも足掻きたい。歴史なんて大きい流れは無理でも、せめて自分の明日くらいは変えたい——変えられなかった奴の為にも」

声を少し震わせながら、強くポケットの膨らみを握りしめる。ホムラには不思議と最後の言葉が頭に引つかかっていた。

すると突然竜也が足元に落ちていた小石を拾い、突然何も無い道路の向こう側に向かって思い切り投げる。まるで今の自分の迷いを晴らすかの様に。特段何事もなく、勢いを失った小石は地面に軽快な音と共に転がる。

「あの石がどう転がるかだつて石が決める事だから、決められた未来じゃない……つて感じてね」

爽やかな笑みを浮かべる竜也とは対照的に、ホムラの表情は一切変わる事もない。それは話の中身に興味が無いというわけではなく、た

だ真剣に竜也の話聞いていたから。

「……明日を変える、か」

「ん？」

「いえ、何でもなし。少しは信じてもいいかもね、あなたの事」

そんなことを言いながらも、やはり表情が変わる事もない。それが彼女なのだろうと竜也は納得した。

「——ん？ 俺、さっきまで信じられてなかったのか!？」

「反応が遅いわよ」

「いや、サラツと言われる事でもないから!」

文句を言う竜也を無視し、家に入ろうとしたホムラ。ドアノブに手をかけたその時、突然表情を歪ませ竜也の方を振り向いた。

「これは……?」

「ん？ どうしたんだ？」

「何か来る」

「え？」

次の瞬間、上空から降り注ぐ様にしてその二人は降下してきた。一人は息を切らし、もう一人は彼女にお姫様抱っこの要領で抱き抱えられている。

竜也にとっては片方に、そしてホムラにとってはどちらとも見覚えがある。片方は見覚えがある、という表現を使うのもおかしい程。

「ほむらちゃん!」

「まどか! それと……」

「——はじめましてね、私」

その二人とは、ギエン率いるゼニツトから逃げてきたまどかとほむらその人だったのだから。

「どうした! って、ほむら!? それと……?」

「杏子ちゃん!」

落ちてきた音を聞いて慌てて飛び出した杏子。自身の知っている方であろうほむらに驚き、彼女が抱き抱えているまどかには眉を顰めるが、まどかは信じられないものを見たかのように杏子の名前を呼ぶ。

『ホウ、ココニキテセイゾロイカ』

混沌とした状況を打ち砕いたのは、新たに現れた彼——ギエン。再び転送してきた彼は、背後にカザリとウヴァ——それに加え、新たな二体のグリードを控えさせている

「ギエンー！」

「まどか！ 家の中に！」

「え、あ、うん！」

ほむらとホムラの咄嗟の言葉に混乱しながらも、いう通りに逃げるまどか。すれ違った際に杏子の事を気にしていたが、別の時間の彼女であると悟ったのかどこか残念そうにして家の中に入っていく。

それを確認した後、二人はふたたびギエンの方へ向き直った。

「ここで決着と行きましょう。あなたもいい加減、目的を果たしたいんじゃないかしら？」

『ソノツモリダ。サイダイセンリヨクデ、キサマラヲハカイスル！』

「……ねえ、 暁美ほむら」

「何かしら、 暁美ホムラ」

ギエンを目の前にして、ホムラは気になっていたことを尋ねるべくほむらに話しかけた。

「あなたは私なの？」

「……ええ、おそらくね」

「そう」

同じ自分だからだろう。ホムラの一言に込められた意味をほむらは見抜き、その上でそう当然のように答えた。

ホムラはそれだけ聞ければ充分だ、と言わんばかりに魔法少女に変身し、無言で銃を構え、同様にほむらも弓を構えた。

「……同じ顔が並んでるのもなんか不気味だな」

二人の暁美ほむらに抱いた印象を何気なく杏子が呟くと、シンクロしているかの様な動きで同時に睨みつけてくる。

「悪かったからその動きやめろって！ ……さて、やってやろうじゃねえか！」

無言の圧に慌てて謝罪を述べると、気を取り直して変身。自身を鼓舞するかの様な声を上げ、快活な笑みと共に槍を構えた。

「俺もお前も、なんでここにいるのかなんて分からない。けど、あいつらの居る未来に向かって生きていくつて誓ったんだ」

この戦いはイレギュラー。本来彼が巻き込まれる筈もなかったが、運命の悪戯により彼はここに立つ。

——それでも。それが運命だというなら。浅見竜也は運命と戦う。この一年間、自分や仲間達がそうした様に。

「クロノチェンジャー！」

上げられた声と共に、竜也の姿は戦士としてのそれに変わり。二振りの剣をギエンに向かって構えた。

『コツケイナヤツダ。ジブンガ、ドンナタチバ カモシラズニ』

「……え？」

『ヤレ！ グリードドモ！』

ギエンの指示に従い、グリード達がそれぞれ構えを取る。口振りからして竜也がここにいる何かしらの事情を知っている様だったが、その暇も与えてくれそうにない。

「ほむ……あー、あたしの世界のほむら。えーつと……」

「……なるほどね、了解よ」

ほむらと何かを耳打ちしあうと、杏子は勢いよく地面を蹴りギエンに向かって飛び込んだ。当然、グリード達が静止する為にその間にへと割り込んでくる。

「ほらよー」

それが杏子の狙いだった。

地面から出てきた赤い糸の様な結果がグリードたちの内三体を分断。

残ったギエン、カザリと竜也、ホムラ。グリードたち三体と杏子、ほむら——といった具合で、その戦場は二つに分けられた。

ただでさえ人数は不利。ならばグリードを操る存在と思わしきギエンを先に叩けば、何かしらは変わるかもしれないというのが杏子の考え。そうじゃなくても、自分たちが彼らを倒して数で優位に立つてもいい。

——問題があるとすれば、杏子達の負担が大きい事だが。

「ごっちはアタシらに任せな。竜也、ホムラ。あの金ピカはアンタらが仕留めろ」

「佐倉杏子……無理はしないで」

「へっ、任せなつて。行くよ、ほむら！」

「ややこしいわね……ホムラ、話したい事はあるでしょうけどまた後で」

そうして杏子達はグリード達と戦闘を始める。

どうなるのか不明だが、手が足りない今は杏子達を信じて任せるしかない状況。

二人の無事を祈りつつ、竜也とホムラも自身たちの敵に相対する。

「浅見竜也。私たちも行きましょう」

「……ああ！」

こうして、時間を超えて集った戦士達の決戦の火蓋が切つて落とされた。

第八話 燃える焰と未来と決意のコンボ

「はあああっ！」

ギエンを倒そうにも、まずは目の前の怪人——カザリから攻略しなくてはならない。勇猛果敢に飛び込んだタイムレッド。しかしその一振りがカザリにダメージを与える事はない。剣が捉える前に、視界からカザリの姿が消えたからだ。

「な!？」

一瞬後、引っ掻かれた様な衝撃が背中に走る。

カザリが展開した腕の鉤爪による切りつけ。タイムレッドの剣をひらりと避けると、その勢いを使つて後ろに回り込み一撃を入れた。

「このっ！」

悔しさを露わに何度も剣を振るうが、タイムレッドの剣がカザリに届く事はない。猫のように優美な仕草で攻撃を避けながら、素早く一撃を叩き込まれる。

「いくらなんでも考えなさすぎよー！」

呆れた言葉と共にホムラの援護射撃がカザリの頭部目掛けて放たれるが、銃弾は腕で防がれ貫くには至らない。グリードである彼を仕留めるにはあまりに弱すぎる一撃だが、それでも顔を狙えば動きを止めるには充分だ。

「今のうちに！」

「ああー！」

防がれた隙をついて、再びタイムレッドの剣が振るわれた。今度の一撃には対応しきれず、カザリはその一撃を食らう。

「当たった！ サンキュー、ホムラ！」

「いいから戦闘に集中！」

おもわず呼び捨てにしてしまうが、そんなことも気にせずホムラは怒鳴り返す。やはり何処となくユウリを思い起こさせるホムラに軽く懐かしさを感じつつ、タイムレッドはカザリとの戦闘に専念する。

「はあっ！ てやっ！」

やる事は先程と変わらない。ホムラの援護にタイミングを合わせてタイムレッドが追撃する。

位置を変えながらのホムラの卓越した射撃に、素早く繰り出されるタイムレッドの洗練された剣戟。

波状攻撃として襲いかかるそれに、カザリはなす術もなくやられるだけだ。

「……！」

ホムラが面倒だと判断したカザリはたてがみを触手の様に操り、ホムラを襲わせる。鞭の様にしなるそれらに対して、時間を止める事で回避をしようとしたホムラ。しかし、彼女の望み通りに時間が止まる事はない。

「しまった……！」

ギエンの存在が魔法を無力化している。それを忘れて悪癖で魔法に頼ろうとしたホムラは、一瞬回避行動が遅れ。

「DVデیفエンダー！」

しかしダブルベクターの短剣側を投げ捨て、咄嗟にタイムレッドの腰のホルスターから引き抜いたその銃——DVデیفエンダーから放たれる幾つもの光線が、ホムラに迫るたてがみを難なく撃ち落とす。た。

「っ……ごめんなさい、助かったわ」

「いいって！ ただ、結果としてこれを借りる事になっちゃったけどな」

「その銃のこと？」

「……ああ、仲間の形見さ」

どこか寂しげに呟くタイムレッド。彼が今使ったそれ——DVデیفエンダーとは、本来タイムレッドの武装ではなく、彼の仲間が持っていた装備。

とある経緯からそれを譲り受け、彼に返す間も無く——尤も、返す相手はいないと分かっているが——そのままタイムレッドの武装としてこの世界に持ち込んでいた。

「直人、借りるぞ——DVチェンジ、デیفエンダーソード！」

使うことに躊躇したが、決意と共にそれを断ち切るとDVデیفエンダーから刃を展開。デیفエンダーソードと呼ばれる形態になると、長剣状のスパークベクターとともに構える。

カザリもまた身を屈め、低い姿勢から駆け出す。そうはさせるかとホームラが銃を撃とうとも、チーターさながらの速さで駆け出した彼にとって避けるのは赤子の手をひねる様なもの。弾丸は当たること、掠めることもなく、目で捉える事も難しい。

「くっ、なんとか避けて！」

「——ムダだ！」

が、しかし。タイムレッドが二振りの剣を何も無い所で十字に振るうと、それは吸い込まれるかの様に移動してきたカザリの装甲を斬り裂いた。

攻撃を受けたカザリは、勢いのまま地面を転がる。先程までとは格段に違う反応能力を見せたタイムレッドにホームラは驚いた。

「……!?」

「俺、何で……?」

それは明らかにカザリの動きを読んでいた動き。しかしタイムレッドは自分自身それに納得出来ない。

それも当然、タイムレッド今の動きを目で追えていたわけではなかった。しかし何故かカザリが次にどう動くかを自然と予測出来ていた。まるで、そう——戦う相手をよく知っているかの様に。

「よく分からないけど、このまま！」

今は考えている場合ではない、と武器を構え直すと、体勢を崩しているカザリに向かって駆け出した。

立ち上がった所でスパークベクターによる突きを喰らわせ、怯んだところにデیفエンダーソードの横振り、まだまだと言わんばかりに剣を交差させX字に斬り裂く。一度間合いに入れさせてしまったカザリにはなす術もなく、ただ攻撃を受けて火花を散らす事しかできない。

「トドメだ！」

カザリの胴体に蹴りを入れて肉薄していた距離を離すと、その場から飛び上がり。

「ベクターエンド・ビート12!」

空中から落下しながら、上向きに揃えて構えられた二振りの剣がカザリに振り下ろされた。その一撃は完全にカザリの装甲を貫き、派手な火花を散らしながらカザリは力なく倒れ込む。

「……すげえ」

ホムラからは圧巻の一言が零れ落ちる。

竜也が戦うのを見るのは二回目だったが、魔法少女と肩を並べられる程の実力を目の当たりにして、改めてその実感が湧いている。

——これだけの力が自分になれば、誰も死なずに絶望の迷路から抜け出せたのではないか。

ふつつつと湧き上がる黒い感情を抑え込み、目の前の現状に意識を戻す。カザリは倒したものの、まだそれで終わりではない。

『タイムレンジャー、ココデモオマエハジャマヲスルカ』

静観していたギエンが二人の前に立ち塞がる。

機械故に表情は分からずとも、手下が倒されたというのに動揺もない余裕さ。隠しきれないそれは、ギエンがまだ「隠し球」に値する何かを持っているという事なのだろう。

タイムレッドは気を引き締め直して二刀をギエンに向け、ホムラはタイムレッドの後方でリロードし終わった銃を向ける。

「ギエン、何を知ってるんだ！ 何故俺とお前はここにいる！」

『ホウ、ジカクガナイノカ。キョウミブカイ』

タイムレッドの言葉に意外だと言わんばかりの反応を見せるギエン。

「自覚がない……？ 俺が何かに気付いてないっていうのか！」

『ハハハ、ナラバキコウ。オマエハダレダ？』

「そんなもの決まってる、俺は翼マトイ。ゴーレッド……え？」

『……』

竜也自身も意図せずに関係ない人物の名前を口にしたその瞬間、変身が解除された竜也の服はそれまで着ていたものとは異なるオレン

ジのジャケットに変わり。

ニヤリ、と。ギエンの笑みがより一層増し、竜也は突然頭を抱えて苦しみ出した。

「浅見竜也……!?!」

「竜也……?!」

駆け寄ったホムラの呼びかけに、竜也はまるで身に覚えのない名前だと言わんばかりの反応を返す。

「俺は……いや、私は……僕は……!」

口にする度が変わっていく一人称。それと同時に、竜也の顔が写真のピンボケの様に歪み始めていた。オーロラのように揺らめくその向こうには、竜也の面影もない「誰か」の顔がいくつも移り変わる。

あまりにも現実的とはかけ離れた光景に息を呑んだ。

「な、これは……!?!」

『セイシンラムシバム、ムスウノジンカクニオボレテイルダケダ』

「無数の人格……浅見竜也は多重人格者とでもいうの?」

『スコシチガウ。ダイタイハマチガイナイガ——サテ』

近寄ったギエンが苦しむ様子の竜也を突き飛ばし、ホムラの腕を掴む。

『イツシヨニキテモラオウ。オマエトモウヒトリ、カナメマドカガヒツヨウダ』

「まどかも……! 何をするつもり?!」

その言葉を聞いて瞬間、ギエンの動きが突如止まり。

一瞬後に再び喋り出した。

『——ハカイダ』

「え?」

『ハカイ、ハカイ、ハカイ!! ワタシハ スベテヲ ハカイスル!』

口らしき部分を忙しく開閉し、目を赤く光らせ、喉が擦り切れそうな声量で——機械なのだからそんなことはないだろうが——叫ぶ。狂氣的にしか見えないギエンの変貌ぶりに、ホムラは戦慄する。

『オマエガカナメマドカトセツシヨクシ、ケイヤクヲトメル。ソレガ、レキシノハカイヲヨビオコス』

「……え」

ホムラの抵抗が力ないものに変わり。

思惑通りの展開にギエンは更に笑みを深める。

「……そんな事を聞いて、私が協力するとでも」

『ツラククルシイシユクメイヲ、セオワセテモ イイノカ?』

「だとしても、あの子の住む世界が消えるなら!」

『ワタシノケイカクトオリニイケバ、オマエトカナメマドカラベツノ

セカイニウツシテヤル』

「……っ!」

明らかな甘言。嘘か本当か分からない様な言葉に乗るわけにはいかない。

——しかし、それでも。彼女が無事に生きられるならば。仮にギエンが約束を果たすならば、永遠の時間を彷徨ってきた自分の目的が果たされる。暁美ほむらが望むのは、鹿目まどかが魔法少女にならず生きる世界。それが叶うとするなら、それでいいのではないか。

「……私は——」

意識が強制的に塗り替えられていく。まるで、元からあった色の上から無理やり別の色を塗りつぶすように。気がつけば、辺りは先程まで竜也がいた場所とは異なっていた。

どこまでも続く深闇。現実とはかけ離れたそれが、浅見竜也を構成していた意識、記憶が別のものに変えていく。

「これで終わりなのか……?」

最早、自分が正しく言葉を発せたのかも理解できず。何も出来なかった事への無念が晴らされる事がなく、その意識は元の場所へ引き込まれ——

「竜也さん!」

「竜也!」

——ていた竜也の両手を、静止の声と共にそれぞれ掴んだ者がいた。

「……え？」

おもわず素っ頓狂な声が出た。その声を竜也は知っているからだ。忘れるはずがない。一年間の苦楽を共にした彼らとは、たとえ時間でも引き裂けない絆で結ばれているのだから。

「ドモン……それにシオンまで!?!」

「まったく、ようやく気づきやがったか」

「さつきから皆で呼びかけてたんですよ？」

オレンジ色のジャケットの彼——ドモン、そして物腰が柔らかそうな青年——シオン。どちらも未来に帰った、竜也の大切な仲間。

そして竜也は聞き逃さなかった。シオンが「皆」と発言した事を。

「タツヤ、相変わらずだな」

「……アヤセ？」

「言つたら、俺は生きるって」

何処からともなく現れた彼——アヤセもまた彼らの横に並び、笑みを浮かべていた。

ここまで来れば、あと一人。この場にいないければおかしい人物がいる。

「タツヤ」

「……ユウリ」

最後の一人——ユウリ。竜也の最愛の女性である彼女も、虚空から竜也の前に現れた。

整理しきれない状況に思考が混乱する。もしやこの状況は夢か、もしくは空想の産物なのではないのだろうか。そんな竜也の考えを見透かし、ユウリは言葉を続ける。

「ここは私たちを統括している「彼」の精神の狭間よ」

「狭間……それに、統括って？」

「……信じられないでしょうけど、今のあなたや私たちに現実の肉体はない。ある意味死んでいるのよ」

「死……!?!」

突拍子もないその事実は、竜也を絶句させるには十分な威力だった。竜也に死んだ記憶はない。仲間を見送った後、自分でも気付かな

「うちに死んだとでもいうのだろうか。」

「待ってくれ、一体どういう……」

「説明してる暇はないの、私たちが意識を保てる時間も残り少ない」
見れば、ユウリ達四人の体が少しずつ透明になってきている。

「お前ら……!」

「いいんだよ、俺たちのことは」

「僕の睡眠期の時みたいに、また寝ちやうだけですから」

「そんな事より竜也、こんな所で終わっていいのか?」

真つ直ぐに見つめるアヤセからの問いに、顔を俯かせた竜也は言葉に詰まる。

「こんな所、というのはギエンとの事だ。当然、ギエンを放っておくわけにはいかないし、何よりそれは竜也自身が納得出来ない。しかし今の自分に出来る事はもう何も無い。ただこの空間で死んでいくのを待つだけなのだろう。」

「そんなの、良いわけないけどさ。もう俺に出来る事は——」

「——あるって言ったらどうする?」

ユウリの言葉に顔を見上げる。

「私たちの力を使い、あなたをもう一度現実に戻す。あなたは自分の心の思うままに動きなさい」

「待てよ、それじゃあお前たちとは……」

「安心しろ、全部終わったらもう一度会える」

もう一度会える、とはどういうことか。

そもそも三十世紀に旅立った筈の彼らが何故自分と同じ場所にいるのか。

いくつかの疑問が浮かんだ瞬間、竜也の頭に割れる様な鋭い痛みが走った。

「……これ、は……!?!」

激流の様に流れ込んでくる情報。自分が、仲間が何故ここにいるのか。何故ギエンは蘇っているのか。何故精神だけの存在になっているのか。

頭痛が治った時、今の竜也の中で浮かんでいた 疑問の全てが吹き

飛んでいた。しかしその表情は、疑問が晴れた割にはどこか悲しげになっっている。

「……そっか。そういう事だったんだな」

「思い出したか。じゃあ、行ってこい」

すんなりと状況を受け入れた今の竜也は、仲間達に背を向け。歩き出そうとした所で、失笑と共に仲間達の方へ振り返った。

「まさか、二度目はお前たちじゃなくて俺の方が送り出されるなんて。前は逆だったっていうのに……こんな奇妙な事もあるんだな」

「それが私たちの選んだ未来。誰かに用意されたんじゃない、私たちが――」

「――ああ。俺たちが作っていく未来だ」

それを最期に、ユウリ達四人は消え。

決意と共に拳を握りしめた竜也は、力強く歩いてその場を去った。

「待つてくれ、ホムラちゃん」

ホムラの言葉を止めたのは、他でもない。再び立ち上がった浅見竜也だった。表情を歪ませ息は荒げているものの、その服は元々竜也が着ていたものに戻っている。

『ナニ!? キサマ……!』

「浅見竜也……!?!」

「ホムラちゃん、本当にそれでいいの? 友達も、家族もない世界でまどかちゃんは喜ぶのか?」

「っ……」

竜也の言葉に、ホムラが迷いを見せた。

「まどかが魔法少女の運命から逃れられないなら、彼女だけでも……!」

「いいや、変えられる! 俺たちがそうした様に、運命なんてもの言うことに従う必要なんてない!」

ホムラは目の前の竜也の気迫に押されていた。

それはただ、竜也の声が大きかったとか、睨みつけてきたとかそう

いう事ではなく。

その言葉の魅力に、取り憑かれそうになっている。そう感じたからだ。この提案に乗って戦えれば、どれだけ誇り高いか。どれだけ救われるか。

青臭い理想論だとしても、それはホムラが最初に憧れた「鹿目さん」だっけそうだろうか、と確信しているから。

——それでも。

「……私には、あなた達の様な運命を変える力はない」

「力……そっか、だから——」

ポケットに入っているそれを握りしめつつ、何かに納得した様子の竜也。もはや覇気を失ったホムラの一言に、懸命に考え。

「未来を変えるのに必要なのは、力じゃなくて意志。それを君は既に持っているじゃないか」

「」

——瞬間。

ホムラの脳内に浮かぶ光景は、自分の魂を輝かせた正にその時。荒れ狂う嵐が過ぎ去った後の街中で、三つ編みの少女は白い獣に願う。

『彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守る私になりたい』

——私が、本当に守りたかったものは？

『ナニヲシテイル。サツサトイクゾ』

「その必要はないわ」

『ナニ!?!』

掴んでいたギエンの腕を振り払い、ツカツカと歩いて竜也の元に戻ると振り返り、驚いているギエンをキッと睨みつけた。

「運命を変えるのは、力じゃなくて意志——浅見竜也、あなたの言葉を信じてみたくなった」

「ホムラちゃん……!」

「思い出したわ。私が望んだのは、まどかが生きられる世界じゃない。まどかが生きて笑える世界。実現させる為なら、運命だって変えてみせる……!」

『キサマ……ナラバ、シネ!』

激昂した様子の子のギエンが無茶苦茶な狙いで周囲一帯にマシンガンを撒き散らかすが、そんなものが魔法少女であるほむらに当たる筈もない。

近くにあった瓦礫の影に飛び込み身を守ると、盾から引き抜いたりボルバーを構える。

「くらいなさい」

銃弾の雨が止んだその瞬間、瓦礫から飛び出したほむらがギエンに照準を定め、冷静に引き金を引いた。

『ガッ!?!』

弾丸がギエンの胸部を貫き、怯んだ彼の傷口から火花が飛び散る。その隙に盾から引き抜いたそれを、ギエンの足元に来るように投擲。

「これで、最後」

ほむらが投げた筒状のそれは、彼女お手製の爆弾。ギエンより何倍も大きい魔女ですら只ではすまないそれが、ギエンの足元で爆発し。

轟音と共に、その場が煙に包まれた。

「やった……!」

「……ホムラちゃん。選んだんだな、自分の道」

「浅見竜也、改めて礼を——」

ホムラは竜也の方へ向き直り、彼女にしては珍しく笑みを浮かべながら話す。

その直後。ホムラの背後に赤色の光が動くのを見て、血相を変えた竜也は動いた。

「危ない!」

「え」

変身する暇はない。生身のままホムラの元に走った竜也は、その勢いのままホムラを横に突き飛ばし——次の瞬間、竜也の胸にぽっかりと小さな穴が空いた。

「か、はっ——!」

「な!?!」

『マツタク テマヲ カケサセテクレル』

煙の中から出てきたのは、無傷のままのギエン。一体どういう事か

とも困惑するホムラだが、それ以上に優先すべきことがある。

倒れ込んだ竜也の身体を支え、表情を崩して必死に語りかけた。

「浅見竜也！ しっかり！」

「……あ、ホムラ、ちゃん」

「喋るのはやめなさい！ 傷口が……！」

胸に空いた穴からは、どんどんと血が流れてきている。自分の傷ならともかく、治癒の魔法を使えないほむらに他人の傷を塞ぐ手段はなかった。

「……なにか、時を止める魔法よ。こんな時に役立たないなんて！」

時が止められたとしても、弱っていく竜也を止める事は出来ない。無敵にも近い能力を持ちながらも、それが使えない——たどえ使えたとしても、救う手段がない事にほむらは苛立っていた。

一方、徐々に意識を失っていく竜也。だが、彼にはまだやるべきことが残っていた。

「これ、を……！」

ポケットの中にあるそれをゆつくりと取り出すと、ホムラの手にそれを握らせた。

この状況でわざわざ渡してくる物を不審に思いつつも、握られたそれ——ブレスレットを見た。赤と黒の塗装が施されているそれには、沢山のボタンが備わっている。

「これは……？」

「アイツの、形見だ。きみに、たく、し——」

そこで、ホムラの手を力強く掴んでいた竜也の手は急に力をなくし。同時に、竜也の目もゆつくりと閉じていく。

浅見竜也の中に後悔はない。既にやるべき事は済ませ、自分のやりたい様にもやった。

「ユウ、リ——今、そつちに……」

最期に、最も愛する人の名前を呼びながら。

浅見竜也は、深い眠りについていった。

「っ……」

瞳を閉じた竜也の肉体から、徐々に温もりが消えていくのを感じて
しまい。

途端に、無力感がホムラを襲った。

「浅見、竜也……！」

名前を呼んでも返事はない。当然だ、彼は既に死んでいるのだか
ら。それはホムラにも分かっている。

だとしても、彼女は伝えたかった。

あなたのおかげで自分は道を違えなかった。運命を乗り越えると
いう決意を改めて出来たのだ、と。

しかし、その感謝を伝える事はもうできない。

自分のせいで彼は死んでしまったのだから。

どうしようもない無力感は、彼女に一つの願いを懐かせる。

——力が欲しい。

彼女は強く願う。

どんな敵をも乗り越えられる、どんなものにも屈しない力が欲し
い。

突然、暁美ホムラが抱いたその願いに応える様に、彼女の手の中に
あるブイコマンダーが光りだし。

次の瞬間、ホムラは別の場所にいた。

「!?」

そこは、どこかの廃れた工場の中だった。薄暗い中に突然飛ばされ
たホムラは混乱するが、前方に人影を見つけ即座に身構えた。

「浅見が選んだのは君か」

コツ、コツと足音を立ててホムラの元に歩いてきた男。警備会社の
制服らしき服装の彼は、どこか面倒そうな態度を出しつつもほむらに
話しかけた。

「……あなたは？」

「滝沢直人。君が持つてる、そのブイコマンダーの持ち主だ」

直人と名乗る男が指を指したのは、ほむらの手の中にあるそれ——
竜也が死に際に託したものだ。浅見という単語といい、目の前の

彼はどうやら竜也を知っているらしい。

直人、という単語に引っかけかりを覚えつつもホムラは質問を続けた。

「浅見竜也とは知り合いなの？」

「……まあな」

名前を出しただけで嫌な顔をされたことに驚きつつも、気を取り直して次の質問に移るホムラ。

「……ここはどこなの？」

「まあ、俺が君に用事があったから生まれた空間、とでも思っておけばいい。君は意識だけここに飛ばされている状態だ」

よくは分からないが、とりあえずどこかの空間に飛ばされたらしい。そこまで気を留める事でもないだろう、と一人納得するホムラだった。

——が、次の瞬間。とある事を思い出し尋ねる。

「ねえ、あなた。もしかしてもう死んでいたりするの？」

「……ほう」

「浅見竜也は、形見だと言ってこれを渡してきた。形見って事は、元の持ち主であるあなたはもう死んでいるはず」

直人、という言葉に関しても思い出した。

竜也がDVディフェンダーと呼んだあの銃。借り受けたというあの銃も、おそらく滝沢直人のものなのだろう。しかし、彼は既に死んでいるという。ならば、目の前の男は何者なのか。

「答えて。あなたは何者？」

「……滝沢直人本人だ、間違いなくな」

「そんな事を信じれるはずが……！」

「いいや、真実だ。死んだというのもな」

矛盾の様にも思える二つの事実が並べられる。

そんな事があるはずないと否定しようとしたホムラだが、吐き出すとした言葉を抑え少し考えてみた。

——死んでいるが、生きている。

——そもそも自分はここに意識だけ飛ばされた。

「……意識や魂だけの存在になった？」

「まあそんなところだ。浅見と違って賢いんだな、君は」

たとえば、魔法少女が例外なく持つソウルジェムの様に魂だけが別の場所にあるならばどうだろうか。

肉体は死んでも、精神や魂がどこかに残り——それが具現化した存在ならば、或いはそんな事が出来るのかもしれない。

「それで、死人のあなたが私に何の用事なのかしら？」

「なに、奴が選んだのがどんな奴なのか気になってな」

そう語ると、直人はジツとホムラの顔を見る。睨み付けられている様にも見えるそれに少々戸惑うが、直人は言葉を続けた。

「嘘は吐かず正直に答えてくれ。君、力が欲しいのか」

「……ええ、欲しい」

「その力を以って何を為したい？」

力を使って何をしたいか。緊張をほぐす為にも深く深呼吸し、直人の問いに答えた。

「私は運命から逃げないと決めた。立ち向かって、絶対に未来を掴んでみせる。その為の力が欲しい」

一度は折れかけた心を立ち直らせてくれた、竜也の為にも。何より、守ると誓ったまどかの為にも。暁美ホムラはもう何があっても、挫けない。運命なんて大きいものが相手だったとしても、負けないで立ち向かう。

「その為なら、悪魔にだって魂を売ってみせる」

心からの言葉。何せ、一度は実際に文字通り魂を売ったのだ。暁美ホムラにとつて、それくらいの覚悟は既に出てきている。

全てを聞き、沈黙する直人。その場に流れる沈黙。

気まずい空気が流れていたその時、突如直人がクスリと笑った。

「ハハハ……運命から逃げない、か。なるほど、奴が選ぶわけだ」

いかにも納得した、という直人の一変した様子に、思わず動揺してしまいそうなホムラ。

「どうせここに居る俺には持て余してた力だ、お前にくれてやる」

ブイコマンダーの事を指しているのだろう。どうやらお眼鏡にか

かっただらしい、とホムラは一先ずの安堵感で心が満たされる。

直人はどこか機嫌を良さそうに、しかしそれをなるべく表に出そうとはせず話を続けた。

「最後に一つ、教えておくことがある」

自らの手にかかり倒れた宿敵。その亡骸の前で立ちすくむ少女を目前に、ギエンは嗤った。

ようやく、ようやく目的が果たされる。そう、ハカイ、ハカイ、ハカイ――

ギエンの頭に浮かぶのはそれだけだ。ただ全てを破壊する。それが楽しいから――自分を満たせる行為だから、彼は破壊を続ける。

『フン。コウナレバ、コノワタシミズカラコノセカイヲコワシテヤル！』

幸いにも、彼はその為の手段を手に行している。

唐突に蘇ってしまった彼は、とある力を手にした。最初のプランは失敗に終わった。ならば、世界すらも壊せそうなその力を使い、自ら世界を破壊してみせよう。

「ギエン、だったかしら？」

『ン？』

そんな理想を描いていたギエンの前に、ホムラが立ちはだかった。その表情は先ほどまでとは一変し、キリツとした目でギエンの事を睨みつけている。

「あなたには何の恨みもない。でも、まどかのの世界を破壊するといふのなら。躊躇なくあなたを破壊させてもらおう」

『キサマ、ソレハ……!?!』

言いながら、ホムラは左腕に巻かれたブイコマンダーを口元に持つてくる。

その仕草、何よりブイコマンダーを見たギエンは見るからに動揺を隠し切れていない。

『変身コード?』

『ああ、そいつは音声を認識して作動する。そしてその変身コードは――』

滝沢直人から教えられたそのコード。皮肉にも自分の名前にも通じていたそれを、ホムラは高らかに宣言する。

「――タイムファイヤー!」

赤い光がホムラを包み込み、即座にスーツの装着を完了させ。一瞬の発光と共に、その戦士は現れた。

真紅の如き装甲を纏い、炎の名前を冠した戦士――タイムファイヤーがここに誕生した。

『オノレ……!』

「さて、行かせてもらうわよ」

動揺を隠せないギエンに、タイムファイヤーはホルスターから引き抜いたDVデイフェンダーの銃口を突きつけた。

昆虫系グリード、ウヴァと対峙するほむら。しかしその戦況は、苦しいものとなっている。

「……っ、また!」

次々とほむらが放つ紫紺の矢。無茶苦茶な軌道を描いてウヴァ目掛けて飛んでいくそれらは、しかしウヴァの頭部の角から放たれる電撃が全て撃ち落とした。

苦悶の表情を見せるほむらに対し、ウヴァは何も答える事はない。当然だ、今の彼に自我は存在しないのだから。

『――』

与えられた命令――主に逆らう者への攻撃。

その命に従うべく、ウヴァは動いた。

「来る……!」

立ち止まっていた状態から一変し、堂々と正面からほむらに急接近するウヴァ。回避か、防御か。迷った隙に腹部に叩き込まれる拳が、

ほむらを後方へと吹き飛ばした。

「くっ！」

苦痛に顔を歪めながらも、受け身を取って即座に体勢を立て直す。横を見ると、杏子もまた一方の怪人相手に苦戦している様子が窺える。

——つまり、ほむらはこの敵を一人で相手にしなければならぬ。

「上等よ」

ほむらが口にするのは奮起代わりの言葉。それは誰に聞かせているわけでもなく、己に向けての啖呵だ。この場にはまどかが——守ると誓った彼女がいる。ならば、自分は倒れるわけにはいかないのだ。

「まどか……あなたを守ってみせる」

たとえそのまどかが、正確には自分の望む彼女——最高の友達だと断言してくれた鹿目まどかではないとわかっているとしてもそれは変わらない。

「来なさい、今の私は負けない！」

力を振り絞って立ち上がると構え直した弓から矢を放つが、無駄だと言わんばかりに放たれた電撃がまたそれらを撃ち落とす。しかし電撃が巻き上げた砂煙が晴れた時、ほむらの姿はその場から消えていた。

『……？』

ウヴァが周囲を見回すが、他のグリードや魔法少女の姿以外には影も形も見当たらない。次の瞬間。無防備なウヴァの身体に、上空から降り注ぐ無数のナニカが襲い掛かった。

『……！?』

悲鳴を上げながらも、ウヴァは空を見上げる。

そこにいたのは、背中から灰色の翼を生やしたほむら。彼女の翼から放たれた無数の羽が、今し方ウヴァを襲った攻撃の正体だった。

「やってみたら出来るものね」

それはここに来る直前に教会にて発現したもの。

あの時は無我夢中を出していたものだが、その一回の経験がほむらにコツを掴ませ、こうして土壇場の所で成功させたのだ。

『……!!』

怒り狂うウヴァによる雷撃が辺りを飛び交う。先程まで悩まされていたそれも、今のほむらにとっては些事そのものだ。翼を自在に動かし、高速で空中を飛び回り回避する。空中飛行に不慣れな故に小回りが効きにくいものの、理性を失った者からの攻撃を避けるには十分な速度。

回避しながらも弓を構えるほむら。攻撃に移る為に弦と矢を精製すると、矢の色が普段とは別物の、黒く禍々しい色となっていた。

「……とりあえずやってみましょうか」

この翼の影響だろうか。原因を考える暇もないので、ほむらはとりあえず使ってみる事にした。

「——これでもくらいなさい！」

叫びと共に放たれた矢。再びウヴァが角から電撃を放出し、迎撃しようとした瞬間。電気を帯び始めたツノが、放たれた矢が変化した極太の光線によって一瞬にして消しとんだ。

『!!?』

衝撃と苦痛で倒れこむウヴァに対し、ほむらもまた驚愕していた。

たしかに今の攻撃は自分が放ったものだが、そうなるかと予想して放ったものではなかった。

「……魔力が変質しているとでもいうの？」

先程ギエンから逃げる際にはこんな現象は起きてなかった。ならば原因は明らかに自身の翼だろう、とほむらは考える。魔法すら変質させる翼。不気味さすら感じさせられるが、それは後で考えるべき事。

「まあいいわ、それより……その有り様じゃあ、もう何も出来ない様ね」

ほむらの視線の先には、再び立ち上がるウヴァの姿。しかしそのツノは未だに欠けたままだ。

であるならば。空中にいるほむらに対し、ウヴァは攻撃手段を持たない。

「これで終わりよ」

翼と矢に魔力を込め、矢をつがえ弓を構える。

敵にかける慈悲など、彼女にとっては持つ余裕もない。

抵抗する意思はあるものの、じりじりと後退していくウヴァを見据え、一言。

「——消えなさい」

氷の様に冷徹な声を手向の花とし、魔力を纏った翼からも無数の羽が放たれ、同時に矢が射られた。

最初に放たれた羽は空中で何本もの鎖の形を形成し、逃げ惑うウヴァの手足を拘束する。抵抗しようにも、完全体程の力を持たない彼に破る術はない。

放たれた矢が変化した、先程とは比べものにならない程の大きさの光がウヴァを包み込み、断末魔を上げる暇さえ与えずに消しとんだ。

「——ふう」

地面に降り立ったほむらが一息ついた。慣れない魔法を駆使したからか、その額には汗が何筋も流れている。

「……この翼、一体なんなの？」

自身の身体に精製された——というより、生えている様にも見えるそれに目を向ける。

明らかに普通ではないのは確かだが、それ故に正体の検討もつかない現状。

「……とりあえず放置かしらね」

どうやら今すぐ自分に危害を加えるものではないらしい。便利なものには変わりないのでとりあえず行使していく事に決めた。

「ちっ、こいつちよこまかと！」

湧き上がる苛立ちを混ぜた杏子の槍による薙ぎ払い。間合いにいるメズールを狙って行われたそれは、しかし彼女を捉える事はない。

槍が当たる直前にメズールが自身の身体を液化化させてよけたからだ。そのまま杏子の背後に素早く回り、杏子の背中目掛け水流を放

つ。

「ちっ——！ 戦いにくいっいたらありやしねえ！」

これまで相手してきた魔獣とも違う異質な相手。やりにくさに舌打ちと悪態をつきながら、相手の様子を伺う。

からかっているのだろうか。挑発するかの様に手を差し伸べてくるメズールの様子に、杏子は更に苛立つ。

「んじゃ、お望み通り行ってやろうじゃねーか！」

駆け出すと同時に構えた槍を變形。長い多節棍状になったそれに魔力を帯びさせながら操り、あつという間にメズールの身体を縛る。

電流代わりの魔力による拘束。これならそう簡単には抜け出せない筈であると杏子は考えたが、想像通りの様で多節棍による拘束に対し、液状化で対処する事もなく力づくで抜け出そうと身体を揺らしている。

「——わりーな」

無抵抗の状態にしてからの攻撃には罪悪感を伴ったが、状況が状況だけに仕方がない。

多節棍の拘束を抑えたまま、空いた手に召喚した槍による突がメズールの胸部を貫いた。

『……!?』

あまりにその傷が深く、大きかったからだろう。実体を保てなくなったメズールの身体は崩壊し、後に残ったのは、彼女の身体を構成していた大量の銀色のメダルとその上にある7枚の青いメダルだけだった。

「これ、ほむらの時の……?」

杏子はそれに見覚えがある。ほむらの体内からこぼれ落ちていたものと同一のもの。

あの怪人を構成していた——いわば細胞の様なものなのだろう、と一人納得。

『……メズー、ル』

「……?」

未だ沈黙を保っていた灰色の怪人の小さな呟き。

メズール、名前の様な響き。名前だとするなら、一体誰の名前か。
「——こいつの名前か」

『ウアアアアアア!!』

灰色の怪人——ガメルの咆哮。声量から思わず耳を塞ぐ杏子。

すると彼の怒りに呼応する様に、彼の周りにある物がどんどんと銀色のメダルへと変換されていく。それに伴う様に、戦場を分断していた杏子の結界も崩壊していった。

「なっ……!?!」

建造物。車。植木。見境なくメダルに変換して体内に吸い込んでいく様は、暴走そのものだ。

ならば、人はどうなのだろうか。答えは明白なので、杏子はその先の想像を無理やり振り切り、暴走を始めたガメルから距離を取った。

『メズウウウウウウウウ!!』

愛しい存在の名を叫び、暴食の獣と化したガメルはひたすらにメズールだったもののメダルも喰らう。すると、ガメルの身体に明らかに変化が生じ始めた。

溜めに溜め込んだ体内のメダルを放出すると、それがガメルの身体を覆い一匹の獣の形を形成していく。

「一体何が出来るっていうんだ……!」

威圧感のある巨大な灰色の胴体に、鋭利な二本の牙とその間から伸びる長い鼻。

マンモス。一見するとそう呼ばれる絶滅した動物に酷似していた。しかし、胴体からは何本もの触手が生えている。

「なんだよこれ……!?!」

戸惑う杏子に対し、ガメルだったものの操る触手が何本も襲い掛かる。

そのあまりの巨大さに威圧されていた杏子は、行動が一瞬遅れ。

「やばっ——」

「——はっ!」

横から割り込んだ存在による一閃が、触手を切り落とす。切り落と

された触手らはメダルに変換され、地面に散らばった。

そして杏子は、自身を助けた存在の顔を見て驚愕する。

「……あんた!」

「大丈夫か?」

そこにいたのは、剣——メダジャリバーを携えた門矢遊星。先程まで眠っていた彼が、この戦場に現れたのだった。

結界が破壊される程の暴走の衝撃で目覚めた彼は、ギエンの相手を任せてこちらの加勢にかけつけ今に至る。

「ガメルの暴走態つてところか。また面倒な……!」

「なあ、あいつ……浅見竜也は?」

先程まで面倒そうに暴走態を見ていた遊星の視線が杏子に向けられる。その表情に驚いている様子は見られず、ただ無表情でじつと杏子を見つめていた。

「眠ってるよ、俺の中でな」

無言が続いた後、やがて諦めた様にそう告げるとまた暴走態に視線を戻した。隠しても無駄だと判断したのだろうか。

「あつそ」

しかし今はそんなことを考えている余裕もない、と杏子は一言返した後に槍を構え直す。

「しかしまずいな。いくら不出来なコアメダルを使つてるとはいえ、あの規模になれば骨が折れる」

「マミの奴でもいれば話は別だけど、アタシだけじゃ仕留めるのは多分キツイ。あんたは?」

「……ないわけではないが、こちらも一人じゃ無理だ」

そう語る遊星の顔は、心底嫌そうな表情を浮かべている。やがて背に腹は変えられないと判断し、どこからか取り出した赤色のメダルを杏子に見せた。

「これ、あいつらのと同じメダルだよな」

「コアメダル。ざっくり言えば奴らの力の源だ」

言いながら、遊星がもう片方の手にベルトを握る。

それはオーズドライバーと呼ばれる、コアメダルを使役する欲望の

王の力を行使する為のベルト。

「奴を構成する粗悪品とは違い、こっちは純正品だ。これならおそらく奴にも押し負けないだろうが……お前一人で奴の動きを封じる事はできるか？」

「……いや、多分無理」

苦々しく首を横に振った。暴走態の力を正確に見ていたわけではないが、いくらなんでもいつも相手にする魔獣とは規模が違いすぎる。自分一人だけで抑え切れる程の自信は杏子にはなかった。

「——なら、私も手を貸すわ」

その時、突然上空から翼をはためかせ、ほむらが地面に降り立ってきた。

「ほむら!?! ……それ、さっきの?」

「詳しい事は後で話すわ。それで、動きを止めればいいのね?」

「ああ。長い時間は取らせない、一瞬で決める……そうしないと、こっちが持ちそうもない」

最後の方は聞き取れなかったが、遊星ならあの怪物に対する有効な手段があるという事を加味してほむらは一瞬考え。

「分かったわ——でもその代わり、そろそろあなたの事を教えて。浅見竜也、彼をはじめとするあなたの中の人たちの事もね」

「な……くそ、分かった。全部終わった後でなんでも話す、それでいいか?」

「充分よ」

一瞬動揺する遊星。迷ってる暇もないので、限りなく彼女らが望む形で確約し。それに短く返事を返し、杏子とほむらは並び立った。

「いくわよ、杏子」

「ああ……やるじゃん、あいつから情報引き出すなんて」

「別に、そこまで考えてたわけではないわ。敵か味方か見定めたかっただけよ」

この後どう転ぶかは分からないが、約束を反故にするなら彼は信じられないし、逆を守るのならば信じてもいいとほむらは思っている。

多重人格。杏子の考えていた遊星の正体にはほむらも自分で行き

ついでおり、それならば信じてもいいと考えていた。無論、門矢遊星に限るものであり、別の人格が襲いかかってきた時は別だが。

「んじゃ、あとはアイツをやるだけか——」

「——避けてー!」

突然空中に飛翔したほむらの叫びに反応し、杏子も慌てて地面を思い切り前方に飛び、遊星は後方に回避。

一瞬後、怪物態の鼻が薙ぎ払う様にして三人のいた場所を襲った。

「ほむら、無事か!」

「ええ。門矢遊星、あなたは!?!」

「問題ない! 二人とも、頼んだ!」

「ったく、簡単に言ってくれるね。まずは……はあああつ!」

自身目掛けて襲い掛かる触手を槍で防ぎながら走る杏子は怪物態の目前まで接近。滑り込む様にして足元に入り込み、大規模な魔法を発動すべく魔力を集中させた。

「くらいな!」

杏子の足元に現れた赤い魔法陣。そこから召喚された巨大な槍が暴走態の巨体を下から押し上げ、バランスを崩して転倒させた。

「予想通り、串刺しとはいかないか。ほむら!」

「ええ、任せなさい!」

上空を飛翔するほむら。転倒しても尚襲いかかってくる触手を弓で撃ち落とし、再び鎖となった羽を飛ばし暴走態の身体に巻き付けた。

しかし、それだけで暴走態の力を封じられたわけではない。

「っ、こいつ……!」

暴走態の抵抗。ただ単に暴れているだけだとしても、その巨体から繰り出される力は相当なもの。頑丈に縛った筈の鎖が解かれそうになり、ほむらは踏ん張る。

「ほむら! くそっ!」

杏子が鎖で解かれそうな拘束を補強しようとするが、近距離から襲いかかってくる触手への対処で精一杯。

杏子の懸念通り、暴走態の力は相当なもの。

ただ暴れるだけの獣の動きを封じるには、ほむらや杏子のどちらか片方だけの力では足りなかった。実際、いつ拘束を解かれてもおかしくない程に暴走態は暴れている。

ならば、どうするべきか。

ほむらの中でそれは決まっている。やれる事は全てやった、ならばとは彼を信じるだけだ。

「門矢遊星！」

「——ああ」

後方に待機していた遊星が、ほむらの叫びに応じる。その腰には既にオーズドライバーが巻かれていた。

「……」

遊星は目の前の暴走態を見ながらも、手に握られた三枚の赤いメダルに視線を落とす。そして、微かに躊躇う様子を見せた後に再び視線を上げた。

「……よし」

迷いはある。

しかし、彼女らとの約束に報いなければならぬ。一時的にでもこんな自分を信じてくれた。ならば、この力を使う者としてはそれに応えなければならぬだろう。

オーズドライバーに三枚のメダルを装填。腰に付けられた円状のそれ——「オーズキャナー」を引き抜き、胸の前で構え。

「——変身！」

吐き捨てる様な叫びと共に、オーズドライバーの三枚のメダルに対し、オーズキャナーを滑らせる様に素早くスキャンさせた。

『タカー！ クジャク！ コンドル！ タクジャア〜ドル〜！』

遊星の目の前に現れた、三枚のメダルを模した赤いオーラングサークル。それらが組み合わさり、それぞれのメダルに刻まれた絵が合体。

それに遊星の身体が覆われると、その姿を変質させた。

「はっ！」

「っ、お前は……!?!」

『悪いけど、これは僕がいただいたよ』

掴んだコアメダルを残さず体内に取り込み、くつくつと笑う存在に、驚愕が隠せない遊星。

その筈だ。彼——カザリが倒された所を、遊星は「内側」から見ていたのだから。

「……なるほど、狸寝入りという事か」

『そういう事。僕だけはアイツの洗脳から逃れられてたから、頃合いを見てたつてわけ』

カザリにとつても、それは数奇な体験だった。

コアを砕かれて意識が消滅したかと思えば、気がつけばギエンによつて復活を遂げていた。

しかし自分以外のグリードは全てギエンの操り人形となっており、こつそり会話を試みても反応もない。

幸いギエンには自分が意識を保っていることを悟られなかったので、とりあえず彼も他のグリードと同じようにし、いずれは寝首をかこうとしていた。

そして竜也に倒されるフリまでしてうまくギエンの警戒から逃れ、こつそり戦線を離脱した後に暴走態を目撃し今に至る。

『でも、今度のオーズは前より弱いんだね。少しコンボを使った程度でボロボロになっちゃってさあ!』

悔しさを見せつつも何も言い返す様子もない遊星に対し、ゆっくり近づいてきたカザリは少し苛立ちも込めつつ、思い切り突き飛ばした。

抵抗もせずに地を転がる遊星。その際、付けていたオーズドライブバーが衝撃により取り外され、どこかに吹き飛ばされていった。

「くっ……!」

「おいてめえ!」

『そっちは……へえ、人間も進化したんだね。まさかそんな力を使えるなんて』

飛び込んできた杏子の一撃を身体を捻って避けながら蹴りを叩き

込みつつ、興味深そうな反応を見せるカザリ。そこで、自身を覆う影に気付いた。

空を見上げると、太陽を背にしたほむらがカザリに向けて弓を構えている。

「生憎、私たち魔法少女は人間とは少し違うの」

『どうやらそうみたいだね。ところでその羽——もぎ取ってもいいかな。いけ好かない奴の事を思い出すからさあ!』

瞬間、ほむらに走る悪寒。何かまずい。言い表せない不安から退避しようとした次の瞬間。

ほむらの視界を緑色の閃光が埋め尽くした。

「!? さっきのと同じ……!」

ほむらにはそれに見覚えがある。先程自分が相手した怪人が放っていた雷撃と同じ色だった。

『ウヴァのコアメダル——回収しといて正解だったね』

暴走態に近づく最中、カザリはそれを発見した。ほむらに倒され、しかし見つかるとはならず、放置されていたそれら——緑のコアメダルを。しかし、当の本人はそんな事を知る由もない。翼を撃ち抜かれたほむらは姿勢を反転させ、地に向けて落下していく。

「しまっ……!?!」

突然の事への動揺からか、再び翼を生やそうとしても上手くいかない。目前に迫った地面に、目を瞑り——

「間に合ったか」

「え?」

次の瞬間、予想もしない感触がほむらの身体を覆う。どこか安心する温もりに目を開ければ、目の前にあったのは遊星の顔。

そこでほむらは気付く。今、遊星に抱き抱えられているという事に。

「……礼は言うけど、いい加減離してくれないかしら」

「ああ、悪い——おっと」

ゆつくりとほむらの身体を下ろす遊星。ほむらが地面に下りたと同時に、遊星の身体は力を失った様に倒れた。

「門矢遊星!？」

「……気にするな。これでもまだいいほうだ」

いつも通り慣れているといった遊星の態度に反し、その身体はピクリとも動く様子はない。しかし、ほむらの記憶によれば暴走態から攻撃を喰らった場面はなかった筈。

どこかでダメージを負っていたのだろうか、と不思議に思っていたその時。

「暁美ほむら、だったか？」

「……何かしら？」

「これからあいつを倒す最後の切札を使う。どんな手段を使ってもいい、その後——俺を殺せ」

「……え」

ほむらが絶句する暇もなく、遊星は先ほどまでの様子が嘘みたいに勢いよく立ち上がった。その目は変わらずカザリに向けられている。

『お喋りは終わり?』

「ああ。お前を倒す」

『へえ、そんな状態でどうやって戦うのさ』

「——」

無言のままの遊星。ハツタリか何かだろうと判断したカザリだが——遊星の瞳が紫色を帯びたその瞬間、顔色を変えた。

『まさか、それは……!』

「……カザリくん。良き終——」

「——待ちなよ」

二人のやり取りに割り込む者がいた。

佐倉杏子。飛び込んだ家の瓦礫を退けながら出てきた彼女の腰には、オーズドライバーが巻かれていた。

「ん、ここは——?」

聴覚に訴える一際大きな音で、杏子は目を覚ました。

最初に目に入ったのは、空を埋め尽くす程の黒煙。疑問を抱きつつ

周囲を確認すると、そこは瓦礫の山だった。どこかの建物のようだが、跡地と言えどその造りに見覚えはない。

「……んだよ、これ」

身体を起こし辺りを見回す。そこには、明らかに彼女が先程までいた見滝原とは異なる風景が広がっていた。

杏子が目覚めた建物と同じように崩れ去った場所がいくつもあり、その殆どが燃え盛る火に包まれている。大規模な災害か、それとも戦争、内戦の類か。

火薬の独特な匂いが、おそらくは後者だろうと杏子に告げていた。しかし、別の世界とはいえ見滝原が戦争に巻き込まれた、という話はホムラからは聞いていない。

「まさか……また別の世界って奴？」

また自分は巻き込まれたのか、という疑問が脳内に浮かんだその時。それは杏子の視界に入った。浅黒い肌の年端もいかない少女が一人、泣き声を漏らしながら立ち尽くしている。

「っ……っ……」

気付いた時には、脇目も振らず全力で走り出していた。本当に戦時中なら下手に動けば危険かもしれない。しかし杏子にとっては放っておく事は出来ない。

その姿に、失った妹を重ねてしまったから。

「はあ、はっ……っ……」

足を休ませる事なく全力で動かしながら、魔法少女としての姿に変身。更に上乘せされた速度で急接近しながら、目前まで迫る少女に向けて手を伸ばした。

——あの時は届かなかったこの手に、今の自分ならば届く。そう確信した刹那、杏子の視界の先が空から降り注ぐ戦火に包まれた。

「——あ、え？」

急停止した事により、杏子自身がそれに巻き込まれる事はない。が、前方にいた少女の安否は確認するまでもなかった。

——生きている筈がない。さやかのような治癒に特化した魔法少女ならいざ知らず、ただの人間であれば即死する事は不可避だ。

杏子の脳がそのどうしようもない現実を認識してしまった瞬間、全身から力が抜け落ちて地面に倒れ込んだ。

「くそ……くそおおお!!」

八つ当たりの様に地面を叩き、悲痛な叫び声を上げる。

——救えなかった。今の自分でも救うことが出来なかった。今度は目の前にいたのに。助けられる力を持っていたのに。

「モモ——ごめん」

不甲斐なさからおもわず溢れ出る謝罪の言葉。

もつと、もつと自分に力があれば。あるいは、そんな現実を変えられたのではないのか。

次々と浮かび上がる考えが、佐倉杏子を縛り上げていく。

「——はっ、あいつと同じか」

「!？」

唐突に後ろからかけられた声に驚き、振り向く杏子。

そこにいたのは、髪を金に染めた若い男。一見普通の人間にも見えるが、その右腕は異形の形を成しており、明らかに人間とはかけ離れている。

「……誰だ？」

「俺の事なんざどうでもいい。お前に用があつてきただけだ」

乱暴そうな口調に、我を通す言い分。自分勝手な奴だというのは間違いない、と杏子は目の前の男の印象を固定した。

そこでふと辺りを見回すと、景色がまた一変しているという事に気付く。

「ここは現実じゃない。さっきまでお前が見ていたのは幻覚——というよりかは、記憶だ」

「……記憶？」

「ある男のな。俺はそいつに頼まれてここに来た——ちっ、なんでこんな事を……」

「そっ、か」

男の言葉に、杏子が悔しげに項垂れた。

たとえば自分が助けようとした存在が元は幻覚だったとはいえ、それ

が記憶となれば話は別。助けられなかった女の子は、確実に過去の世界の何処かにいたのだ。

その事実が、重りの様に杏子の心を圧迫する。

「……それで、ここは何処なんだよ」

「お前の精神世界とやらだ。オーズの力がお前と惹きあつた結果、俺が干渉できている」

「オーズ……って、さっきの——じゃあ、アンタや頼んだソイツも門矢遊星の中の？」

「……ああ。尤も、おそらくあいつは俺の存在を感知していない。奴の事を抑えるのに必死だろうな」

「どうやら、男と男の仲間も門矢遊星の内側にある人格の一つらしい。」

「また増えた、と杏子は内心驚くが、そもそも力の数だけ人格がある事は予想していた。」

「本題に入る。八百年ほど前に作られた欲望の王の力、それをお前に渡しにきた」

「アタシが、欲望の王？」

「実際お前には素質がありそうだ。気付いたんだろ、お前自身の欲望」

「……」
ふと、何かを思い出そうとするかの様に明後日の方向を眺める杏子。

その脳裏に過ぎる過去の記憶。優しく温かかった家族のそれを噛みしめ、再び男に目を向けた。

「どうしようもない位には自覚しちまったよ。どうやらあたしは、目の前にいる人を放っておく事が出来ないらしい」

そこで杏子は、一度何かを思い出すように目を閉じた。脳裏にフラッシュバックするのは、彼女の辿った生涯の記憶の数々。

最初に過ぎったのは、二人の夫婦らしき男女とその間に挟まれた二人の姉妹の景色。笑い、怒られ、泣き、また笑い——そんな家族の風景は、姉妹の片割れである杏子を残り、幽霊の如く消え去った。

「親父も、お袋も、妹も死んで、正義の味方になるって理想も失って、

アタシの中にあつたものは全部なくなつた」

次に過ぎつたのは、最初に出会つた魔法少女であり、かつての理想の存在でもあつた巴マミの姿。

杏子とマミは最初は肩を並べて戦い、互いの理想を語り合い、笑い——次の瞬間には、背中違いになつた二人が互いに反対の道を歩いて行つた。何処かに歩いて行く杏子の表情は、どこか寂しげだつた。

「多分、それがあつたから——空っぽになつた自分を満たす為にも、アタシは自分の為だけに魔法を使うし生き抜くつて誓つたんだ」

「ま、今は違うけどさ」と言いながら自嘲気味に笑う杏子。

最後にその脳裏を過ぎたのは、見滝原に来て出会つた仲間であるさやかとほむら。そこに何処からか現れた輝夜を加え、一度は道を違えたマミも加わり、和氣藹々とした空間を作つていた。

その光景を浮かべ、杏子は無意識に笑顔を浮かべていた。目を閉じていた彼女は、再び目を開いて喋り出す。

「——でも、その出来事はアタシの根底には確かに刻まれてた。だからなんだろうな。さつきみたいにな、目の前の死にこんなにも必死になつちまうのは」

男の言葉通り、既に佐倉杏子は自身の本当の欲望に気付いている。過去の体験が植え付け、先程の体験によつて完璧に気付いてしまつた——偽りの欲望では満たせなかつた、その欲望を。

「アタシはただ——手が届く誰かを助けたかつたんだ」

簡潔、しかしそれだけに重い。それこそ佐倉杏子が本気で望むものだつた。

杏子が心中の吐露を終えると、男は無言のままじつと見つめ。

「お前なら適任だ。これを使え」

ほら、と男が乱暴に投げたそれを、何とかキャッチする杏子。長方形型のそれは、遊星が付けていた物と同じだつた。

そう。それこそ欲望の力を解放する為のベルト——オーブドライブバー。

「……いいのかよ、アタシに渡して」

「知るか、俺は預かつた立場だ。伝言は受け取つてるが——手を伸ば

す為の力にして欲しい、だそうだ」

自分に備わっている力を渡す辺り、どうやら自分にこれを託そうとした主は相当のお人好しらしい、と杏子は苦笑した。

「しかし、お前の欲望の行き着く先は面白そうだ。受け取れ」

次に投げられた小型の物体を再びキャッチ。赤、黄、緑の三枚のメダルもまた、杏子にとっては見覚えのあるもの。

「これ……コアメダル、だったよな。いいのかよ?」

「ギブは嫌いだが、生憎そうも言ってもらえないからなあ。そっちは隠しとけ、奴に対しての切り札だ」

「奴?」

「……ふん。これ以上は言えん。使うべき相手を見定めろ」

吐き捨てられる様な台詞と共に、杏子の視界が歪み始める。奴、という言葉が気がかりだったが、目覚めようとしているなら仕方がないと割り切った。

「なあアンタ——名前は?」

「あ? ……アंकだ」

「じゃあアंक、感謝するよ。これの持ち主にもそう伝えといてよ」

そう語る杏子の表情は、確かに柔らかな笑みを浮かべており。佐倉杏子の意識は、現実へと引き戻されて行った。

杏子が去った後もその景色が消える事はない。残された男——アंकは苛立ちから舌打ちをしつつ、付近にあった手頃な岩に乱雑に座り込んだ。

「アंक、ありがとな」

「——映司」

そんな彼に声をかける者が一人。

どこからか現れた民族風の衣装を纏った男——映司と呼ばれた彼はアंकの横に座り込み、何処からか取り出したソーダバーを彼に差し出した。

アंकはそれを奪い取る様に受け取ると、味わうように舐め回す。

「はい、お礼のアイス」

「……間に合わなかったか。もう行っちゃったぞ、あいつ」

「仕方ないだろ、真木さんの意識を押し留めるのに苦戦してたんだから。俺しかやれる人がいなかったんだって」

「ふん。あいつ、大丈夫だと思うか？」

「大丈夫。あの子はもう、答えを見つけてるよ」

「……ま、お前がそういうならそうかもなあ」

心配する素振りも見せず、笑顔で答える映司に呆れた顔のアंक。しかし、そんなアंकを見て映司が堪えきれない様にして吹き出した。

「あ？ なんだ、そのおかしな顔は」

「いや、アंकが誰かを心配するなんて珍しいなーって」

「馬鹿が、誰が心配なんてしてるか。俺はただ——」

重ねようとした言葉を途中で止め、アイスも舐めずに映司の顔をジッと見つめるアंक。

普段見せる事のないアंकの様子に、どこか物珍しさを感じる映司。

「ん？ なんだよ」

「——いや、なんでもない」

しかし、一瞬後には普段通りにアイスに夢中になり始めた。

特段気にする様子もない映司を尻目に、アंकは口角を吊り上げた。

「ん……ようやく帰ってきたのか？」

二度目の目覚めでようやく現実に帰ってきたことに安堵した杏子。

——先程の事は夢だったのか。そんな考えが過ぎる杏子だが、いつの間にか何かを握っていることに気づく。手を開いてみれば、先程渡されたオーズドライバーが握られていた。

「……夢じゃない、か」

身体を起こし、先程遊星がやっていたものの見様見真似で腰にオーズドライバーを当てる。

すると、バックルの両側からベルトが展開。杏子の腰を包む様にして巻かれた。

「うわっ！… どんな技術だよこれ……」

瞬間、頭痛と共に杏子の脳内に幾つもの映像が流れる。

それは、手を伸ばし続けた男——火野映司が送った一年の戦いの物語。

仮面ライダーオーズ、火野映司の力は佐倉杏子に託された。

「!?……つたく、言っというて欲しかったよ……頭に來るんだね、これ」
多すぎる記憶に頭痛が走る杏子だが、それもすぐに治り、教えてくれなかったアंकに文句をいう。

杏子自身も正確に把握はしきれてはいないものの、火野映司という男が前の仮面ライダーオーズだったという事は何となく理解できた。

「——じゃあ、行くか」

そうして今に至る。

「杏子……!?!」

「お前、そのベルト——まさか」

雰囲気の違い杏子の様子にほむらは驚き、遊星もまた腰のオーズドライバーを見て動揺する。

『へえ、君もオーズに変身できるんだ？ 面白いけど、コンボでもなきや僕には勝てないんじゃないかな』

「コンボ……三枚同じ色のメダルか。丁度あるぜ」

左腰のメダルを収納していたスペースから、三枚。

アंकから渡されたものとは別の、赤いメダルを取り出すとカザリに見せるようにして構えた。

「おい、いきなりコンボは……!」

「悪リーが、手も抜けなさそうなんでね。危険だろうが何だろうが、やらせてもらおうよ」

『ふうん。随分自信があるんだ』

「——さあね」

『?』

「アタシはいつも通り、やりたい事をやるだけだ」

メダルを一枚、オーズドライバーに装填する。

どのメダルをどこに入れればいいかは、既に火野映司の記憶で確認済みだ。

『へえ。欲望に忠実なんだね、君』

「ああ、アタシはなにかを我慢した事はない。やりたい様にやってきた、ただのチンピラみたいなものだった」

また一枚、メダルを装填する。

佐倉杏子の理想は変われど、その芯にあるものは一切変わっていない。彼女はその時その時、やりたい事を貫き通してきた。

「だから決めた。もう迷わねえ」

最後の一枚を装填。右手で引き抜いたオースキャナーを胸の前に構え、宣言する。

その顔にもう迷いはない。何故なら、杏子は決めたからだ。

「考えてる間に、助けられる命が消えちまうなら——」

この手で掴める命が消えていくとするなら。

佐倉杏子は迷わない。迷う暇もない。たとえ記憶が偽物でも、作り物だったとしても。胸に抱くこの気持ちに嘘だなんて、絶対に言わない。

なぜなら、それが自分のやりたいことだから。

「持てる力で精一杯、相手を信じて手を伸ばしてやるよ！ 変身！」

『タカ！ クジャク！ コンドル！ タージャードルー！』

巨大なオーリングサークルが杏子の身体を包み込み、その姿を別のものにしていく。そうして現れるのは、クジャクの如き彩られた羽を広げた戦士。

「さあ——派手に行くよー」

変身者を変え、仮面ライダーオース タジャドルコンボがここに降臨した。

第九話 時空を超えて

『中々の力みたいだけど、果たして僕に勝てるかな?』

感心した素振りを見せつつも、カザリはタジャドルから迸る力に驚愕していた。普段のそれとは違う、とグリードとしての見地から感じたから。

一方、タジャドルに変身した杏子は、いつも通りの感覚で魔法を使用する。それに応じ、タジャドルの手に槍が出現した。

「この姿でも魔法は問題なく使えるってわけか——さて、いくぜ!」

『来なよ。君を倒し、そのメダルで僕はまた進化する!』

槍を構えたタジャドルが地面を蹴り、カザリに急接近。力強く槍を振るうが、カザリにそれを受け流される。

諦めずに追撃を計るが、乱舞とも言うべき怒涛の攻めをカザリは全て受け流すか避けるかして防いでいく。

『こんなものかい? じゃあ、今度はこっちの番かな!』

挑発も交えた言葉と共に、素早く放たれたカザリの突きがタジャドルを捉える。

見た目に反して重い一撃にタジャドルは怯んでしまい、その隙をついてカザリは反撃に出る。

「ぐっ……」

『ほらほらー!』

爪による引つ掻き、拳の一撃、回し蹴り——止むことのないカザリの攻撃に追い詰められていく。

しかし、追撃の拳が放たれた時、タジャドルは負けじとそれを掴んだ。

『!?!』

「舐めてんじゃ、ねえぞー!」

無理やり発破をかける事で、炎の様に燃え上がる闘志。

それに応じるように、突然タジャドルの持つ槍の先端が炎に包まれた。

「おらあー！」

更に鋭く重くなった槍の一撃が、回避行動を取ったカザリの左腕を掠めた。

『なっ………！』

すると、激痛と共に傷口を執拗に襲う感覚に襲われる。

カザリが傷口を確認すると、そこにはたしかに刻まれた深い傷を焼く炎、そしてそこから零れ落ちる銀色——否、黒く焦げたセルメダルが。

『なるほど、そういう力つてわけ……！』

すぐに炎は収まるものの、その傷痕は消えそうにもない程に爛れていた。

人間と違い、グリードとはメダルで構成された存在。時間をかければ完治するだろうが、戦闘に支障をきたすのは間違いない。

なにより、焦げているセルメダルの存在。

それはつまり——紫のメダルと同じく、他のメダルに害を及ぼせるという事ではないだろうか。

『……まともに受けるとやばいか』

身に起こった現象からそう判断するカザリは、タジャドルの槍を避けつつ後ろに下がる。

そして先ほど手に入れたメダル——ウヴァとメズールの力を用いて用意した、緑の雷撃と水流を同時に腕から発射する。

しかし、迫りくるそれらに対しタジャドルは羽を展開。全速力で上空に飛び上がる事で回避した。

『やるね。なら、これならどう？』

灰色のメダル——ガメル之力、重力操作。それを利用して上空のタジャドルを地上に引き戻すべく、腕から灰色の波動を放つ。

が、いつまでたつてもタジャドルに変化はない。変わらず上空を飛び回っているだけだ。

「……何かしたか？」

『くそ、まさかそこまでアंकのメダルとの適合が……!?!』

理由は不明だが、カザリに考えられるのはその一つしかなかった。

鳥系メダルとの過剰適合。それが本来よりタジャドルコンボの力を引き出し、それより力の弱い重力系メダルの影響を受け付けていないのではないか。

「考えてる余裕はないんじゃない？」

そうこうカザリが考えている内に、タジャドルは次の手を用意していた。

下を向いて考え込んでいたカザリが上空を見上げると、そこには何本もの槍を周りに浮かべるタジャドルが。

「マミのパクリみたいで癪だけど——くらいな！」

同じような手法を行う仲間を思い浮かべつつ、叫びと同時に槍が一斉に降り出す。

雨の如く降り注いでいくそれらに、カザリはなす術もなく飲み込まれていく。

巻き起こった土埃がその周囲を飲み込んでいった。

「——よし、これで」

『終わりと思った君の負けだよ』

「な」

グサリ、と。空中に浮遊するタジャドルの身体を後ろから貫くのは、彼女が持っていた槍。それを持っていたのはカザリだった。

降り注ぐ槍の雨に対して土埃を立てる事でやられたように見せかけると共に、降り注ぐ杏子の槍を一つ拝借。取り込んだバツタメダルの影響で能力が向上した脚力でジャンプし、無防備な背中を襲ったのだった。

抵抗をする暇も与えてもらえず、自身を貫いた凶刃に驚きを隠せないタジャドル。その傷口から真っ赤な糸を垂れ流し——

『な!?!』

カザリの目の前にいたタジャドルの身体は、赤い糸に変質しながら消えていく。

そして、赤い糸らは自身を貫いてきカザリに対し激しい動きで襲いかかってきた。

『くそっ！』

視界を埋め尽くす程の糸。

当然カザリに抵抗すら許してもらえず、あつという間に身体を糸で拘束される。当然足場もないカザリは、身動きも取れぬまま上空から仰向けに落下していく。

『うわああああっ?!』

グリードとはいえ、この状態ではただでは済まない程の高さ。何とか復帰を試みようとするカザリ。

しかし、突如驚きに満ちた表情を凍らせる。視界に映る空の彼方から、赤い影が近付いてきたからだ。

「セイヤアアアアアアアアアアアアアアアア!」

自身の魔法で分身を作り出して攻撃。

隠れて好機を伺っていたタジャドルは、炎を纏った足を変質させて蹴りを放った。

その速度はカザリが落下するよりも速く、どんどん彼の目前に迫ってきている。

『また、また消えるのか……?!』

回避も防御も、この状態では不可能。既に彼に残された時間が少ない事は明白。

残された数秒で、絶望に満ちた彼は思う。

——もう少しで、僕は更なる進化を遂げられたのに。

「くらいやがれええ!!」

『く、そ——!』

その願いも虚しく、カザリは空中で爆発四散し。

この世界に誕生したグリードの最後の一体は、再びその意識を闇に落としていった。

『ジャマヲサセルカ!』

「DVチェンジ、バルカンモード!」

ギエンが左腕を変形させると同時に、タイムファイヤーはスーツに表示された指示に従い、D Vデイフェンダーの側面にあるボタンを押し、再びギエンに向ける。

次の瞬間、両者の銃口から何発も放たれる銃弾とエネルギー弾が、両者の放ったそれらとぶつかり合った。

『ナラバ、コレヲクラエー!』

ラチがあかないと感じたのだろう。

両者が撃つのをやめたその瞬間、ギエンは次に口から光線を吐き出した。

が、咄嗟に回避したタイムファイヤーにそれが当たる事はない。

「接近戦は不慣れだけど——D Vチェンジ、デイフェンダーソード」

掛け声と共に、タイムファイヤーの持つD Vデイフェンダーが変形。長剣となったそれを構え、ギエン目掛けて斬りかかった。

「はっ—」

『ヌウ、オノレ!』

火花が散る。

拙さを残しながらも素人とは思えない剣捌きが雪崩の如く襲いかかり、反撃の機会も与えずにギエンの装甲を確実に削っていく。

『クラエー!』

更に怒り狂った様子のギエン。

至近距離から光線を放つが、咄嗟に見抜いたタイムファイヤーの剣によつて防御。

返しの一撃と言わんばかりの剣撃が彼を襲った。

『ガアア!?!』

なぜ剣を持った事のないホムラがここまで振るえるか。それには、滝沢直人が関わっていた。

「(どう扱えばいいか、記憶が教えてくれる……!)」

ホムラは確かに滝沢直人の力を受け継いだ。しかしそれに含まれているのは、彼の持つ力だけではない。彼の持つ力、経験、記憶がブイコマンダーと共に継承されていた。

つまり、タイムファイヤーとして戦ってきた直人の経験が今のホム

ラには備わっている。

それが道標の役割を果たしていた。

「DVチェンジ、ファイナルモード」

タイムファイヤーが持つ必殺の合図。

構えられたDVディフェンダーの刀身がエネルギーを収束し、青白い光を帯びる。

ギエンが再び銃口を向けようと腕を振り上げたその瞬間、銃弾が放たれるよりも速くその刃が彼の鋼鉄の身体を切り裂いた。

『バ、カナ……！』

「——DVリフレイザー」

呻き声と共に傷口から火花を散らしているギエンは、力なく倒れ込み。

ギエンに背を向け、思い出したかのように放たれる覇気のないタイムファイヤーの眩きの後、彼の身体は爆発した。

「……今度こそ、終わった」

DVディフェンダーの刃は確かに彼を捉えていた。今度こそ間違いなく倒れただろう。

そして立ち去ろうとしたその時、ほむらは背後から感じた気配に振り返った。

『マダ、ワタシハオワツテナイゾ!!』

そこに居たのは、倒したはずのギエンだった。

全身の傷口から煙を吹き出させ、尚も動き続けている。

「まだ動けるといふの……！」

『キサマアイテニ、コレヲツカウコトニナルトハナ！』

ギエンが見せつけるように取り出した掌サイズの容器。その中に収納された存在を見て、タイムファイヤーは表情を凍らせた。

その存在を忘れることはない。散々苦渋を舐めさせられた魔女なのだから。

「ワルプルギスの夜……!?!」

『サラニ、コレダ！』

続いて取り出したのは、紫のコアメダル——タイムファイヤーはそ

の存在を認識していないが。

一枚のセルメダルをギエンが体内に取り込むと、何十倍以上もの量になって出てきたセルメダル、ギエン、ワルプルギスが収納されたカプセル、そして紫のコアメダルを覆った。

「一体なにが……っ！」

目の前で起こる現象に首を傾げた次の瞬間、放たれた威圧感に身体が硬直した。

溢れ出すメダルを取り込み出てきたのは、それを醸し出す主——ギエン。だが、傷だらけだった全身は新品のように真新しいものになり、造形がこれまでとは別物になっていた。

全身を覆っていた筈の黄金色の金属は、黒っぽい燻った色の硬質な皮膚に代わり、手にあたる部位には義手のアームではなく人間の様に五本の指が生え、腕についた筋肉は剛腕とでも表現すべき立派なもの。

羽織っていたマントは、黒とも紫とも言えないおぞましい色をしており、まるで呪いをかき集めたかの様な色だった。

変わり果てたその姿はまるで生物的な——否。戦いに特化した姿である、とタイムファイヤーは感じる。

『この力だ。この力さえあれば!!』

「いくら姿が変わった所で——」

機械的な音声とは打って変わり、流暢に喋りだすギエン。

動かずとも感じる気迫は、先程とは比べ物にもならない。

DVリフレイザーを握る手が震えそうになるが、それを無理やり押し留め——次の瞬間、視界が揺れた。

「くっ……っ！」

『無駄だ、その風では上手く狙えんדרろう?』

突風によって吹き飛ばされた、と認識したのはその言葉によってだった。

射撃しようにも、絶え間なく揺れる視界と全身にかかる風圧の影響で、狙う所かそれを構えることすらままならない。

上空で無防備になったタイムファイヤーに向けてギエンが手を翳すと、サツカーボール程の火球が放たれ、タイムファイヤーに直撃する。

「ぎやつ!？」

短い悲鳴と共にタイムファイヤーは地面に叩き落とされ、その際に変身も強制的に解除される。

全身を焼く炎に落下の衝撃。絶え間なく与えられたダメージにスーツが限界を迎えるのも無理はなかった。

『どうだ、圧縮冷凍したワルプルギスの夜の力は!』

圧縮冷凍。聴き慣れない単語に疑問符を浮かべるホムラ。

だが、それに反応する様にホムラの脳内に一つの情報が浮かび上がる。

滝沢直人の記憶。その中に求めた答えは秘められていた。

「ロンダーズの囚人に使われた冷凍ガス……そんなものであいつを封じられたというの?」

『このギエン様の力にかかればお手の物、という事だ。奴らも来たようだな』

「——ホムラ!」

倒れ込んだホムラに向いていたギエンの視線が、背後に向けられる。そこに変身を解いた杏子とほむら、そしてよろめきながらも遊星が駆けつけた。

「あれ、さっきの金ピカと同じ奴なのか?」

「どうやら紫のメダルで変質したらしい。しかしこれは……!」

疑問符を浮かべる杏子の疑問に答える遊星。一見平静を装っている彼もまた、ギエンの内側から感じる得体の知れない力に僅かに目を見張る。

そしてほむらはといえば、身体を震えさせ酷く動揺していた。

彼女も分かってしまったからだ。新たなギエンから感じられる魔力が、かつての宿敵と同一のそれだという事に。

『気付いたようだな。お前が相手にしようとしてるこの力に』

ギエンが踵を鳴らす。

同時に、不気味なまでに風が止んだ。

「——逃げろ！」

『もう遅い』

遊星の必死な叫びも虚しく木霊するだけに終わり。

ギエンを中心に巻き起こった竜巻が、一同を飲み込んだ。

「——つ、く」

『生き残ったか。そうではなくてはな』

立ち上がった遊星の体は、傷だらけだった。

「まだよ、まだ終われない……！」

それはほむらも同じことだ。

全身から血を流し、しかし何とか気力を振り絞っている。

そんなほむらの姿を見て、ギエンは鼻で笑う

『愚かな奴だ。この時間の歴史をこのままにすれば、あの女が消えるというのに』

この時間をこのまま存続させるなら、鹿目まどかは消失する。

ほむらが悲しみを背負うという歴史は変わらないのだ。

「っ——それでも！」

甘い妄言を切り捨て、ギエンに弓を向ける。

暁美ほむらはまどかのいる世界を守ると誓った。たとえ彼女が何を望もうが、自分はそれを尊重する。

その筈だ、と。ほむらは心に強く言い聞かせ。

「ほむらちゃん！」

この場にいるはずのない人物の声に、思わず振り返った。

そこにいたのは他でもない。ほむらが戦う理由そのものである、まどかだった。

「まどか、何故ここに……！」

『僕が連れてきたのさ』

まどかの後ろから姿を現した白き生物。

それは杏子達もよく知る存在。

誰よりも早く、ホムラがその名を叫んだ。

「——インキュベーター！」

『厳密には初めましてになるのかな、 暁美ほむら』

インキュベーター改め、キュウベえはまどかから事情を聞いたのだろう。

もう一人いる「暁美ほむら」に過度に反応する事なく、あくまで役目を果たすべくまどかに話しかけた。

『さて、 鹿目まどか。今この時、二人の暁美ほむらは危機に陥っている。けど、この状況をひっくり返せるだけの力が君にはある。君が望めば、神に等しい力だつて手に入るだろうね。』

——さあ、 鹿目まどか。君はどんな祈りでその魂を輝かせる？』
問われるまどかの顔は、真っ直ぐとキュウベえを向いている。

高鳴る鼓動を抑え、深呼吸をして一言。

「キュウベえ、ごめん。私、契約できない」

『なんだつて？』

予想外の答え。

キュウベえが、ほむらが、ギエンが。

その場にいる全員の視線がまどかに向けられた。

「遠くて誰もいない世界。そこに行っちゃった私は、絶望を抱いた皆を救う代わりに一人の女の子を悲しませてた」

全ての魔女を生まれる前に消し去りたい。

その願いならば、きつと絶望で終わるしかなかった魔法少女を救える。

そう信じていた。それに間違いはないのだろう。

しかし、 鹿目まどかは知ってしまった。

「暁美ほむら」が抱えてしまった孤独を。

自分だけが抱えるはずだった孤独を、誰かにも感じさせていたのだ。

「その子を救うことは」「この私」には出来ないけど……でも、それでも

ほむらちゃんを救うことはできる。

——ごめん、私は魔法少女にならない。ううん、なれない」
ならば、まどかはその選択をする事はできない。

正しいか、間違っているかなんて関係ない。

目の前の友達の為なら、思いきり動く。

それが鹿目まどかという少女が持つ強さなのだから。

「まどか……」

だがこの場で一人。

ギエンだけが、その口元をこれ以上ない程に歪ませていた。

『——馬鹿な女だ。貴様のおかげで世界は破滅するというのに』

「え……う？」

辺りを見回すと、付近にあるものが徐々に粒子となり消えていつて
いる。

それは物だけではない。その場にいたまどかやホムラ、遊星達にま
で影響は及んでいた。

「これは……!?!」

『貴様が契約しないのなら、本来の歴史は崩れたも同然！ 本来の筋
書き通りに世界は破滅するのだ！ ヒヤハハハハハハハハ!!』

突如、空から降り注ぐ白き光。

良くない事を示唆していることは明白だとしても、抵抗する術は無
く。

世界は白一色に染まっていった。

「……え？」

怯えていたまどかが、恐る恐る目を見開く。

消されていったはずの世界は元通り——といっても、建物は壊れて
いるが——になり、ギエンやほむら達の立ち位置も何ら変わってな
い。

『馬鹿な——どういう事だ!? 何故歴史が復元した!?!』

「歴史……ああ、そういうことか」

そんな中。

遊星は引つかかっていた謎に合点が行き、納得した様な声を上げた。

「ようやく合点があった。この世界は別の世界なんかじゃない、別の時間軸というのが正しいらしいな。」

「こっちの暁美ほむら。お前はここの事を知っているんだな?」

「……ええ、あなたが思う以上には」

意図は察せないが、嘘を吐くことでもない。

訝しげなほむらが頷く。

「やはりな——暁美ほむら。お前は特異点という存在らしい」

「特異点?」

「歴史改変に左右されない奴等の呼称だ。そして、改変の際にはその記憶を支点とした歴史の修復も行われる。」

特異点であるお前によってこの時間は認識されていた。だからこそ、本来ありえない——時の分岐から外れたこの時間は存続し、修復が発生した」

特異点という言葉に疑問は残るが、同時に納得もしたほむら。

そもそも、この世界は本来ならば既に消え去った時間の筈。そこに来れた、という事には確かに不思議な話だった。

『馬鹿な……馬鹿な!! 特異点だと? 何なのだそれは!?!』

「知らないのは当たり前だ。そんな概念、お前の世界の法則にはなかったからな」

ギエンの知る——いわば「タイムレンジャーの歴史」にそんなものは存在しない。特異点とは、彼の知らない「電王の歴史」にある概念なのだから。

だとしても、ギエンの計画が根底から崩れていた、という事実は変わらない。

「人の記憶の積み重ねこそが時間となり、それは人を支える希望にもなる。」

時間の破壊しか頭にないお前に、その時間に込められた想いまで砕く事はできないよ」

ほむらにとつて、その説明は半分以上理解できないもの。

しかし、ただ一つ理解できるのは。

「それじゃあ、まどかは……！」

「歴史の破壊を乗り越え、ここはどの時間とも独立した時間軸になった。

本来の出来事とどうかけ離れようが、何かが起きる事はないだろうな」

自分が覚えていたという事実が。

失われたはずの時間に、奇跡をもたらしたという事。

たとえ違う世界だとしても、鹿目まどかを守る事が出来た。

どうしようもなく溢れ出す想いが、ほむらの頬に涙を伝わせた。

「泣いてるのか?」

「——何のことかしら。泣いてる暇なんてない、私にはまだやるべき事がある」

袖で拭い、ギエンを睨みつける。

この歴史は存続していけるとしても、ギエンを倒さなければ全ての水の泡だ。

そして、もう一人の暁美ホムラもまた立ち上がる。

「説明は何となく理解できたわ。あいつを倒せば、私の願いは叶う……！」

既にホムラの体力は限界に達しており、息も絶え絶えだ。

しかし、気力だけで彼女はここに立っている。

辿り着けた世界を救うために、ここで倒れるわけにはいかないからだ。

「よく分からねーけどさ。ここでアイツを倒さなきゃ、ヤバい事が起きるって事は分かる。

放っておけるかよ、そんなの」

メダルを手に、杏子もまた二人と並び立つ。

「これでお前の計画は水の泡だ。

暁美ほむらをこの時間に連れてきた時点で、この結末は決まっていたんだよ」

『そんな——そんな事あるわけがない!! 暁美ほむらによる歴史改変がそもそも無意味だど!?!』

「奴め、私を騙したというのか!!」

「魔女とかいう存在に、それを圧縮冷凍できる技術。蘇生されたグリード達。」

「どれもお前じゃ用意できないシロモノとは思っていた。何か入れ知恵されたか」

『』

「フツ、と。」

「それまで噴出していた感情が収まり、気味が悪い程に沈黙するギエーン。」

「それはまるで、嵐の前の静けさのようにも感じられる。」

『——ハカイ、ハカイハカイハカイイイイイ!!』

「そして次の瞬間、カツと目と口を見開き、病的なまでの叫びを響かせる。」

「理性を失っているのは、誰が見ても明らかだった。」

「理性を失い暴走——今ならやれるか?」

「つたく、後先考えずに怒らせやがって」

「でも、チャンスなのは間違いないわね。まだ立てるかしら、暁美ホーム」

「——ええ、当然よ。まどかが生きるこの世界を、破壊させたりなんかさせない!」

「唯一、その災害に立ち向かえる四人。」

「それぞれが得物や変身アイテムを構えようとしている中、遊星の身体が唐突によろめいた。」

「つと——多少は回復したらしいが、まだ疲れてるらしいな」

「ちよつと、あんたは下がってなよ。あたしただで何とかやるからさ」

「それはできない。俺には奴と戦わないといけない理由がある」

「……ま、いっけぢや」

遊星の意思は確固たるもの。

折るのは困難だと判断した杏子はギエンに向き直り、メダルをオーズドライバーに装填。

ホムラはブイコマンダーを口元に構え、遊星は携帯型のアイテム——シヨドウフオンを筆の様に構え、唯一この場で変身しないほむらは弓を構えた。

「変身」

『タカ！ クジャク！ コンドル！』

「タイムファイヤー！」

「シヨドウフオン、一筆奏上」

杏子はオースキャナーでメダルを読み込み。

ホムラは高らかにその名を叫び。

遊星はシヨドウフオンを用いて空中に「火」という字を書く。

一同を包む赤い炎。

それが振り払われた時、彼らの変身は完了していた。

揃い立ったのは、本来交わる筈もない炎の戦士達。

欲望に従い、他人に手を伸ばし続ける戦士。

仮面ライダーオーズ タジャドルコンボ。

今を守るために力を求めた戦士。

タイムファイヤー。

そして、新たに現れた赤き勇者。

シンケンレッド。

『ハハ——ハハハハ!!』

眼下にそびえ立つ戦士達を見てゲラゲラ、とギエンは下卑た笑い声を上げる。

そして、ギエンが身体から紫の波動を周囲に放つ。

瞬間、その一带に暴風が巻き起こった。

「避けるー」

その動作を既に知っていた一同は、慌てることなく散開。飛んでくる瓦礫や火球に應對しつつも、無傷でやり過ごす。

そんな中、シンケンレッドが動いた。

「——参る！」

「っ、おい！」

タジャドルの静止も聞かずに地面を蹴り、目のギエンと肉薄するシンケンレッド。

ギエンが拳を放とうとするも、構えられた刃がそれより速く装甲を切り裂く。

しかし、動作に怯みを見せる事はない。

「なに？」

『ハハハハッ！』

そのまま振り抜かれる拳。

行動し終わったばかりのシンケンレッドにそれを避ける術はなく、紫の波動を帯びた突きが彼の胸部に叩きつけられた。

「か、はっ——！」

肺の空気が全て抜けた、とまで錯覚してしまう程の衝撃。

思わず胸を抑えたシンケンレッド。放たれる二打目の蹴りは、しかし彼を捉える事はなかった。

シンケンレッドの身体に巻きついた鎖が、彼を無理やり後方に引きずり戻したからである。

「よっ、と。ったく、手間かけさせやがって」

「お前……」

鎖の主はタジャドルだった。

しかしギエンは諦める素振りを見せず、標的と定めた遊星目掛けて飛びかかろうとする。

「DVチェンジ、バルカンモード」

降り注ぐ光弾の嵐を捕捉したギエンは、足元から生成した氷の壁で自身の周囲を囲う。

タイムファイヤーの弾幕がギエンを釘付けにしてる最中、タジャドルがポツリとシンケンレッドに話しかける。

「なに考えてるのかは知らないけどさ、あんまり一人で抱え込むのはよくないんじゃない？」

「……」

呆れた様子のタジヤドルに、シンケンレッドは返す言葉もない、といった様子で顔を背ける。

「今のアンタに似た目をしてる奴を思い出した——昔の自分自身だ。そりや気に入らねーわけだ。同族嫌悪なんて事をしてたんだからな」

ハハ、と渴いた笑い声。

呆れ果てた様にも感じられる感情は、遊星に向けられたものではない。

他でもない彼女自身を笑っていたものだった。

「アタシは空っぽの中身を補う為、欲望のままに生きる事で自分を満たそうとした。アンタもそうなんじゃないの？」

自分のやりたい事。それに向けて、必死に走っている——違う？」沈黙を貫く遊星。が、その言葉を聞いた時、一瞬体が硬直していた。その反応を見てか、杏子は立ち上がろうとした遊星に手を差し伸べる。

「深くは聞かない。ただ、そんなアンタの事を信じてみることにした。

「ただ、精一杯この手を伸ばしてやるよ」

「――」

差し伸べられた手。

それを反射的に取ろうとして、一瞬躊躇し。

しかし、少し迷った後に遊星はその手を取り立ち上がる。

「助かる。行くぞ、佐倉！」

「ああ！」

二人が並び立つのと、攻撃が止みギエンが氷の壁を解除するのはほぼ同時。

襲いかかってきたギエンに、二人は互いの得物に炎を纏わせ構えた。

「――火炎の舞！」

再び前に出たのはシンケンレッド。炎を纏わせたシンケンマルの刃が、振りかぶったギエンの拳と交差する。

いくら強化されたギエンといえど、対するは人の世を侵す妖を払う一撃。

威力を相殺するだけなら十分だった。

「はああああ!!」

タジャドルが死角に回り込み、突進。

魔力を変換した炎が槍に纏われ、ギエンの胴体を貫いた。

『ハハハハ!!』

「っ、化け物かよー」

しかしギエンは変わらず甲高い笑い声を上げる。

それどころか空いた手で突き刺さった槍を引き抜くと、乱暴に振り回してタジャドルの装甲を切り裂く。

「ぐっ?!」

「佐倉!」

引き抜かれた傷痕からは火花が飛び散るが、まるで気にせず標的と定めたシンケンレッドの方のみを向いている。

そう、まるで傷自体を認識していないかの様に。

「痛みを感じる理性すらないって事か……!」

余裕のない声で呟くシンケンレッド。

単純なスペック差に加え、擬似的な無痛の身体。技量だけではどう頑張っても埋めきれない現状。

だが、それを覆せる手段がシンケンレッドにはある。

「あれならいけるか——ッ!!」

次の瞬間。

シンケンレッドの脳内に警鐘が鳴った時には、既に彼の刀は弾き飛ばされていた。

「こいつー」

後方に跳んだシンケンレッドだが、それよりも速くギエンが迫ってきている。

しかし、それだけならば打つ手はある。

「二筆奏上!」

叫びと共に、シンケンレッドの色が変化する。

ギエンの目前にいるそれは、先程までとの真つ赤な姿とは対照的な青き戦士。

頭部に「水」を模したその戦士こそ、シンケンブルー。

「ウォーターアロー！」

弓から撃ち放たれる矢が青い閃光となり、迫るギエンの身体を貫く。

無論先程までと同じく怯む様子は見られない。

強いて言えば、その勢いが僅かに削がれた程だろう。

「――よし、今だ！」

それはタジヤドルでもタイムファイヤーでもなく、上空にいるほむらに向けてのもの。

直後、ギエンの頭上に降り注ぐ矢の雨。危険と判断して再び氷の壁をドーム状に展開するも、間に合わず一部の矢はギエンの体を貫いていく。

しかし、一向に弱る様子は見せなかった。

後方に下がったシンケンブルーは、地上に降りたほむらやタイムファイヤー達と合流する。

「悪い、助かった」

「気にしなくていいわ。それより、あいつの事よ」

ほむらの目線がギエンに向けられる。

氷壁を解除し、しかしシンケンレッドを追うわけでもなくその場に立ち尽くしていた。

「……動かないな。射程範囲から出たからか？」

「まったくよ、変な所で機械らしいつつーか。このまま遠くから攻撃すれば……流石に反応するか」

「ただ、傷が治るわけじゃないらしいわね」

ホムラの指摘。

確かに、ギエンの身体にある傷はその全てが修復されていない。

「なら、全員で叩き込めばいける……のか？」

「あの反則みたいな力相手じゃ、正面からは難しいでしょうね。方法を考えないと――」

「俺ならいける」

唐突にシンケンブルーが手を上げ、全員の視線が集中した。

「奴に隙を作る役回り、俺なら手段がある。」

「この中で一番余裕もあるしな」

「それ、本当？」

「ああ。奴の力の弱点も見えた。」

ただ、チャンスは一度きり。成功したとしても、俺はそれ以降は動けなくなる」

「動けなくなる？」

「……まあ、その時になれば分かる」

不明瞭な点が多い提案に思案するほむら。

あまり受けたくないものはある。

しかし、連戦による疲労は無視できず、余力が一番残っているのが遊星だというのもまた事実。

——尤も、彼の言う事を信じるなら、だが。

ともかく、今出ている情報を重ね合わせ、考え込み。

仕方がない、とほむらは首を縦に振った。

静止しているギエン。それにシンケンブルーが近付きながら喋りかける。

「これ以上、この世界に迷惑をかける訳にはいかない。俺が相手だ。」

——お前の弱点も何となく分かった」

その言葉を最後に、シンケンブルーは再び駆ける。

そんな事も構わず、反応したギエンは依然として笑いながら掌を構え、そこから火球を飛ばした。

『ハ——ハハハハッ!!』

「二筆奏上——大木晩成！」

シンケンブルーの姿がまた変わる。

青から緑——シンケングリーンに変身した遊星が、穂先に緑色の光が帯びた槍で火球を薙ぎ払った。

『ハハハッハッハ——！！』

途端、巻き上がる旋風。

ギエンが手を翳すだけで出来上がったそれは、向かってくるシンケングリーンに容赦なく襲いかかってくる。

「一筆奏上——迫力満天！」

緑から桃——シンケンピンクへと変わった遊星が、手にした扇を仰ぐ。

巻き起こされた風が真空の刃と化し、ギエンの竜巻とぶつかり合った。

『ハハハハ！！』

ギエンはその笑い声を更に大きくする。ゲラゲラと、まるで面白いものを見ているかのように。

そして、弱まった竜巻を突き破ったシンケンピンク——否、新たに変身したシンケンイエローがギエンに迫る。

「奮闘土方！」

走りながら大型の手裏剣をfrisビーの如く投げつけるシンケンイエロー。

しかし、向かってくるそれを避けるのは、ギエンにとっては容易い事。

僅かにギエンが体幹をズラすと、回転を続けながら迫ってきていた手裏剣は紙一重の所で避けられた。

『ハハハハハ——』

「シンケンマル！」

目前の敵を前にして、未だ笑いを収める事のないギエン。

それに臆する事なく、先程変身していた姿——シンケンレッドに戻ると、ギエン目掛けて飛びかかってきた。

が、不意を打ったものでもないそれは、容易に反応できる。

落ちて着いて右腕を突き出し——突然その体のバランスを崩した。

『ハハハハハ——？』

見れば、その足に突き刺さっているものがある。

先程避けたはずのランドスライサーだ。

ギエンには知る由もないが、ランドスライサーはいわばブーメランの様な武器。

計算して投げられたそれは、ギエンに避けられ、しかし死角となっている背後から足に直撃していた。

『ハハハ——!?!』

体勢を立て直そうとするギエン。

が、次の瞬間、その全身に紫色の電流が流れた。

シンケンレッドは何もしていない。

それは、ギエン自身に要因があるものだった。

「やはりな、過ぎた力に肉体や精神の方が耐えられてない。

負担がでかい紫のコアメダルに、そんな大きさの魔力を抱えてるんだ。いつかは限界が来ると思っていた」

加えて、ギエンが心を取り乱す事がなければ、ここまでの事にはなっていないかった。

むしろやられていたのはこちらだろう、とも確信している。

「自分の丈に合わない力に翻弄される——俺と同じなんだよ、お前は」

『スーパーディスク』

シンケンレッドが構えた印籠を模したアイテム——インロウマルが音声を鳴らす。

同時に、変身完了もしないままシンケンレッドが飛び出した。

「行くぞ」

インロウマルの前面に示された「真」という文字から白い陣羽織が飛び出し、駆けるシンケンレッドに纏われていく。

シンケンジャーに与えられた更なる力。

スーパーシンケンレッドが、インロウマルを装着したシンケンマルを両手で構えた。

「真・火炎の舞!」

更に燃え盛る炎がシンケンマルの刀身に纏われ、スーパーシンケンレッドがそれを振り下ろす。

彼の剣を阻むものは何もない。

硬質な装甲が切り裂かれ、焼き払われ、返しの刃もまた問題なく叩

き込まれる。

『ハハ……ハハハ……!?!』

同時に、確かに聞こえたギエンの悲鳴。

初めて見られた反応は、確かにダメージに繋がる一撃だと確信させ。

しかし、突如そこでスーパーシンケンレッドが変身を解除する。

「え?」

「……」

次の瞬間、遊星はその場に倒れ込んだ。

敵を目前として、ピクリとも動く様子はなく声も聞こえない。

一体どういう事かと困惑する一同だが、そこで遊星の言葉を思い出す。

「こういう意味……!」

一番早く事情を理解したほむらが翼をはためかせる。

向かう先は遊星——の身体を通り越し、ギエンに迫る。

無論、見捨てたわけではない。しかし、彼が予めこうなる事を覚悟して力を使ったのは明白。

「彼の作ったチャンス、絶対に無駄にさせない!」

迫るほむらに対し、ギエンはまだよろめいていた。

その笑い声は止み、ただ傷を抑えて呻いている。

「——ここで決める!」

生成した矢にありつただけの魔力を込め、弓につがえる。展開された翼を通し、矢に収束していく禍々しい魔力。

ギエンを打ち倒すべく、その矢が放たれた。

極太の光線となった矢は、抵抗させる間も無くギエンを飲み込む。

『ハ——ハハ——!!』

しかし、まだ終わらない。

バチ、バチと全身から火花とセルメダルを散らしつつも、確かに立っていた。

ほむらが第二射を用意しようにも、今の一撃で既に魔力は尽きてい
る。

「くっ、まだ生きている……!」

「ハハハハハ——!!!」

ギエンが叫ぶ。咆哮が轟き、呼応するかの様に風が吹き荒んだ。

地面に散らばっていたセルメダルは吹き飛ばされ——飛ばされな
い様に踏ん張っていた、ほむらの体内に吸い込まれていく。

「え——?」

体内に感じる違和感。

何かが入ってきた、という感覚に気を取られた彼女は、目の前のギ
エンが迫ってきているという事に気づかなかった。

「ほむら!!」

自身の名を呼ばれ、ようやく今の状況を理解したほむらは慌てて後
方に回避。

一瞬遅れ、ギエンの振りかぶった拳がほむらの居た場所を通過し
た。

「今のは……?」

「ハハ——!!」

「下がれ!」

『スキヤニングチャージ!』

オースキヤナーを構えたタジャドルが上空から声をかける。

ほむらがギエンとの距離を更にとると、真紅の炎を纏ったタジャド
ルが上空から高速で降下する。

しかし、それは一人だけではない。

今蹴りを放っているタジャドルの左右に、もう二人。

魔法によって生み出された分身がいた。

「「セイヤアアアア!!」」

溢れ出す真紅の炎が混じり合い、より大きなものとなってギエンに
向かっていく。

しかし、ギエンも負けてはいない。タジャドルとの間に大きな竜巻
を発生させた。

そうして衝突する二つの攻撃。どちらが押し負けるわけでもなく、ただ互いに力をぶつけ合っている状態だ。

「くっ！」

タジャドルが持ちうる最大の攻撃。

それに魔法を掛け合わせた一撃だというのに、拮抗している現状。しかし、逆に言えば負けてはいない。

「はああああっ!!」

体の芯から絞り出す奮起の雄叫び。纏う炎が膨れ上がっていく。それらは互いに混じり合い、一つの形となっていく。

翼をはためかせ、際限なく増大する炎を宿す姿は宛ら不死鳥の如く。

それは、ここで「負けたくない」という杏子の想い——否、欲望そのもの。

それらが込められた蹴りは台風を破り、ギエンをも貫いた。

『ハハハ……ハハハハハ……!』

しかし、まだギエンは止まらない。ひたすらに笑い、目の前の状況を楽しんでいる。

何に対して笑っているかも分からないその姿は、哀れにも思えた。

「今だ、決めろ！」

「ええ」

ギエンにとつての処刑人。

タイムファイヤーが、ゆっくりと近づいて来る。

「これで終わりよ。DVチェンジ、ファイナルモード」

「……ハハ、ハハハハハ!!」

光を帯びる刀身。

それが意味するものを思い出したか、止めるためにギエンが飛びかかる。

勝負は一瞬。この一太刀で全てが決する。

タイムファイヤー目掛けて迫る拳。

しかし、振り上げられた剣がそれを弾く。

その勢いのままギエンの横を通り過ぎ、すれ違い様に一閃。

「――DVリフレイザー」

振り返り、更に二撃。

Xの字を描く斬撃がギエンを襲う。

「ハハハ――ハハ、ハ……」

最早限界を迎えたのだろう。

その笑い声は徐々に弱まり、やがてギエンはボタンと倒れ。

その場からゆっくりと去るタイムファイヤーを背に、爆散した。

「――終わった」

感無量。変身を解除したホムラの心境はそれに尽きる。

長い、とても長い旅。異邦人の助けもあり、ようやくその終止符を打つことが出来たのだ。

ホムラがその達成感を噛み締めている中、その後ろにいた杏子はある疑問を思い出しほむらにコソコソと尋ねる。

「なあ、どうしてこの時間の事を知ってたんだよ？」

「……話せば長くなる。ゆっくり時間を取って語ってあげるわ」

「彼はまだ気絶してるみたいだけれど……佐倉杏子、そして暁美ほむら。感謝するわ」

二人に向き直り、心からの感謝を述べるホムラ。

「ま、ハッピーエンドで終わって何よりなんじゃねーの？」

「ええ、これ以上の結末なんてあるわけない。あつてもそれは――」

『せっかく願い事を決めたというのに、それを叶えないなんてね』

「……インキュベーター」

『でも、この惨状をどうするつもりだい？』

「――直すだろ、この街の人間が」

キュウベエの言葉に反応したのは、いつのまにか起き上がったいた遊星だった。

澄ました表情をしているが、疲労が重なっている様子が一目で分か

るほどにグツタリしている。

「アンタ、いつの間に」

「さっきだ。それよりも……あつたあつた、これだ」

バラバラに分解されていたギエンの残骸を漁る遊星。

その中から目当てのものを取り出し、ほむらに見せつけた。

「——ワルプルギスの夜!」

それは、縮小化したワルプルギスの夜。

フィギュアの様にも見えるが、その恐ろしさを知っているほむらにとっては安心できない。

「圧縮冷凍されているから心配はない。俺が責任を持って処分しておう」

ようやく一段落か、と遊星は肩の荷を下ろす。

そんな遊星に近付いたキュウベえは「へえ」と感心するような素振りを見せる。

『これは驚いた。君の中に秘められた資質に比べれば、鹿目まどかすら赤子に見える。君が契約してくれば、全て解決するんだけだなあ』

「興味ない。他を当たれ」

シツシツ、と手でキュウベえを追い払う遊星。

しかし、さりげなく聞こえた情報がほむらを驚愕させた。

「待ちなさい。まどかより大きな素質ですって?」

『やあ、別の世界の暁美ほむら。君の世界——というより時間軸では、鹿目まどかが契約したんだろう?』

「そんな事はどうでもいい。それは本当なの?」

『本当だよ、まさか彼のような人間が存在するなんてね』

キュウベえと契約出来るのは基本的に女性のみ。

そこにいかなるルールがあるのかは知らないが——少なくとも、門矢遊星はキュウベえのお眼鏡に叶う条件は満たしている、という事だ。

『それより、君の話を聞かせてもらいたいな。君の時間では、一体どういう状況になっているのか』

「消えなさい、今すぐに」

変身し、弓を構えるほむら。

下手に機体を破壊されては堪らない、と判断したのかキュウベえはそそくさと退散しどこかに去っていった。

「そういえば——これ、返さなきゃいけないわね」

「ああ、アタシも」

思い出したかのように、ほむらと杏子はブイコマンダーとオーズドライバーを遊星に差し出す。

それを手に取り、少し考えた後に遊星がそれぞれに再び手渡した。

「いや、お前たちが持つておけ」

「え？ でも」

「浅見竜也と滝沢直人、火野映司はお前達を選んだ。今更渡されようが、使えない俺が持つ意味もない」

語りながら、自嘲気味に笑う遊星。

一方で、ほむらは遊星の発した竜也という単語に反応する。

「彼は生きているの？」

「……ああ、一応。話せはしないがな」

「そう……生きてるならそれでいいわ」

嘘である。

本当は伝えたかった。あなたのかけてくれた言葉が、自分の救いになったと。

しかし、ほむらは笑みを浮かべてそれを飲み込んだ。

今を生きていけば、きつと交わる時が来る。その時に伝えればいい。

たとえばそれが来なくとも、彼は彼の未来を歩んでいく。

それでいいのだ、と納得するほむら。

「これはあなたに託すわ」

「……私に？」

ならば、と。

代わりにブイコマンダーを差し出した相手は、ほむらだった。

「それでいいの?」

たしかにワルプルギスの夜は過ぎた。

しかし、それはホムラの時間停止の魔法も消えてなくなったことも意味している。

弓という武装を持つほむらより、時間停止の使えなくなったホムラが持つべき力ともいえる。

「欲しかったものは手に入ったわ。後は、自分の力で守ってみせる」

自分の欲しかったもの——まどかの笑える世界は手に入れた。ならば、無理にその力に執着すること意味もない。

それがホムラの選択だった。

「……私に使えるかしら、その力」

「使えるわ。あなたは私なのだから」

経緯はどうあれ、彼女もまた暁美ほむら。

かつて力を求めた自分ならきつと彼も許してくれるだろう、と確信しているホムラ。

「……そう、なら使わせてもらおうわ」

そこまで言われるなら、と恐る恐るほむらはブイコマンダーを手に取り。

瞬間、走馬灯の様に情報が脳裏を駆け巡る。

それは、ただひたすらに力への渴望を元に動いてきた男——滝沢直人の記憶。

力を追い求め、その果てに運命という大きな力に敗北した人生。

——お前は変えてみせろ。

彼の遺した最後の言葉が、ほむらの中を反響する。

まるで、自分に言われているかの様に。

「——さて、そろそろ帰るとするか。あっちにいるから、別れを済ませ
ておけ」

「ええ……その、まどか。会えて良かったわ」

「うん。あなたの知ってる私も、会えるのを楽しみにしてると思う。」

助けてくれてありがとう、ほむらちゃん」

精一杯の感謝と共に、微笑むまどか。

それを見た曉美ほむらは、その笑顔を改めて胸に焼き付けた。もうなにかあったとしても、絶対に挫けない。そう誓う為に。

そんな中、その場で唯一余所余所しくしていた杏子がまどかに話しかけた。

「……鹿目まどか、だったか?」

「う、うん、杏子ちゃん」

「知らねー相手に名前知られてるって調子狂うな……その、なんだ。

アンタ、アタシがどうやって死んだか知ってるだろ」

「っ……」

魔女となったさやかを助けに行った。

出会ったばかりのホムラがそう語った時に、まどかという単語が出てきていたのを杏子は覚えていた。

当の本人であるまどかは動揺する。

それが起きたのはつい最近。まだ記憶にも新しいその出来事が思い起こされ、まどかの表情が暗く沈んだ。

「……悪い。ただ知りたかったんだ、この世界のアタシがどんな想いでさやかを助けに行ったのか」

「ううん、平気……私の知ってる杏子ちゃんは、さやかちゃんを助けてくて頑張ってた。最後には愛と勇気が勝つんだ、って」

「そっ、か」

きつと、形は違えど同じだった。

一人は、誰も見捨てたくないという欲望の下に。

もう一人は、残った希望を失いたくないという願いの下に。

佐倉杏子は、必死に手を伸ばし続けた。

やはりここにいた自分もたしかに自分だったのだ。

「そいつが聞ければ十分だよ、悪かった——ありがとな」

「うん。杏子ちゃんも、元気で」

感謝の言葉と共に、杏子はまどかに背を向け遊星の元へ向かう。

——最後に。

二人の「暁美ほむら」が向き合っていた。

左右対称の鏡を見せられているかの様な光景。

しかし、相手が自分だからこそ言葉は最低限でいい。

「暁美ホムラ。絶対にまどかを守り抜きなさい」

「当然よ。あなたも、あなたのまどかと会える日まで頑張りなさい」

それだけで充分想いは伝わるからだ。

そこから先は、それぞれが紡いでいく未来。

過度な干渉は必要ないし、逆に邪魔にもなり得るだけだ。

そうして、同時に背中を向け合った二人はそれぞれの仲間の側に歩いていく。

「さて、帰るぞ」

遊星が指をパチン、と鳴らすと銀色のオーロラが現れ、遊星、杏子と次々にその中に入る。

そして、最後にほむらが入ろうとしたその時。

溢れる想いが抑えられず、突然まどかの方を振り返った。

「いつか、未来で」

そう言い残し、ほむらもまた銀色のオーロラに入って行き。

オーロラが消えた所で、他の世界から来た漂流者は全ていなくなつた。

「いつか未来で、かあ。あつちのほむらちゃん、私に会えるといいな」

「会えるわよ。あなたがそういうシステムにしたらしいし」

「……そっか、そうだよね」

他愛ない会話。

それすらも楽しめるようになったその時間で、二人は生きていく。

魔女のシステムは変わっていない。

魔女だって変わらず現れるだろう。

しかし、それでも。

そんなやるせない世界の中で、二人は生きていく。

きつと、その先に未来があると信じて。

オーロラの先。

そこは、いつもの見慣れた街並みが広がって——いない。
緑のない砂漠が一面に広がっていた。

「ここは？」

「時の砂漠という空間だ。待ってれば迎えが来る」

「ふーん。さっきのじゃ元の時間には移動できないわけ？」

「世界ならともかく、時間は無理だ。俺にそこまでの力はない」
しかし、門矢士なら或いは。

聞き慣れない名前——と言っても名字は彼と同じだが——を溢しながらも、何かを待つ遊星。

そんな彼を出迎える様に、突然大きな音が鳴り響いた。

「来たか」

「……これは、汽笛？」

電車の汽笛の様に聞こえる音。

それを鳴り響かせながら、遠くから迫る物体があった。

新幹線にも見えるそれは、砂漠の上に独りでに敷かれていくレールの上を通っている。

「

「デンライナー。時の運行を守る電車……だったものだ」

「だった？」

「今はその役目もない、ただのタイムマシンになっている」

デンライナーと呼ばれるその電車は、ゆっくりと速度を落として遊星達の前に停車する。

その車両の一つ。丁度彼らの目の前にある車両の扉が開き、そこから年配の男が顔を覗かせた。

紳士風の装いをした男は一同の顔を確認すると、遊星を見て視線が止まる。

「おや、あなたでしたか」

「……むしろ誰だと思った。デンライナーを知るのは俺しかないだ

ろ」

呆れた様子の遊星に対し、男はわざとらしい態度で接する。

二人が知己同士である事は伝わったが、それ以上はほむら達には分からなかった。

「用件は分かっている筈だ。元の時間に帰りたい」

「ふーむ……いいでしょう。こちらへ」

少し考えた後にそう返答すると、手で車内に招かれる。

遊星が入ろうとすると、何かを思い出した素振りを見せ、後ろにいたほむら達を指差した。

「その二人は俺の連れだ。パスを共有すれば乗れるな？」

「ええ、もちろん構いませんよ。あなた達もどうぞ」

「まあ、とりあえず乗りましようか」

「だな。正直もう慣れたわ」

砂漠を走る、電車型のタイムマシン。

常識外れの出来事にも最早慣れていた二人は特に反応することもせず、遊星の後を付いて行った。

案内されるままに一同がたどり着いた車両には備え付けの椅子やテーブルがあり、カウンターもある事から食堂車の様であった。

「へー……中身は意外とまともな造りしてるんだな」

「疲れてるだろ、休んでおけ」

手近にあった席を遊星が指し、杏子とほむらがそこに座る。

教会での遭遇。別の時間への移動。ギエンとの決戦。一日で体験するにはあまりにも多く、大きすぎた。

全身を襲う疲労感に、二人は深く腰掛ける。

「はあ……色々ありすぎたわね、今日」

「全くだ。もうクタクタだよ」

男も座る中、遊星だけは食堂車を通り抜けて別の車両へ足を運ぼうとしていた。

「あなたは何処へ？」

「運転だ。元の時間に向けて走らせなきゃいけないんでな」
それだけ告げて、遊星は車両の奥へ消えていった。

この車両に残るは、ほむら達と男のみ。喋ることなどある筈もない。

程なくしてデンライナーが動き出すと、男がほむらに話しかける。

「あなた——暁美ほむらさんですね？」

「……名乗った覚えはないのだけれど」

「いえいえ、職業柄耳に入るのですよ。」

私、このデンライナーのオーナーをやっております。オーナー、とお呼びください」

「オーナー？ 管理してるって事か？」

「ええ。今は職なしですが」

どこまでも自分を出す事のない口調。

底が見えないだけに不気味さを感じさせるが、ほむらは意を決して尋ねる。

「門矢遊星とは知り合いみたいだけど、彼の事を知っているの？」

「いいえ、知りませんとも」

キツパリと。

オーナーは首を横に振った。

「……知らない？」

「ええ。彼と会ったのはこれで二度目です」

「それにしても、随分知ってる仲っぽかったけど？」

「私は彼の事を知りません。が、彼は私を知っている。それだけの話です」

「——もしかして、門矢遊星の中の人格と？」

「知っていましたか。彼の中には私の知り合いもいましてね、その縁を辿って彼は私を知ったようですよ」

門矢遊星の別人格。

いくつあるのかも分からないその中に知己がいるのなら、一応納得はできる。

「なあオッサン、あいつの中の人格ってのは何なのか知ってるのか？」

「ふむ……かつて悪と戦った者、とでも言いましょうか」

「悪……怪人達と、つて事？」

そこで突然、オーナーは窓の外を眺める。

何かあるのか、と釣られて二人も窓を覗いた。

オーナーの視線の先。砂漠を走る車窓からは、壮絶な風景が広がっていた。

「……ロボット？」

遠方に並び立っていたのは、巨大なロボット。その数は一つだけではない。何十もの別々の機体が、仁王立ちをする様に聳え立っていた。

その色は完璧に抜け落ち、その細部に至るまで傷跡が残っている。

まるで、死闘を繰り広げた後の様に。

「かつて、地球を狙ってきた数々の悪——それらと戦ってきた戦士たちがいきました。」

彼らは世から姿を消し、今は門矢遊星と名乗る男の中で眠りについていきます」

「……まさか、彼の中にいた人格達は元々別人だった？」

「そっちの方が筋は通るんじゃない？ 考えてみたら、あんな力が一人に集まってるって方がおかしいってもんだよ」

確かに、とほむらは頷く。

遊星の力はバリエーションが豊富だ。否、豊富すぎる。

ほむらが目撃しただけでも六つ、少なくとも遊星には別々の力がある。互いに互換性があるわけでもない、全く別の力を持つ戦士。一人に集約されているには、あまりに不自然すぎる。

「……だとすれば一つ疑問が浮かぶわ。彼らは何故門矢遊星の中に？」

元が別々の人間ならば、なぜ特定の一人に集まったのか。

自分たちの様に力を継いだか、それとも——奪ったか。

「それを無視しても、もう一つ疑問が残る。そもそも彼らや怪人は一体どこから来たの？」

「そりゃあ……あたしらと同じ、日本とか」

「存在を隠し通して？」

押し黙る杏子。

あれだけの力の持ち主が何人もいれば、不自然なニュースや噂程度は流れる筈。

いくらうまく正体を隠したところで、隠し切れるものではない。

「あと一つ。」

あのいざこざで有耶無耶になっていたけれど、ここ最近の私たちの記憶に齟齬が生じてる。

それを探していたらあの門矢遊星と出会い、そして私のことを狙う彼——ギエンにも会った。それはきつと、彼の正体にも繋がっている。

——これらの答え、あなたは全部知っているんじゃないかしら。

オーナーさん」

「……」

ただ目を閉じ、沈黙するオーナー。

態度から見ても、何かを知っているのは明白だった。

緊迫する空気。

その張り詰めた糸を切ったのは、車内に響き渡る汽笛だった。

「どうやら到着したようです」

「ちよつと、まだ聞きたい事は……！」

「またお会いする機会はあるでしょう。続きはその時に」

どうぞお帰りください、と言わんばかりに、オーナーは車両の出口を指す。

これ以上何も話すつもりはないという意味が感じられるその態度に、ほむらは大きく息を吐いた。

「……その時には、答えてもらおうよ」

「ええ、全て」

表情も変えず、ただ張り付けたような笑みだけを浮かべるオーナー。

胡散臭さをこれ以上ないほどに感じながらも、ほむらと杏子はその車両から出た。

「彼が何者か——ですか。いやはや、一体彼は誰なんでしょうねえ」

来た道に戻って行き、デンライナーに乗り込んだ時の出入り口に向かう二人。程なくして開かれた扉を発見し、そこからデンライナーを後にした

下車した先は、どこかのビルの屋上。

「これで着いた……のか？」

そこから見える景色は、間違いなく自分たちが知る見滝原そのもの。

街は壊れてなどおらず、ただただ平和な日常を過ごす人並みも見られる。

「どうやら帰ってきたみたいね」

「ああ。つたく、もうクタクタだよ」

記憶の欠損をきっかけに風見野市を駆け巡り、杏子の教会で別の時間に飛ばされ、別の時間のほむらと出会い——多くの未知の体験を今日一日で経験した二人は、既に疲労困憊だった。

「ま、無事に帰れてよかったよ。分からねー事だらけだったけど」

「ええ。でも、知りたいなら彼に問い詰めるしかないわね」

彼とは、他でもない。

オ・ナーのことだ。

彼は杏子に与えられたオーズの力——それだけでなく、この世界にかつていたとされる戦士達の存在を語った。

十中八九、真相を知る唯一の人物だ。

それ以外にも聞きたい事があった気がしたが——まあ、思い出せないのだから大した事ではないだろう。

すると、突然首筋にひんやりとした感触を感じるほむら。

何か落ちてきたような感触に空を見上げると、少し薄暗くなった空の所々にうっすらとした白が漂っていた。

「これは——」

「——雪か？」

帰路に着く彼女らを、遊星は遠く離れた別のビルから眺めていた。どこか気怠そうな様子の彼の手には、ベルトが握られている。知る人からは、ゼロノスベルト——そう呼ばれているベルトを。

「……これで種は撒けた」

ベルトを消滅させ、大きく息を吸う。

——既に準備は整った。あとやるべき事は一つだけ。

神妙な顔つきのまま、一言。

決意を固めるため、それを口に出した。

「次に会った時、それが最後だ——輝夜」